

小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅷ

二ツ梨グミノキバラ窯跡群

薬師遺跡Ⅶ次

薬師遺跡Ⅷ次

2012.3

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金事業により実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当は次のとおりである。
【二ツ梨グミノキバラ窯跡群】（平成 20、21 年度）
[調査地] 石川県小松市二ツ梨町
[調査原因] 農地平地化（個人事業）
[調査面積] 890m²
[調査期間] 2008.5.8～2008.6.20
2009.7.8～2009.8.31
[調査担当] 大橋由美子、下濱貴子
【薬師遺跡Ⅶ次】（平成 21 年度）
[調査地] 石川県小松市矢崎町
[調査原因] 個人住宅建設
[調査面積] 137m²
[調査期間] 2009.10.6～2009.10.28
[調査担当] 津田隆志
【薬師遺跡Ⅷ次】（平成 21 年度）
[調査地] 石川県小松市矢崎町
[調査原因] 個人住宅建設
[調査面積] 112m²
[調査期間] 2009.11.5～2009.12.1
[調査担当] 津田隆志
4. 試掘調査及び発掘調査は、（社）小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、一部、臨時作業員も補助員として雇用した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 23 年度に実施した。
6. 写真撮影については、遺構は各調査担当者が、遺物は大橋由美子が実施した。
7. 本書の執筆担当は、各担当者を目次に付記し、編集は下濱貴子が担当した。
8. 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書に示す座標は世界測地系（VII 系）に準拠している。
2. 本書に示す方位は、全て座標北である。

3. 本書に示す高度は標高（T.P.）である。
4. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
5. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目 次

I 位置と環境 ……………（宮田 明） ……………	1
II 二ツ梨グミノキバラ窯跡群（大橋） ……………	15
III 薬師遺跡Ⅶ次発掘調査 ……（大橋） ……………	43
IV 薬師遺跡Ⅷ次発掘調査 ……（大橋） ……………	55
写真図版 1～16 報告書抄録	

第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km² を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣 7 町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後 2 次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

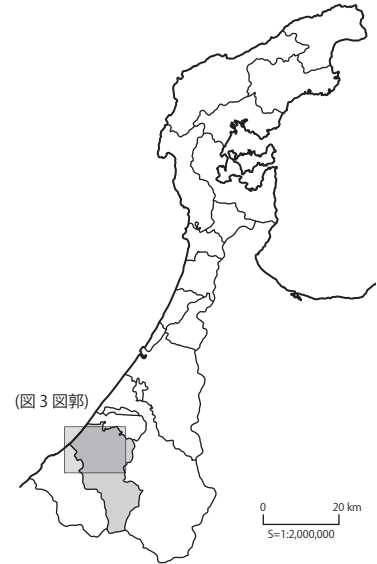
2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には 5～10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約 3 分の 2 が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

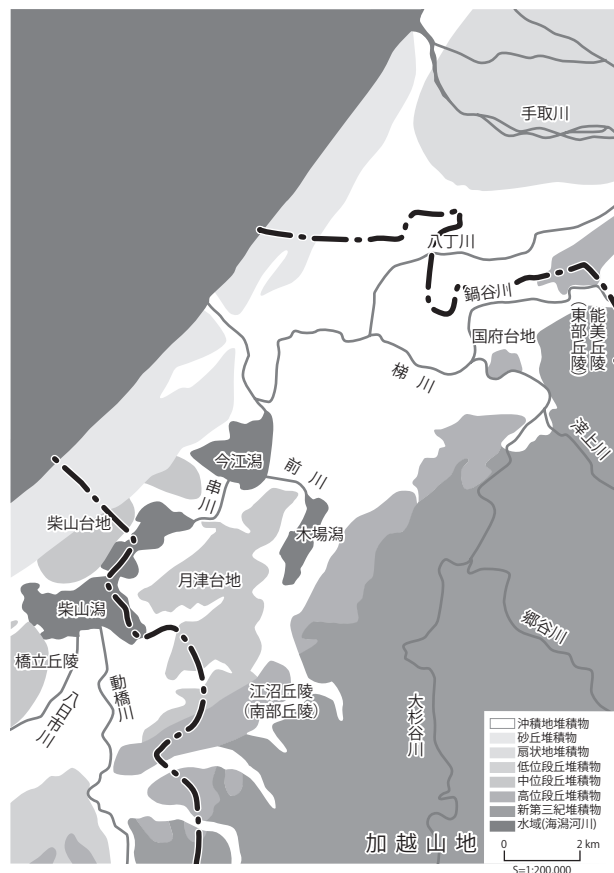
梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をめぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図 2 は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梯川と梯川デルタ

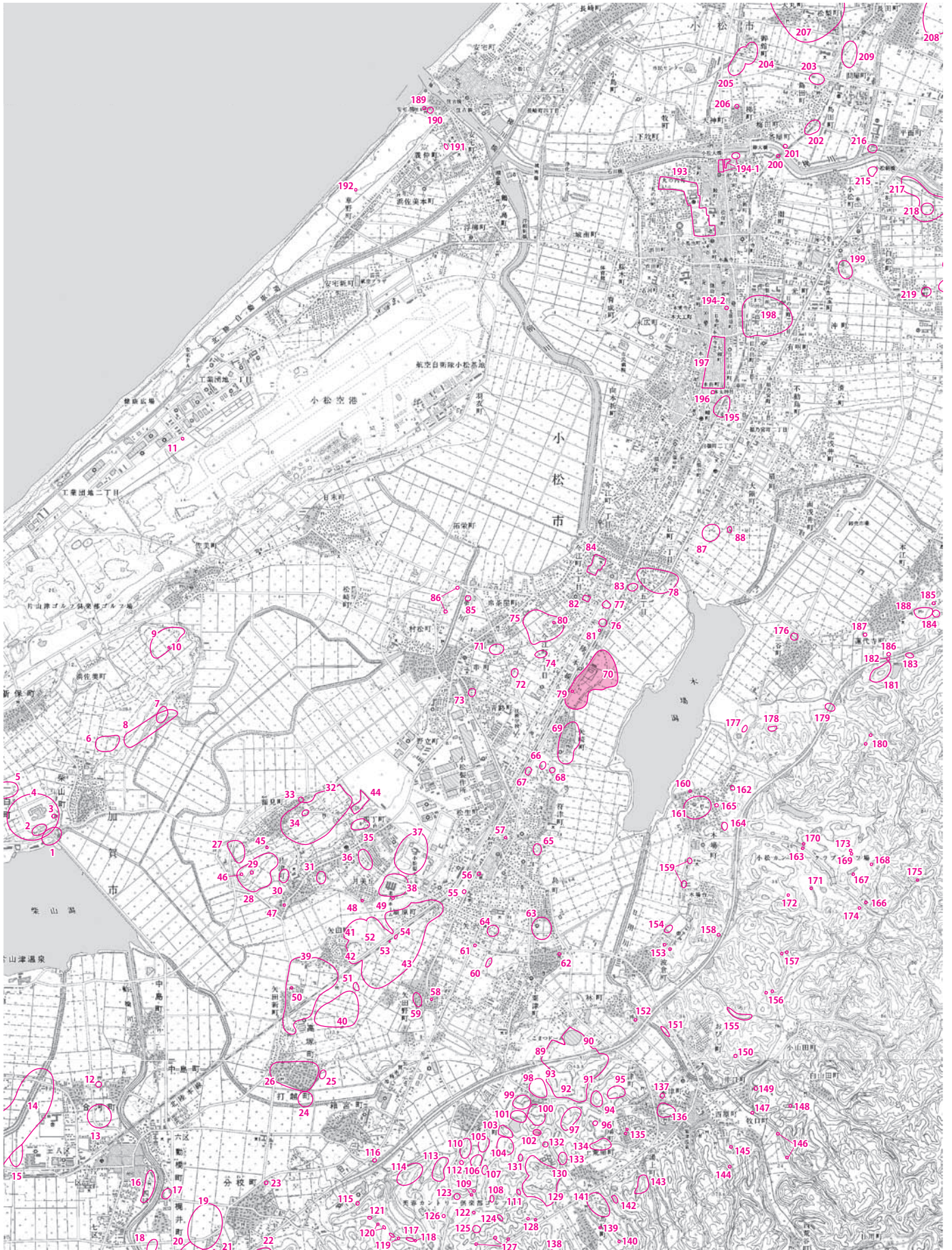
梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



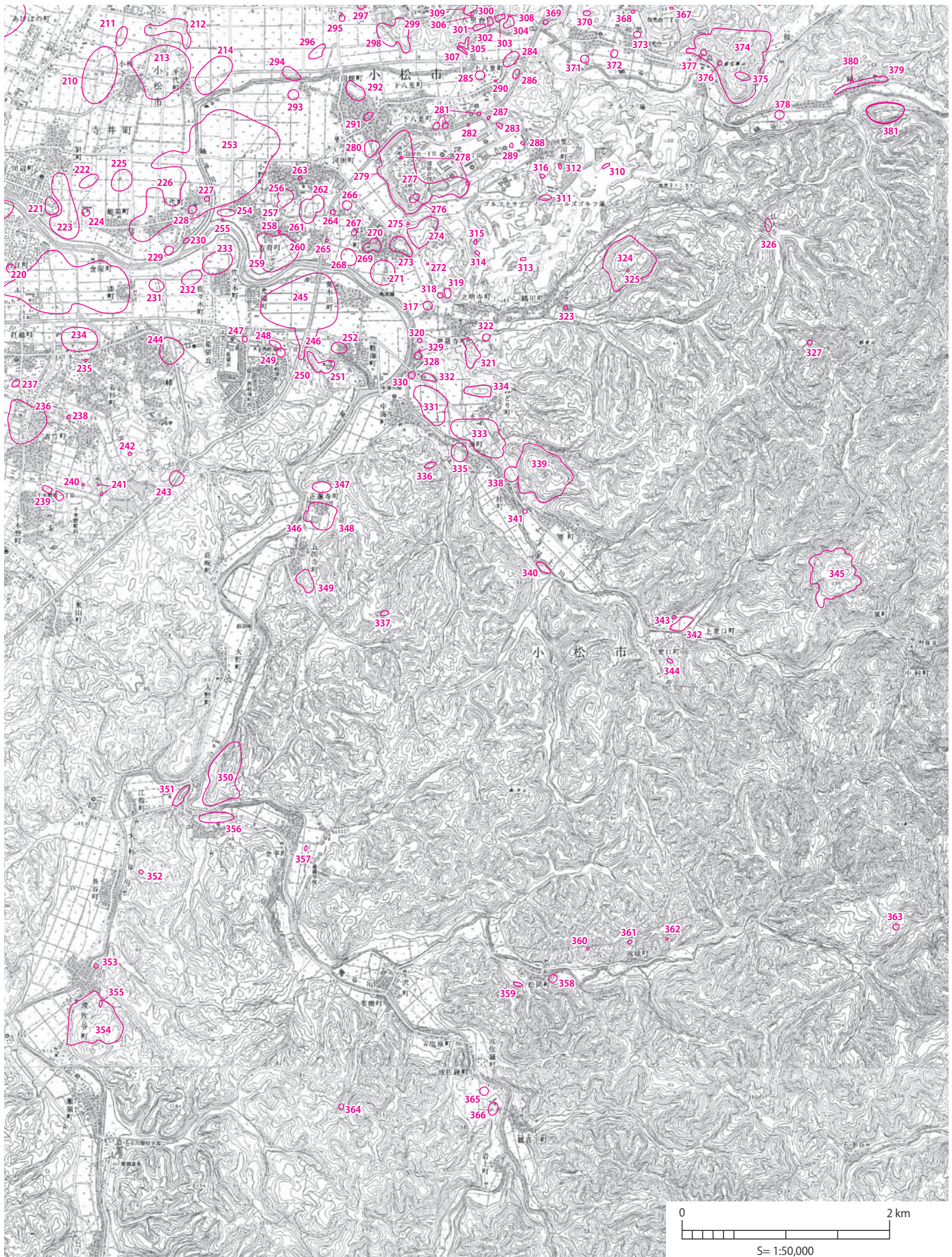
第 1 図 小松市の位置



第 2 図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡(276)や八里向山A～F遺跡(300～305)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしょやまA・B遺跡(いずれも図郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡(37)が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分佈的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡(198)が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡(図郭外)、大長野A遺跡(210)、漆町遺跡(220)、荒木田遺跡(245)のように、^{たかんどう}広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(276)や八里向山A遺跡(300)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳、和田山5号墳(いずれも図郭外)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群(277)や下開発茶白山古墳群(図郭外)など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在しないいずれかのみで構成される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡(226)で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳(44)や御幸塚古墳(82)などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群(52)のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4 古墳時代～古代の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6 世紀以降 8 世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7 世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7 世紀代の月津台地では、額見町遺跡 (32) の発掘調査以降、矢田野遺跡 (43)、薬師遺跡 (70) で L 字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8 世紀、在郷の財氏^{たから}関連遺跡とされる佐々木遺跡 (231) が異彩を放つほかは、概ね盛期が 9 世紀後半～10 世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図 3 には中宮八院 (319、322、331、338、347、348、349、352) を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡 (243)、八里向山 B 遺跡 (301)、里川 E 遺跡 (314) が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡 (349) では、8 世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6 世紀前半には二ツ梨東山古窯跡 (105) で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群 (100)、二ツ梨殿様池古窯跡群 (101) で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10 世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7 世紀前半に八里向山 J 遺跡 (地蔵谷古窯跡：309) で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群 (図郭外) に操業の拠点を移動する。8 世紀前半には和気古窯跡群 (図郭外) へさらに移動し、9 世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯 1 基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッシュウタン遺跡 (183) で製鉄に伴うと見られる製炭窯が 7 世紀後半～未ないし 8 世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡 (いずれも図郭外) が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡 (218)、漆町遺跡 (220) は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡 (218) は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡 (漆町遺跡：220) 周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5 中世の遺跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡 (339)、岩倉城跡 (345)、波佐谷城跡 (354) など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

1640（寛永17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、近年になって大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化された。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町に考古学のメスが入りつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括り而言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

表1 遺跡地名表

No	名 称	種 別	時 代	備 考
1	柴山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一白A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡A地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A地点）	集落跡	弥生	
	柴山出村遺跡（B地点）	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日末経塚	経塚	不詳	
12	合河遺跡	散布地	不詳	
13	動橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	猫橋遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～中世	
15	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	動橋堡跡	堡塁跡	中世（室町）	
17	梶井衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	梶井遺跡	散布地	古代	
19	分校A遺跡	散布地	古墳	
20	分校B遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校山王古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分校カン山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、方墳6

第 I 章 位置と環境

No	名 称	種 別	時 代	備 考
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越 A 遺跡	散布地	縄文	
25	打越 B 遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城館跡	中世 (安土桃山)	
27	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶白山 A 遺跡	散布地	不詳	
	茶白山 B 遺跡	散布地	縄文	
29	茶白山祭祀遺跡	その他 (祭祀)	古代 (奈良)	
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津 A 遺跡	散布地	古代 (奈良)	
32	額見町遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古墳～中世	
33	額見神社前 A 遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
34	額見神社前 B 遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
35	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田新遺跡	集落跡	古代 (奈良)	
40	刀何理遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古代～中世	
41	矢田 A 遺跡	散布地	縄文	
42	矢田 B 遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	白のほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶白山古墳	古墳	古墳	円墳、2 段築成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室、家形石棺
51	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田借屋古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
55	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	養輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	符津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代 (平安)	
60	下粟津 A 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 7～8
61	島経塚	経塚	不詳	
62	下粟津 B 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2
63	島遺跡	散布地	弥生～古墳・中世	
		集落跡	古墳～古代	
64	島 B 遺跡	散布地	古代	
65	島 C 遺跡	散布地	古墳	方墳?
66	符津 A 遺跡	散布地	縄文	
67	符津 B 遺跡	散布地	縄文	
68	符津 C 遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	薬師遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	串カンノヤマ A 遺跡	散布地	古代 (奈良)	
72	串カンノヤマ B 遺跡	散布地	古墳	
73	串カンノヤマ C 遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土百遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎座貝塚	貝塚	縄文	
79	矢崎 B 古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土百古墳	古墳	古墳	
82	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴 4
84	御幸塚城跡	城館跡	中世	主郭と曲輪の一部

No	名 称	種 別	時 代	備 考
85	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	燻瓦窯
87	大領遺跡	散布地	古代	
88	浅井巖古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡（林タカヤマ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林オオカミダニ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯2、土師器坑1、南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林製鉄跡）	生産遺跡	古代	製鉄炉2、製炭窯4、鍛冶炉2、鋳型坑2
91	戸津5・12号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯2、南加賀古窯跡北群
	戸津シンブザワ製鉄跡	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉4、製炭窯3
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代、中世（鎌倉）	須恵器窯36（瓦陶兼窯5）、土師器坑19、製炭窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
93	戸津六ヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯7、製炭窯1、南加賀古窯跡北群
94	戸津1号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯
	戸津ワクダニ遺跡	生産遺跡		製鉄炉1、製炭窯1
95	戸津ショウガダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
96	戸津2号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	戸津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯2、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯12、土師器坑28、製鉄炉1、製炭窯2、南加賀古窯跡北群
99	二ツ梨岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須恵器窯4
100	二ツ梨岡向山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須恵器窯12（埴陶兼窯2、瓦陶兼窯2）、南加賀古窯跡北群
101	二ツ梨殿様池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（平安）	須恵器窯（埴陶器兼窯）3、土師器坑3、南加賀古窯跡北群
102	二ツ梨グミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器坑4、須恵器窯、南加賀古窯跡北群
103	二ツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯3、南加賀古窯跡北群
104	二ツ梨峠山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯8、南加賀古窯跡北群
105	二ツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯5、南加賀古窯跡北群
106	二ツ梨脇釜遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯1、製鉄1、製炭窯1、南加賀古窯跡北群
107	二ツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯1、製鉄1、南加賀古窯跡北群
108	二ツ梨奥谷古窯跡群	生産遺跡	古代（平安末）	須恵器窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
109	二ツ梨奥谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
110	二ツ梨釜谷古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯6（瓦陶兼窯1）、南加賀古窯跡北群
111	二ツ梨カセイデ古窯跡群	生産遺跡	不詳	須恵器窯2、南加賀古窯跡北群
112	矢田野向山古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯6、南加賀古窯跡北群
113	矢田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯4、加賀窯2、製鉄3、南加賀古窯跡北群
114	箱宮ドウガヤチ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯6、加賀窯2、南加賀古窯跡北群
115	箱宮A遺跡	散布地	中世	
116	箱宮B遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷1～2号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯2
118	小天王谷1号製鉄跡（天王山1号製鉄跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷2～3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	那谷1号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯
123	矢田野カナクソダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄3
124	矢田野1～2号横穴	横穴墓	不詳	
125	那谷1～5号横穴	横穴墓	不詳	
126	那谷6号横穴	横穴墓	不詳	
127	那谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉3
128	上荒屋ユルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
129	上荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯4、製鉄3、南加賀古窯跡北群
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯4～5、製鉄2、横穴1、地下式坑1、南加賀古窯跡北群
131	上荒屋サンマイダニヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（奈良）	須恵器窯4、南加賀古窯跡北群
132	上荒屋キダシ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯2、南加賀古窯跡北群
133	上荒屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯1、加賀窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
134	上荒屋オジヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯4、製鉄炉1
135	戸津1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世（室町）	
137	戸津八幡神社前遺跡	散布地	古代～中世	
138	上荒屋那谷口遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
139	馬場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
140	馬場タニヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1

No	名 称	種 別	時 代	備 考
141	上荒屋ホウジウヨヤマ遺跡	生産遺跡、社寺跡、墳墓	古代(平安)～中世	須恵器窯5、製鉄炉2、墳墓、南加賀古窯跡北群
142	上荒屋ハカタンニ古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
143	湯上谷古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯10、製鉄炉2
144	西原フルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカナクン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
146	牧口キドラ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
147	牧口中世墓跡	墳墓	中世(鎌倉)	牧姫塚比定地
148	白山田ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	井口神社製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	井口エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	井口遺跡	散布地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世(鎌倉)	
153	津波倉ホツジ遺跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式坑6、2基調査
154	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
155	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
156	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
157	小山田オクサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
158	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯複数
159	木場古墳群	古墳	古墳	円墳4
160	木場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
161	池田城跡	城館跡	不詳	
162	木場温泉遺跡	散布地	縄文	
163	木場A遺跡(木場遺跡H地区)	生産遺跡	古代(奈良)	製鉄炉1、製炭窯2
164	木場B遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
165	木場C遺跡	散布地	弥生	
166	木場遺跡A地区(1号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯3、鉱滓散布地
167	木場遺跡B地区(2号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉2、製炭窯2
168	木場遺跡C地区(3号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
169	木場遺跡D地区(4号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯1
170	木場遺跡E地区(5号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡F地区(6号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
172	木場遺跡G地区(7号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
173	木場遺跡D地区(8号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴1
174	大曲遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
175	長谷瀧油屋の山遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
176	三谷遺跡	散布地	縄文	
177	三谷B遺跡	散布地	弥生～古墳	
178	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
179	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
180	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、鉱滓散布地
181	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な砦跡か
182	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	製鉄炉1、製炭窯1
183	蓮代寺ガッショウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯3、鉱滓散布地
184	蓮代寺A遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
185	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶
186	蓮代寺窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
187	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	燻瓦窯
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	渋川氏菩提寺「蓮台寺」比定地
189	安宅関跡	その他	不詳	県指定史跡
190	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
191	安宅中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
192	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の葺石とも、現存せず
193	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡
194-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・泥町の町屋跡
194-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	寺町遺跡	生産遺跡	中世(室町)	鍛冶
196	多太神社境内遺跡	散布地	中世(室町)	埋納銭出土地
197	本折城跡	城館跡		本折氏居館跡伝承地の一
198	八日市地方遺跡	散布地 集落跡	縄文・中世 弥生	環壕集落
199	上小松遺跡	散布地	古代(平安)	
200	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
201	梯川鉄橋B遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
202	島田A遺跡	散布地	古墳～古代	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
203	島田 B 遺跡	散布地	古墳	
204	御館遺跡	城館跡	中世 (室町)	
205	銭畑遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・蛭川新七郎重親居館伝承地
206	梯遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
207	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
209	長田南遺跡	散布地	弥生・古代 (平安)	
		集落跡	中世 (室町)	
210	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
212	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代 (平安)	
213	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
215	平面梯川遺跡	集落跡	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
216	平面梯川 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
217	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	白江堡跡	城館跡	中世 (室町)	白江新助景盛居館伝承
219	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
220	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一針遺跡	散布地	縄文	
222	一針 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一針 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定地坊跡	社寺跡	中世 (室町)	
225	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
226	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳 6
227	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	千代城跡	城館跡	中世 (室町)	
229	千代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡 (奈良)
232	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
236	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	吉竹 B 遺跡 (吉竹遺跡 19 地区)	散布地	古墳	旧河道の堰跡
238	吉竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
239	千木野遺跡	散布地	縄文	
		古墳 (A) 遺跡	古墳	方墳 8
		千木野 (B) 遺跡	集落跡	古墳
240	幡生 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
241	釜谷古墳・釜谷 2 号墳	古墳	古墳	切石積横穴式石室
242	若杉オソボ山 1 号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
243	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
244	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代 (奈良)・中世 (鎌倉)	
		その他の墓	古代 (平安)	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳 8、木芯粘土室
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡 6 号墳を削平して築いた連房式登窯
245	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
246	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
247	大谷口遺跡	散布地	弥生	
248	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
249	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軽海中世墓群	その他の墓	中世 (室町)	集石墓 9
251	軽海廃寺	社寺跡	古代 (平安)	大興寺伝承地
252	西芳寺遺跡	社寺跡	古代 (平安)	西芳寺伝承地
253	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
254	古府遺跡	集落跡	古代 (平安)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
255	古府フンド遺跡	散布地	古代（平安）	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
258	古府横穴	不詳	不詳	
259	古府シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
260	南野台遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
262	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
263	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
264	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が茶毘に付された地とされる
265	埴田の虫塚	その他	近世末	害虫の菩提供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
266	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
267	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
268	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
269	埴田フルカフ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（室町）	
271	埴田遺跡	散布地	古代	
272	埴田塚	不詳	不詳	
273	埴田後山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木棺直葬、木芯粘土室
274	埴田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
275	御菩提所古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山 10～12 号墳が重複
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓、河田山 1 号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木棺直葬、木芯粘土室、切石積横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式坑、河田山 54 号墳の南に開口
278	河田山 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群、河田山 60 号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
279	河田 B 遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
280	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
281	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑 6、横穴 1、不明 1、3 地点で計 8 基
282	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
283	上八里横穴群	横穴墓	中世（室町）	横穴 11 基
284	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
285	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
286	上八里 B 遺跡	散布地	古代（奈良）	
287	上八里 C 遺跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
288	上八里 D 遺跡	散布地	古代（奈良）	
289	上八里 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
290	上八里 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
293	下出地割遺跡	散布地	不詳	
294	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
295	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
296	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
297	狭野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
298	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
299	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
300	八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
301	八里向山 B 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
302	八里向山 C 遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳 1、木棺直葬
303	八里向山 D 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳 2、木棺直葬
304	八里向山 E 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳 1
		集落跡	古代	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
305	八里向山F 遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳 10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世 (室町)	集石墓 1、横穴 3
306	八里向山G 遺跡	散布地	弥生・古代 (平安)	
307	八里向山H 遺跡	その他の墓	中世 (鎌倉)	集石墓群、96 基調査
308	八里向山I 遺跡	生産遺跡	古代 (奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
309	八里向山J 遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
310	里川 A 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯 2、製炭坑約 20
311	里川 B 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
312	里川 C 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
313	里川 D 遺跡	散布地	縄文	
314	里川 E 遺跡	社寺跡	古代 (平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
315	里川 F 遺跡	社寺跡	古代 (平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
316	里川 G 遺跡	散布地	不詳	
317	遊泉寺・クボタ A 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	
318	遊泉寺・クボタ B 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	社寺 (隆明寺) 又は城館伝承地
	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代 (平安)	須恵器窯 (瓦陶兼窯)
319	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
	隆明寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
320	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	
321	宮の奥墳墓群	その他の墓	(平安)	墳墓 4、3 基調査、2 号墓は鎌倉時代に経塚に利用された?
322	涌泉寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
323	常德寺跡	社寺跡	中世 (室町)	一向一揆・宇川常徳の居宅跡とも
324	鶴川堡跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川常徳の詰城伝承地
325	鶴川横穴	不詳	不詳	地下式坑?
326	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世	
327	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
328	仏生寺跡	社寺跡	中世	
329	仏生寺塚	経塚	中世	
330	ブッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳 2、木芯粘土室
331	中海 B 遺跡	集落跡	古墳~中世	
	(伝) 長寛寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院、地名伝承のみ
332	中海 C 遺跡	散布地	古代 (平安) ~ 中世	
333	中海遺跡・岩淵遺跡	散布地	縄文	
	岩淵上野遺跡	散布地	旧石器	
334	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
335	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
336	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明、5 基開口とされる
337	赤穂谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 9、地下式坑 4
338	善興寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院
339	岩淵城跡	城館跡	中世	
340	仏ヶ原城跡	城館跡	中世	
341	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代 (平安)	小松市指定史跡
342	麦口遺跡	散布地	縄文	
343	麦口中世墓跡	その他の墓	中世	
344	下麦口横穴群	横穴墓	不詳	横穴 3
345	岩倉城跡	城館跡	中世 (室町)	
346	椎の木山遺跡	散布地	縄文	
347	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
348	護国寺跡	社寺跡	古代 (平安)	中宮八院
349	松谷廢寺	社寺跡	古代 (奈良)	8 世紀前半に遡る古代山林寺院
	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
350	平野堡跡	城館跡	中世 (室町)	一向一揆・平野某詰城伝承地
351	江指城跡 (山神山砦跡)	城館跡	中世 (室町)	
352	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
353	波佐谷遺跡	散布地	中世 (室町)	
354	波佐谷城跡	城館跡	中世 (室町)	一向一揆・宇津呂丹波守詰城伝承地
	(伝) 波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世 (室町)	
355	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 13、地下式坑 5
356	六橋遺跡	集落跡	縄文	
357	麻島尾谷遺跡	散布地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世 (室町)	
359	火灯山横穴群	横穴墓	不詳	横穴 3
360	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
361	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
362	池城経塚	経塚	中世 (室町)	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
363	曾山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ腰遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
366	観音下城跡	城館跡	不詳	
367	和気後山谷奥遺跡	生産遺跡	古代(平安)	土師器焼成坑、能美古窯跡南群 後山谷支群
368	和気後山谷 2 号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末~平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
369	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群
370	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和気矢口 A 遺跡	散布地	縄文	
372	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
373	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
374	虚空蔵城跡	城館跡	中世	
375	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺島古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
377	寺島薬師坂古墳	古墳	古墳	
378	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
379	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
380	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
381	鍋谷堡跡	城館跡	不詳	

参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992) 石川県遺跡地図
 石川県立埋蔵文化財センター(1986) 漆町遺跡 I
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 漆町遺跡 II
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 辰口西部遺跡群 I
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 白江梯川遺跡 I
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡 III
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡 IV
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 白江梯川遺跡 II
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 蓮代寺地区遺跡 I
 石川県立埋蔵文化財センター(1990) 小松市高堂遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1993) 能美丘陵東遺跡群 I
 石川県立埋蔵文化財センター(1995) 石川県小松市荒木田遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1997) 能美丘陵東遺跡群 II
 石川県立埋蔵文化財センター(1998) 能美丘陵東遺跡群 III
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群 IV
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群 V
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
 (財) 石川県埋蔵文化財センター(2006) 小松市矢田野遺跡群
 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会(1993) 小松市林遺跡
 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会(1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
 石川考古学研究会(1988) 石川县城館跡分布調査報告
- ウ 上野 與一(1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 軽海用水誌編纂委員会(1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77. p201-221., 石川県
- コ 小松市教育委員会(1988) 念仏林遺跡, 石川県
 小松市教育委員会(1990) 湯上谷古窯跡, 石川県
 小松市教育委員会(1990) ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県
 小松市教育委員会(1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県
 小松市教育委員会(2000) 矢田借屋古墳群, 石川県

- 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. ニツ梨豆岡向山窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II, 石川県
- 小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
- 小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
- 小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V, 石川県
- 小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡. 薬師遺跡 V 次, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- 夕 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶白山古墳群, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶白山古墳群 II, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
- テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- へ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343., 石川県
- 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第Ⅱ章 ツツ梨グミノキバラ窯跡群発掘調査

第1節 調査に至る経緯

小松市ツツ梨町在住の木本ツヨ氏は、同町所在で氏の所有農地の平地化を計画し、これに関して問い合わせを行った。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地（ツツ梨豆岡向山窯跡群とツツ梨グミノキバラ窯跡群）に含まれていることと、事業面積が4,650㎡であり、3,000㎡を超えていたため、試掘調査がまず必要となる旨を伝えた。

平成19年10月16日付けで農地平地化事業に伴い埋蔵文化財の取り扱いについての協議書と試掘依頼書が提出された。同年10月23日に提出された書類に対し書面で回答し、平成19年10月29日から11月13日にかけて試掘・確認調査を実施した。

試掘調査では、地内に試掘溝を15カ所設け、人力により掘削した。この結果、トレンチ13で土師器焼成坑や竪穴状遺構を、トレンチ11南側で遺構覆土を、トレンチ7で粘土採掘坑の可能性のある土層を確認した。埋蔵文化財が確認され、事前に発掘調査を実施するなどの埋蔵文化財に対する保護措置が必要であること、具体的な保護措置については今後協議して決定するとして試掘調査報告を11月19日付けで通知した。

試掘調査で埋蔵文化財が確認されたのは、当該地の北端斜面と南東谷部の大きく2カ所にあたる。北端斜面はツツ梨豆岡向山窯跡群内に、南東谷部はツツ梨グミノキバラ窯跡群内と判断された。南東谷部においては、工事計画が盛土であり、その高さが3mを超えるものになることから保護措置の基準外となるため、発掘調査が必要であると判断された。よって、谷部690㎡については平成20年度以降に発掘調査を実施、個人の農地開発であるため文化庁補助金が摘要されることとなった。北端斜面の埋蔵文化財については現状保存することとなった。

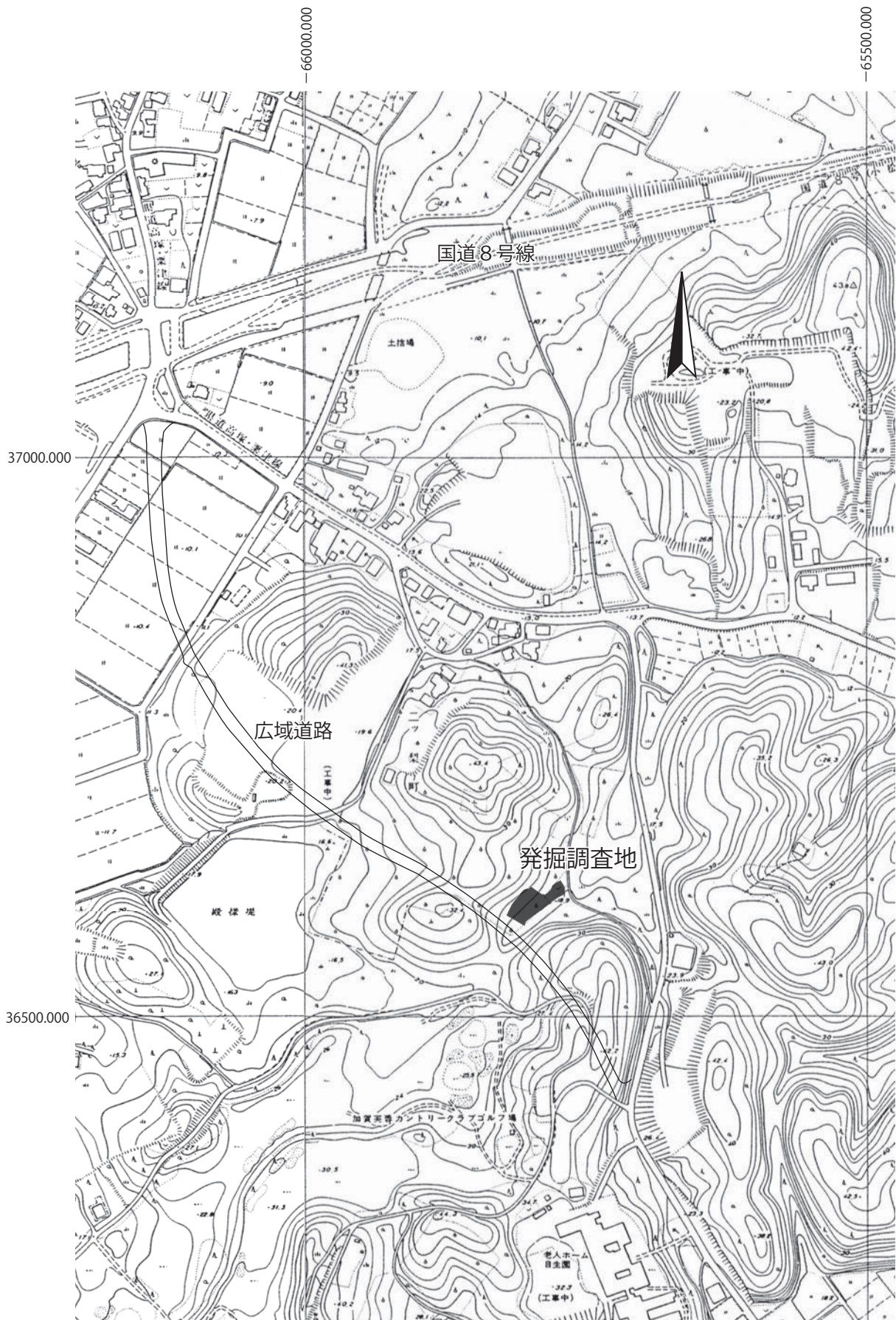
平成20年4月21日付けで事業主から発掘調査依頼書が提出され、4月24日付けで協定書の締結を行い、5月8日より発掘調査を実施した。調査の経過については後にも詳細を述べるが、調査時に、調査区東端で検出した粘土採掘坑が北側へ延びることが判明した。本年度、このまま調査することができなかつたため、事業者と協議し、来年度に北側の200㎡を調査することが決まった。この区域は、試掘調査段階で試掘溝設置位置から外れた場所であった。発掘調査は6月20日に終了した。6月30日付けで、発掘調査の結果について書面通知し、平成20年度区域の調査は完了した。

翌年は、平成21年6月11日付けで北側200㎡区域分の発掘調査依頼書が提出された。6月19日付けで協定書の締結を行い、7月8日より発掘調査を実施、8月31日に終了した。9月7日付けで事業者に対し発掘調査の結果について通知し、調査完了に至った。

第2節 調査の経過

1. 現地調査の概要

[平成20年度調査] 重機により表土除去掘削を行った。その後、人力により掘削を行い、精査・遺構プラン検出を行った。試掘調査で示されていた通り、トレンチ11の遺構覆土は土坑であると判明しSK2とした。トレンチ7で確認されていたものは谷部への流土堆積層と判明した。調査区南東で検出したものは、プランとしては巨大であったが、SK1として、アゼを設定して掘削を行っていったところ、底面に著しい硬化面と深い竪坑の存在が明らかとなった。粘土を持ち出すための作業空間であるテラスが設けられていたと判断したが、この竪坑が北側へ続いていることがわかり、どこまで続



第4図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 調査位置図 (S=1/5000)

くのか見極めるため、調査区を拡大して表土除去を行い、続けてアゼを設け、壺掘りやトレンチにて土層や竪坑立ち上がりを確認する作業を行った。その結果、竪坑の存在する範囲が15 m先にある農道へ及び、深さも2 mに至ることがわかり、本年度の予定を超えたものであることが判明したため、この区域は平成21年度に調査することとなった。

なお、平成20年度は、大型土坑1基、小型土坑1基、竪坑2基が検出された。

[平成21年度調査] 調査区のほぼ全区域が遺構であることが確認され、深さも伴うため、土層を確認するためのアゼを前年度に続けて設け、可能な限りの範囲で、21層レベルの深さまで重機による掘削を慎重に行った。この方法は段階的に必要と思われた時点でその都度行った。その後、人力による精査・掘削を行い、遺構の立ち上がりを確認していった。梅雨に入り、掘削部分が完全なプールになるなど調査に困難を極めたが、最終的に、昨年度との続きのものも含め7基の竪坑が検出された。また、精査の段階において西北から南東へ続く波板状凸凹面を検出し、周囲に硬化面を確認、道路状遺構と判断した。これがSK1の硬化テラス面と繋がったため、道と作業空間、粘土掘削坑が連結し関連づく事例として興味深いものとなった。

なお、平成21年度に検出された遺構は、竪坑7基、道路状遺構1基である。

2. 調査方法

[平成20年度調査] 表土は重機で掘削し、任意のグリッドを5 m間隔で設け、人力による掘削を行った。土層を観察するため必要な箇所にアゼを設定して掘削した。土層断面図、遺構平面図は1/20縮尺ですべてトータルステーションにより作成し、場合により1/10縮尺とした。写真撮影は、ネガ・ポジ・モノクロフィルムとデジタルカメラを用い、土層断面や遺構完掘撮影を主として、この他必要と思われるものを適宜撮影した。遺物については、層毎に一括として取り上げた。また、包含層遺物については、グリッド毎に一括で取り上げた。なお、基準杭については、ニツ梨豆岡向山窯跡群調査時に業者委託した基準点(世界測地系)を担当者がトータルステーションにより移動させ、杭打ち時にしっかりと手応えのある地盤と判断し打ち付けた、う6・え6・お6グリッド杭を当調査区の基準杭とした。う6杭(36602.452、-65805.613)、え6杭(36598.634、-65802.391)、お6杭(36594.817、-65799.159)。

[平成21年度調査] 昨年度調査から1年が経過していたため、基準杭・グリッド杭の位置がいきているかを確認した。重機と人力で掘削を行い、図面縮尺は昨年準じてトータルステーションにて作成した。写真撮影、遺物の取り上げ方法も昨年度に準じた。

3. 調査の経過

[平成20年度調査]

平成21年5月8・9日 発掘調査開始。重機による表土除去、9日午前完了。

5月13日 作業員による掘削・精査開始。

5月16日 基準点測量およびグリッド設定、同日プラン検出作業。

5月21日 SK1 検出。調査範囲を北東へ少し拡張することを決定する。

5月22日 SK1 北東側の重機による表土除去を実施し、人力による精査・プラン検出を行う。翌日、拡張分のグリッド設定を行い、掘削開始。

5月27日 SK2 を掘削し、土層断面図作成・写真撮影。

5月28日 SK1 土層断面図作成・写真撮影開始。SK2 完掘、平面図作成し写真撮影を行う。

- 6月 2日 遺構が更に北東へ延びることが判明。
- 6月 3日 調査区を今後どう扱うか話しあう。拡張部分の掘削は来年度に行うこととし、本年度は遺構範囲のみ確認することを決定する。
- 6月 4日 さらになる拡張区の重機による表土除去を実施。
- 6月 9日 調査区内ピット半掘作業開始。
- 6月12日 SK1 掘削時に竪坑検出（竪坑1・2）。
- 6月16日 調査区内ピット完掘作業。
- 6月18日 遺構完掘。完掘撮影、調査区内のコンタ図作成。
- 6月19・20日 SK1 と竪坑1・2平面図作成。器材等撤去し、調査を完了する。

[平成21年度調査]

- 平成21年7月 8日 発掘調査開始。
- 7月13日 現場排水作業。
- 7月15日 掘削開始。
- 7月23日 道路状遺構検出。排水が進まずポンプ賃借を決定。
- 7月30日 竪坑3を検出、掘削開始。土層断面図作成。
- 7月31日 遺構が深いため、重機による掘削を実施する。天候不順続く。
- 8月12日 竪坑4掘削開始。この後竪坑を次々と検出しながら、土層断面図の作成や写真作成及び掘削を繰り返す。
- 8月17日 竪坑4・5掘削開始。
- 8月20日 竪坑6・7掘削開始。
- 8月24日 道路状遺構掘削開始。
- 8月25日 遺構平面図作成開始。竪坑7を苦勞の末、完掘。
- 8月26日 竪坑1・5の半分を掘削。
- 8月27日 竪坑8も完掘し、掘削作業すべて完了。完掘状況を撮影。
- 8月28日 遺構平面図作成完了。
- 8月31日 器材等撤収し、発掘調査を完了する。

4. 出土品整理

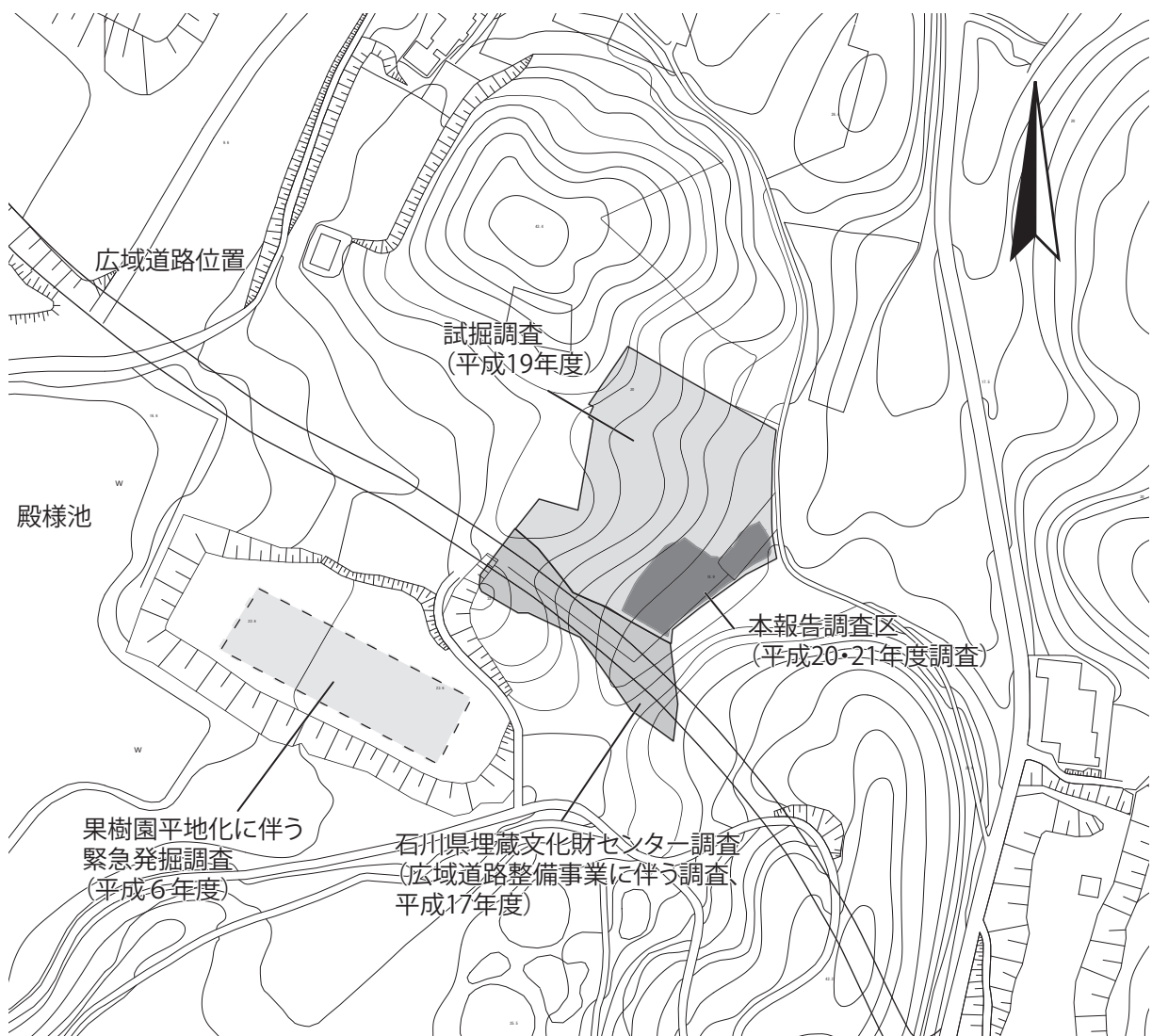
出土品整理は、平成23年度に実施した。整理作業員により洗浄・注記・分類・接合作業を行い、実測・計測作業を調査員と整理作業員で、トレースはデジタルで調査員・臨時職員が行った。

第3節 調査の概要

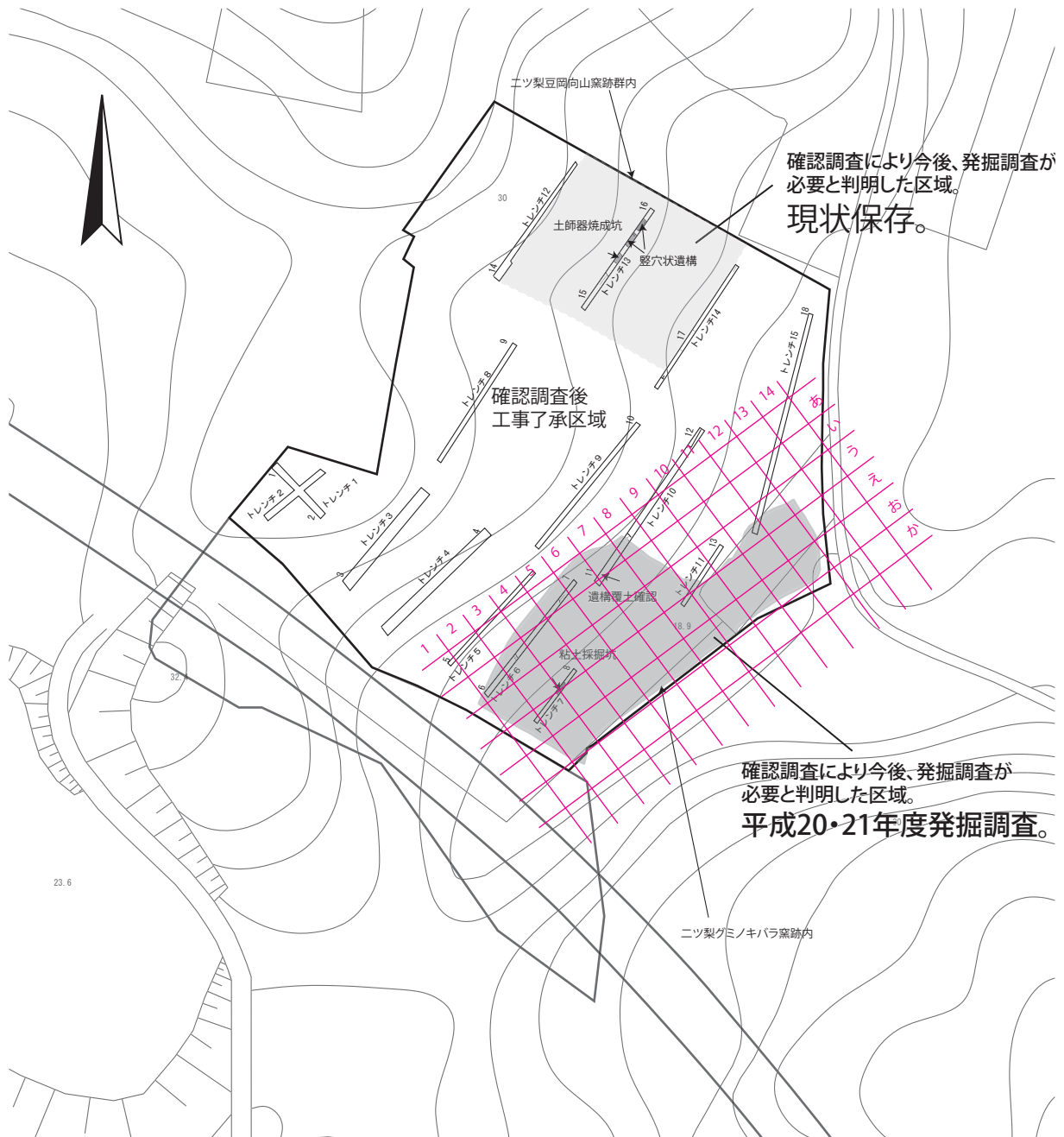
二ツ梨グミノキバラ窯跡群の所在地の字名は、「グミノキバラ（茱萸木原）」と称されていることから、グミの木が茂る里山として伝え呼ばれてきたと予想することができる。当遺跡は、低丘陵部内に位置するとはいえ、二ツ梨町から戸津町へのびる大谷からの下谷・枝谷と、周囲の小高い山々に囲まれた谷にあたる。そのため、山々に降り注いだ雨水が谷に溜まり、陶土としての粘土を形成してきたものと考えられる。周辺に在住する古老の話では、現代までこのような良質の白色粘土を採取し三味土としたり、現代瓦の原料として利用してきたということであるが、そういった粘土採取も現在は少ないという。

当遺跡の周囲には多くの窯跡群が密集して存在しており、南加賀窯跡群として周知されるところである。ただし、当遺跡の発見は平成6年とまだ新しいものである。それまでは周知の埋蔵文化財包蔵地となっておらず、果樹園造成工事の掘削中に埋蔵文化財パトロールが発見に至った。地権者が埋蔵文化財に対しての知識が希薄であったことからこういった事態を招いたものであった。そこで工事を中断、緊急発掘調査を実施した。かろうじて破壊を免れた残存する遺構調査を行い、散乱する大量の遺物を回収した。この時、土師器焼成坑4基（9世紀前半）と須恵器廃棄された灰原（8世紀後半、9世紀前半、9世紀後半の3時期）が検出された。窯跡は破壊を受けてしまったと考えられ検出されなかったが、掘削土からは大量の須恵器片が認められた。回収した遺物はパンケース（内法寸法 64 × 38 × 14.5cm）180箱に至った。

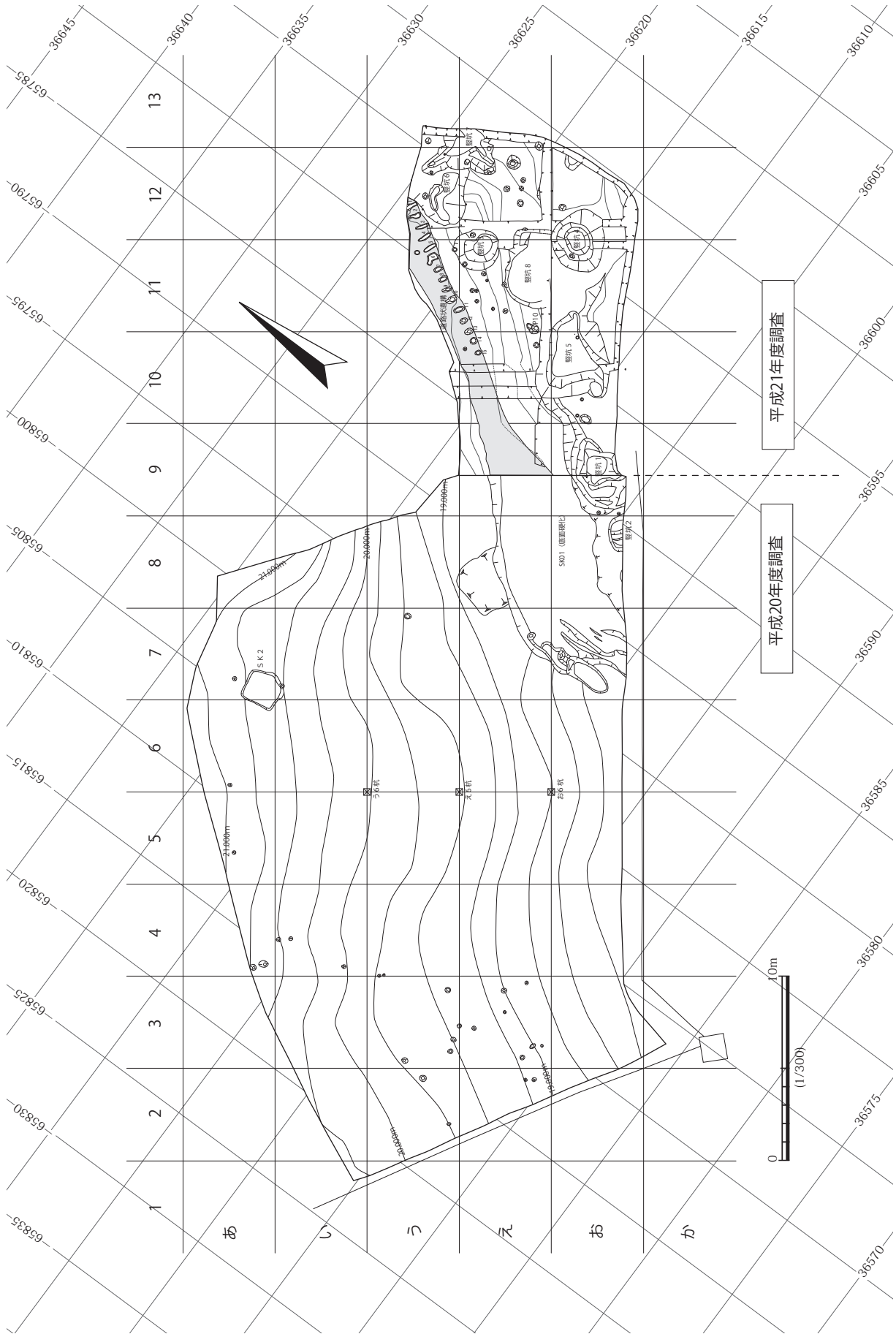
次に当遺跡が調査されるのは、平成18年である。財団法人石川県埋蔵文化財センターが広域農道整備に伴い発掘調査を実施したものである。この結果、9世紀後半を主体とする焼土坑4基、粘土採掘坑10基、井戸などが検出され、焼土坑の3基に製炭土坑の可能性を、粘土採掘坑1基に井戸転用の可能性を示した。粘土採掘坑の検出は、南加賀窯跡群の中でニツ梨一貫山窯跡群に次ぐ2件目の事例となり、谷部における粘土採掘坑の実態がまた1つ明らかとなった。



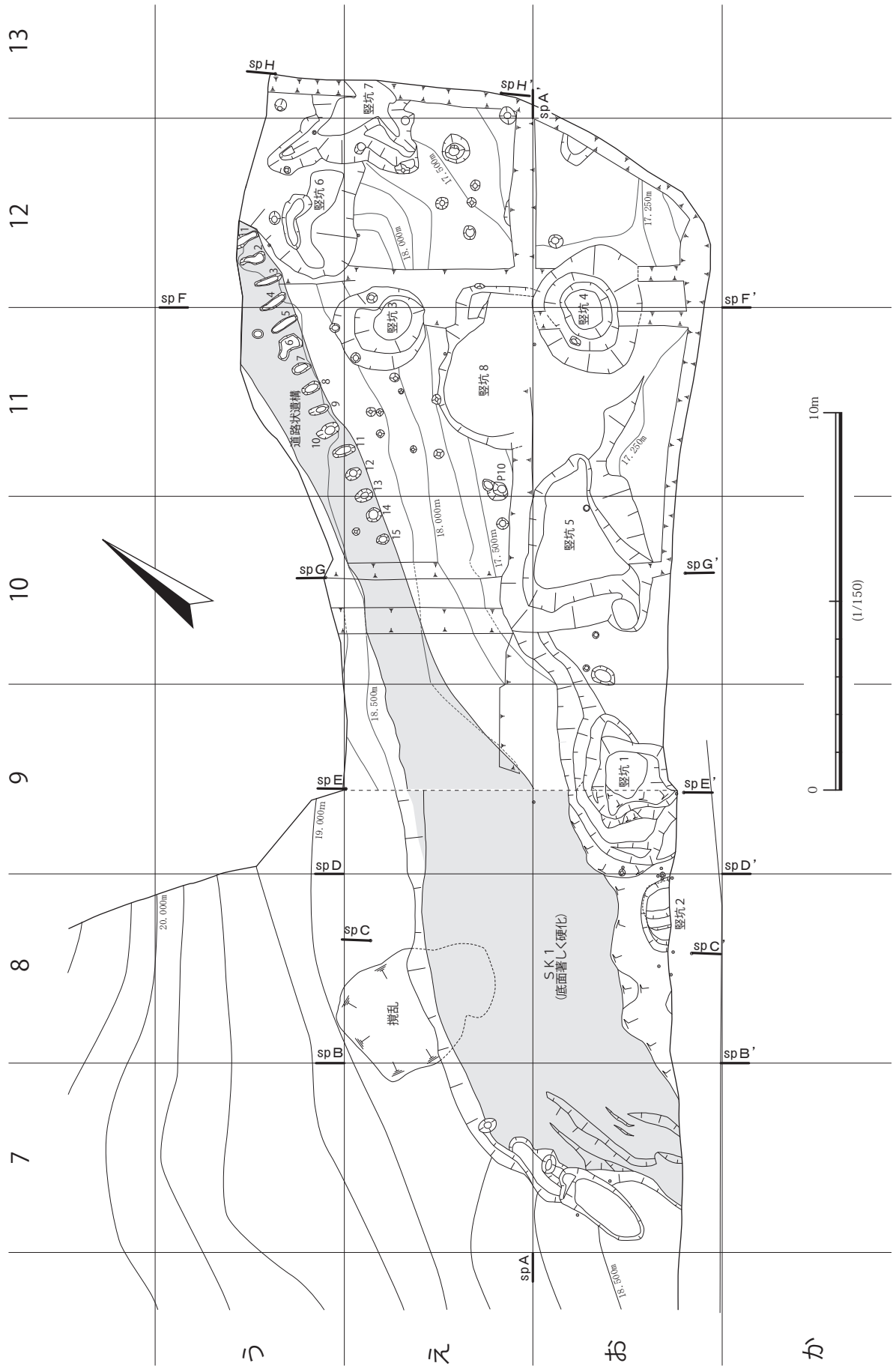
第5図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 既往の調査位置 (S=1/2500)



第6図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 試掘坑位置とグリッド配置図 (S=1/1000)



第7図 ニツ梨ゲミノキバラ窯跡群 全体遺構図 (S=1/300)



第8図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 主要遺構全体図 (S=1/150)

第4節 発見された遺構

1. 基本層序

当該地は、数年前に果樹園を営んでおり、よって最上層は耕作土で、その下層で現代流土層を確認した。流土は、斜面を流れた土が堆積したものだが、この層は調査区全面に広がっていた。そして谷部へゆくに従い流土堆積層が厚くなっていった。調査区東北端の谷部では、耕作土 28cm、流土層 50cm程の堆積を確認している(SK1 土層断面 B ライン参照)。また、竪坑 2 土層断面に示しているように、耕作土と流土の 92～104cmに及ぶ堆積層も確認している。流土層は、SK1 土層註に示した 1 層のような、にぶい黄褐色を基調とする混濁したものであり、須恵器を主体に遺物が散在していた。

主要遺構が存在する区域を除き、流土層下では地山土となり、遺構プランを確認することができた。地山土は、基本的に粘土質で、黄褐色・褐色・明褐色を呈す。谷部では、さらに粘性が増し、軽埴土や重埴土の質をもつ、黄褐色ベース、その下に灰・白色ベース、その下に青灰色ベースの層となる。また、標高 17.680 m地点で染み出すような湧水が認められた。

2. 遺構

(1) 土坑 SK 1

SK1 は平成 20 年度調査の精査段階で、近代流土層を除去した際に検出したもので、調査当初、くっきりと明確なプランというわけではないが古代の遺物が混ざる層を確認し、その範囲を土坑プランと決めて掘削を開始したものである。掘削の深さは 30～40cmで、全面にて極めて強い硬化面を検出した。規模は、幅 400cmを主体として最大 520cmを測るものであった。

硬化面は、竪穴建物で検出されるような硬化床面と極めてよく似ており、非常に硬く、踏み固めたような、叩き締めたような硬さをもったものである。地山が硬化する部分もあるものの、土を補填して面を整備するように作られており、補填を幾度か行っているような重なる層を認めることができる。この硬化面土は粘土を主体としている。よって、この層を掘削する際、ブロック塊となって外れていくという具合であった。また、硬化面層には攪拌されたような土も確認でき、これがそのまま面を形成した部分もあった。硬化面の層の厚さは 6～18cmを測り、硬化面の面的規模からも、粘土を採る際の作業空間として機能したものと考えられよう。

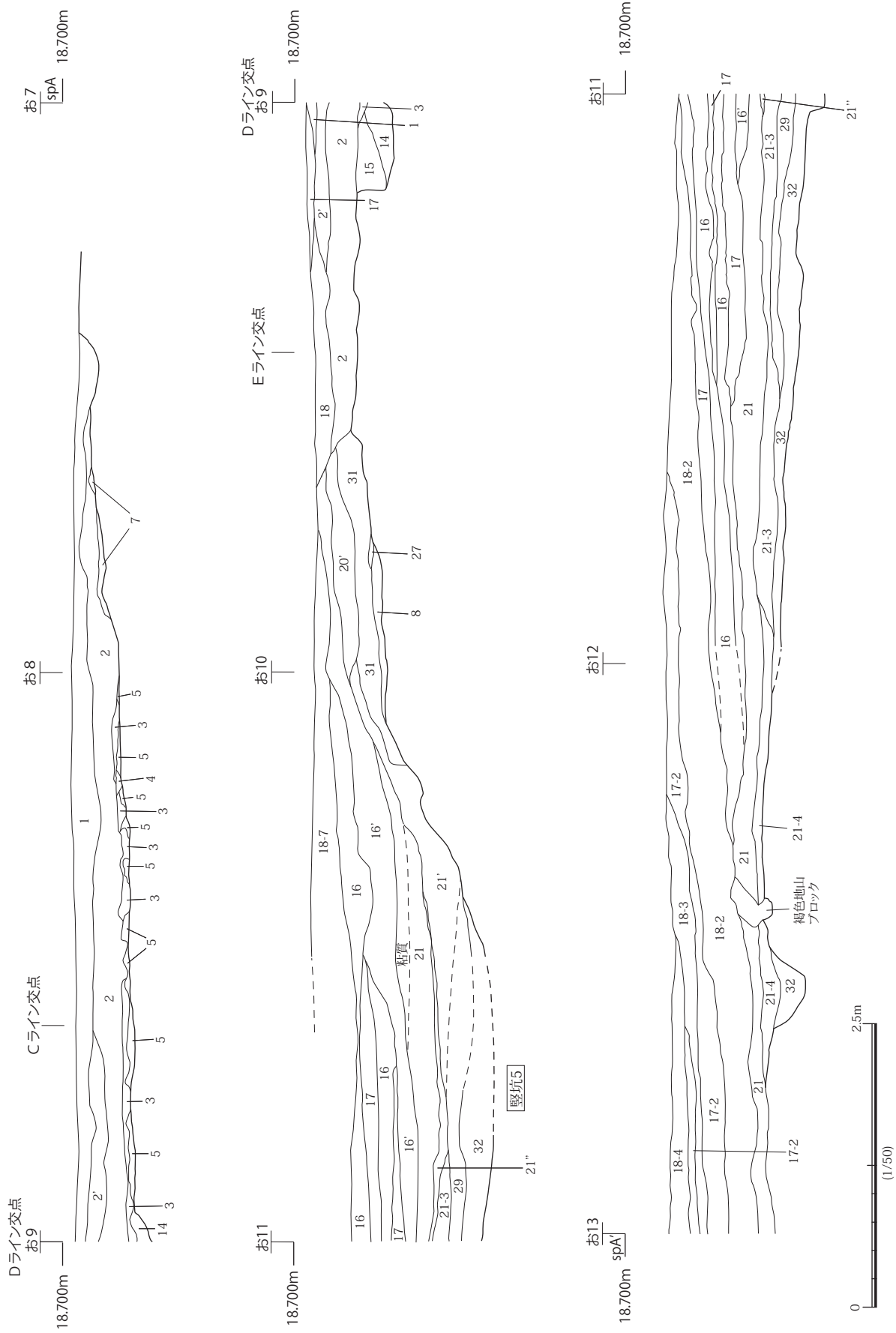
次年度の平成 21 年度調査では SK1 から続く硬化面を検出し、これが道路状遺構と判断するに至った波板状凸凹面検出位置と周囲の硬化面まで続くことがわかり、SK1 と道路状遺構が連結することが判明している。

出土遺物では、下層と付したものが硬化層から出土しているものであり、田嶋編年Ⅳ期～Ⅴ期の須恵器を主体としている。また、製鉄滓も多いことが下層出土の特徴と言える。埋土から出土するものは時期幅をもっており、埋土といっても流土であるので、流れ込んで混在したものと思われる。古い段階のもので坏 H が 1 点のみ確認できる。また、田嶋編年Ⅱ 3～Ⅲ期、Ⅴ期やⅥ期のものも確認でき、Ⅵ期段階で埋没していったのではないかと考えている。

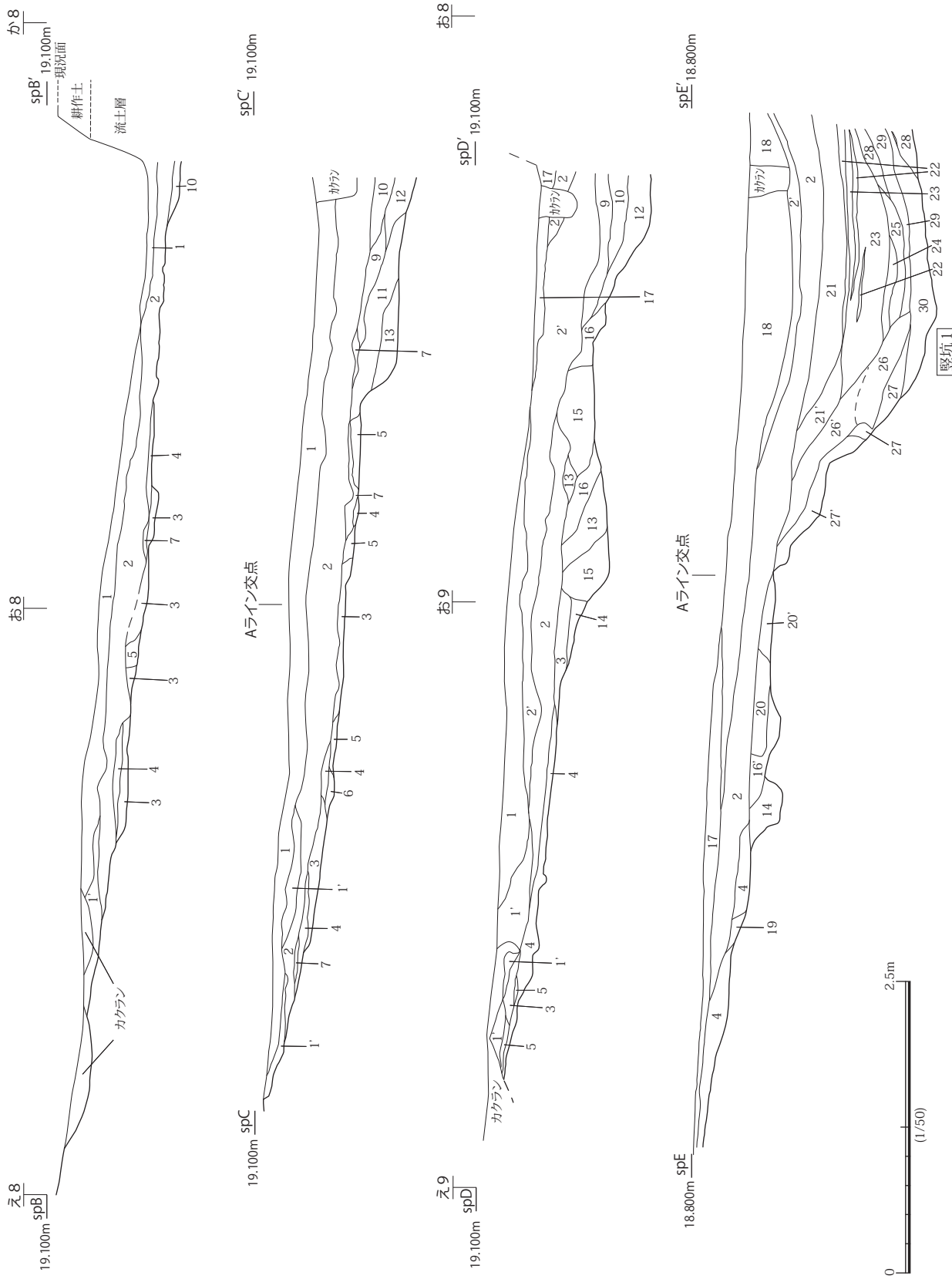
(2) 粘土採掘坑

① 竪坑 1

残存径が 320～450cmの不整楕円形状を呈するもので、深さは 155～164cmを測る。底面はほぼ平坦だが一部に浅い窪みを有する。竪坑の側面は緩やかな傾斜をもちながら段を形成しており、坑内



第9図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 主要遺構 A ライン土層断面図 (S=1/50)



第10図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 主要遺構 B・C・D・E ライン土層断面図 (S=1/50)

主要遺構（SK1・竪坑）土層註

- 1層 にぶい黄褐色埴壤土(10YR5/4)。粘性あり。炭化小塊・還元小塊を少量含有。流土層。
 1'層 褐色砂壤土(10YR4/4)。流土層。
 2層 にぶい黄褐色埴壤土(10YR5/3)。褐色壤土(10YR4/6) 縞状に入る。黒褐色土小塊を多量含有。締まり強。
 2'層 1層と2層が混在する層。
 3層 黄褐色軽埴土(2.5Y5/3)と明黄褐色(10YR6/6・6/8)や黄褐色(10YR5/8)軽埴土がかなりの塊状で混在。粘土層であり非常に良く締まる。土器・炭化塊混入。テラス形成面の粘土硬化層。
 4層 ほぼ3層と同層だが、3層のような塊ではなく、よく混ざっている粘土層。炭化中塊少量含有。テラス形成面の粘土硬化層。
 5層 黄褐色軽埴土(10YR5/8)、浅黄褐色(2.5Y7/4)軽埴土が混在(8割:2割)。テラス形成面の粘土硬化層。
 6層 オリーブ褐色軽埴土(2.5Y4/6)に褐色壤土(10YR4/6)が筋状に混入。炭化中塊を少量含有。テラス形成面の硬化層。
 7層 暗灰黄色軽埴土(2.5Y5/2)、褐色土が筋状に混入。浅黄(2.5Y7/4)軽埴土小塊多量含有。テラス形成面の硬化層の一部。
 8層 黄褐色軽埴土(10YR5/8)地山土と、にぶい褐色粘土少量が混在する層。地山土に近いが地山ではない。
 9層 オリーブ褐色軽埴土(2.5Y4/4)。粘性強。炭化小塊少量含有。土器含有。締まり弱。
 10層 灰黄褐色重埴土(2.5YR5/2～4/2)に、にぶい黄褐色軽埴土混在。褐色土塊(10YR4/6)埴壤土混在。粘性極めて強い。炭化小塊、土器も混入。締まりなし。
 11層 褐色土(10YR4/4)と浅黄軽埴土(2.5Y7/4)が5割率で混在。締まりなし。
 12層 にぶい黄褐色軽埴土(2.5YR6/4)。締まりなく柔らかい。所々黄褐色壤土(10YR5/6)の大塊混入。
 13層 浅黄色(2.5YR8/4)・黄褐色(10YR5/8)・明黄褐色(10YR6/6)の軽埴土が塊状で混在。締まりに欠ける。
 14層 褐色埴壤土(10YR4/4～4/6)。暗褐色土小塊多量含有。粘性強。
 15層 黄褐色軽埴土(10YR5/8)、灰白軽埴土(7.5Y7/2)、浅黄色軽埴土(2.5Y7/4)土が同率で塊状に混在。
 16層 黄褐色埴壤土(10YR5/6)に、にぶい黄褐色軽埴土(10YR5/3)が塊状に5割率で混在。粘性強。
 16'層 16層の軽埴土がやや強いが同じ質。
 17層 黄褐色砂壤土(10YR5/6)。石粒多量含有。
 17-2層 黄褐色砂壤土(10YR5/6)。礫中塊5割程度混入。
 17-3層 黄褐色砂壤土(10YR5/6)。17-2層に比べ、礫中塊の混入少ない。
 17-4層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/3～5/4)。筋状に灰白色砂が混入。炭化中塊含有。
 17-5層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/3)。17-4層に比べややくらめ。道路状遺構(波板状凸凹面)の上面層。
 18層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/4)。石粒多量含有。
 18-2層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/4)。
 18-3層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/4)。18-4層より明るめ。

- 18-4層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/4)。18-5層より暗め。
 18-5層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/4)。やや褐色味おびる。
 18-6層 にぶい黄褐色壤土(10YR5/4)。やや砂質強い。
 18-7層 18層がベースで、2層が混在する。
 19層 褐色土埴壤土(10YR4/6)と褐色砂壤土(10YR4/4)が筋状に混在。
 20層 褐色土埴壤土(10YR4/6)。にぶい黄褐色埴壤土(10YR5/4)大塊少量含有。粘性強く、締まりあり。
 20'層 にぶい黄褐色埴壤土(10YR5/4)ベースで、褐色土埴壤土(10YR4/6)大塊や、暗褐色小塊多量含有。締まりあり。
 21層 にぶい黄褐色軽埴土(10YR4/3)。炭粒少量、褐色土軽埴土(10YR4/4)塊4割と混在。
 21'層 21層とほぼ同層だが、褐色土塊の割合が3割程度で、炭粒多目。
 21''層 21層の酸化層。
 21-3層 にぶい黄褐色軽埴土(10YR4/3)。炭粒少量。有機物塊少量含有。
 21-4層 にぶい黄褐色軽埴土(10YR4/3)。有機物塊多く含有。
 21-5層 にぶい黄褐色軽埴土(10YR4/3)。21-4層に比べ明るめ。土器含有少量。
 22層 黄褐色砂壤土(10YR5/6)。にぶい黄褐色軽埴土(10YR5/4)が若干混在。
 23層 暗灰黄色重埴土(10YR4/2～5/2)。にぶい黄褐色重埴土(7.5YR5/4)が大塊状で混在。炭化小塊多目含有。
 24層 褐灰色重埴土(10YR4/1)。
 25層 黒褐色重埴土(10YR2/2)。炭化小～中塊多量含有。半焼の炭化木片も出土する。
 26層 黄褐色重埴土(2.5Y5/3)と、にぶい黄褐色重埴土(7.5YR5/4)中塊の混在土。
 26'層 黄褐色埴壤土(2.5Y5/3)と、褐色土(10YR4/6)中塊の混在土。粘土への手前段階の土層。
 27層 明褐色軽埴土(10YR6/6)と、にぶい黄褐色軽埴土(10YR6/3)の混在土。にぶい黄褐色軽埴土(2.5Y6/3)中塊が少量含有。
 27'層 27層とほぼ同質だが、にぶい黄褐色軽埴土入らず。砂質。地山に近い。
 28層 暗灰色軽埴土(2.5Y4/1)、黄褐色軽埴土(2.5Y5/3)中塊少量、炭化小塊多量含有。
 29層 暗灰黄色重埴土(2.5YR5/2)。
 29-2層 地山(10YR7/2～6/2)ベースに類似。炭化塊・土器少量出土。
 29-3層 地山(10YR7/2～6/2)ベースに類似。29-2層に比べ褐色味おびる。
 29-4層 地山(10YR7/2～6/2)ベースに類似。29-3層に比べ灰色味おびる。炭化小塊含有。
 30層 黒褐色重埴土(10YR2/2)。植物腐食層で粘性極めて強。炭化塊多目含有。土器・腐植木片混入あり。
 30-2層 竪坑1の30層に類似。炭化塊ブロック多量含有。炭化材出土。
 30-3層 30-2層に比べ、にぶい黄褐色軽埴土が混じりやや明るめ。
 31層 明褐色～褐色軽埴土(7.5YR5/6～10YR4/6)。
 32層 黄褐色～オリーブ褐色軽埴土(2.5YR5/3-4/3)。炭化中・大塊を含有。灰色の粘土層。
 33層 にぶい黄褐色軽埴土(10YR5/4)。少量の土師器出土する。
 34層 にぶい黄褐色軽埴土(10YR7/4～6/4)。腐食層混在し密度極めて少。土師器少量出土。

から昇降した可能性もたれる。

出土遺物は底面付近で腐植木が多く検出されているが、すべて自然木である。埋土内からは下層で田嶋編年Ⅳ2期のものや、Ⅴ期のものが出土している。

② 竪坑2

全体の1/2程度が調査区境で検出されたものである。規模は残存径200cmの楕円形状プランで、深さは140cmを測る。垂直気味に掘り込まれるものの、下底に至るにつれオーバーハングしており、底面も段をなしている。これは、粘土層を追いかけて採掘した痕跡と考えられる。

出土遺物は田嶋編年Ⅳ2期のものが下層から出土している。

③ 竪坑3

やや楕円状プランで、径が220～240cm、深さは150cmを測り、断面がややすり鉢状となっているものである。埋土から、竪坑4・5・7の掘り込み以前に埋没していた可能性をもつものの、出土遺物はないため詳細時期は不明である。

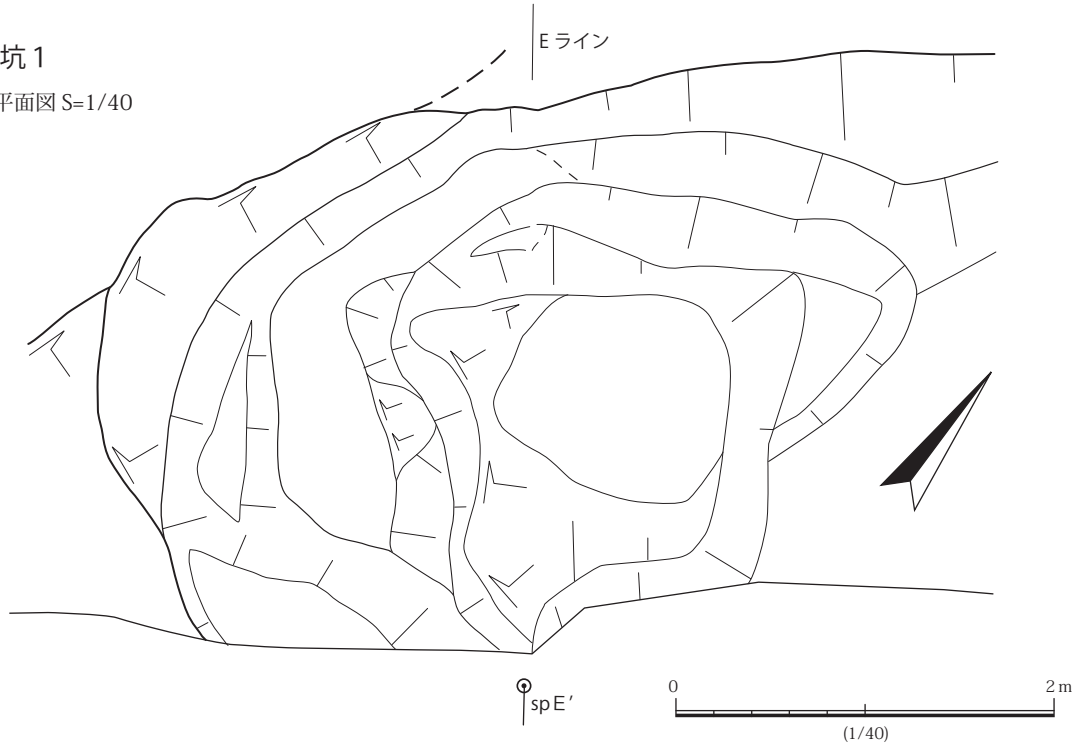
④ 竪坑4

径290～340cm、不整楕円状プランをもつものである。深さは166cmを測り、断面はすり鉢状を呈しながら側面に若干の段を形成している。

出土遺物は最下層で田嶋編年Ⅵ期のものが出土する。なお、竪坑4の30-2層と竪坑6埋土にて土器の接合が認められるため、竪坑6の方が竪坑4よりも早く埋没していた可能性もたれる。

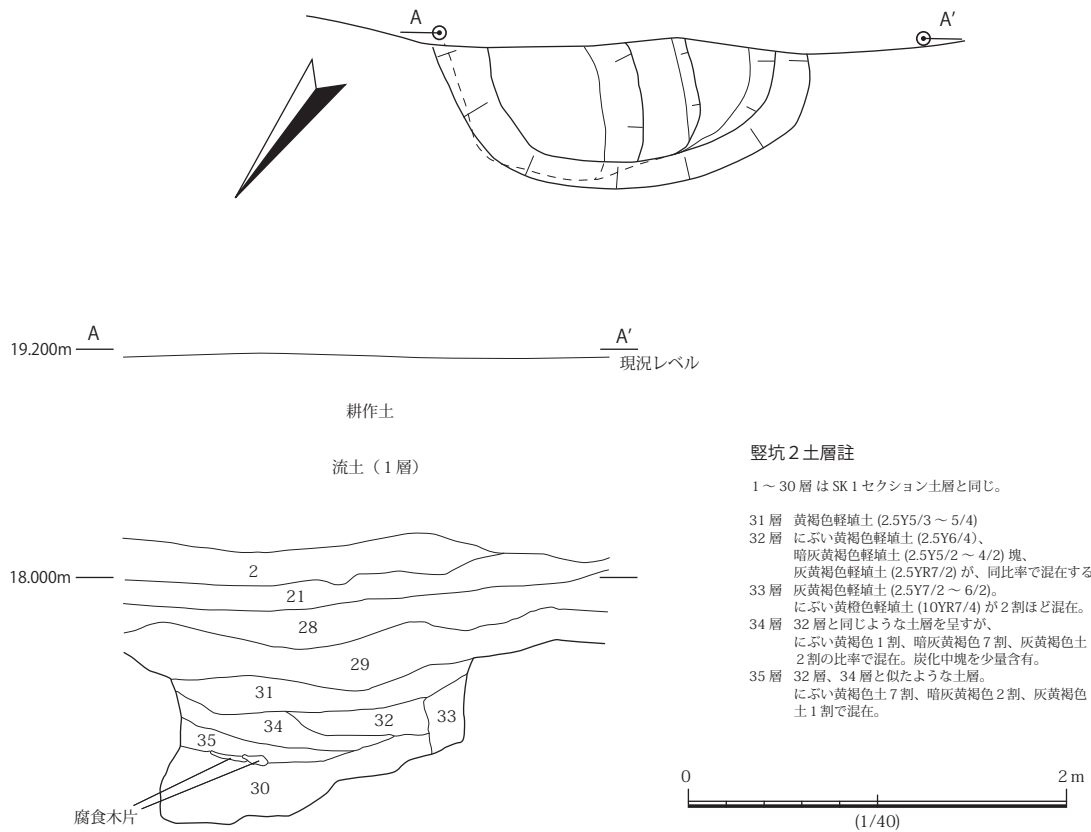
竪坑 1

平面図 S=1/40



竪坑 2

平面図・断面図 S=1/40



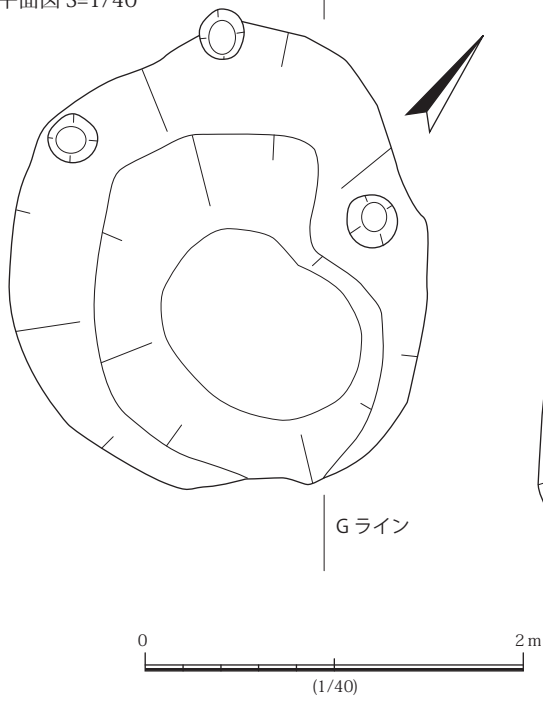
竪坑 2 土層註

- 1～30層はSK1セクション土層と同じ。
- 31層 黄褐色軽埴土 (2.5Y5/3～5/4)
- 32層 にぶい黄褐色軽埴土 (2.5Y6/4)、暗灰黄褐色軽埴土 (2.5Y5/2～4/2) 塊、灰黄褐色軽埴土 (2.5YR7/2) が、同比率で混在する。
- 33層 灰黄褐色軽埴土 (2.5Y7/2～6/2)。にぶい黄褐色軽埴土 (10YR7/4) が 2 割ほど混在。
- 34層 32層と同じような土層を呈すが、にぶい黄褐色 1 割、暗灰黄褐色 7 割、灰黄褐色土 2 割の比率で混在。炭化中塊を少量含有。
- 35層 32層、34層と似たような土層。にぶい黄褐色土 7 割、暗灰黄褐色 2 割、灰黄褐色土 1 割で混在。

第 12 図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 竪坑 1・2 遺構図 (S=1/40)

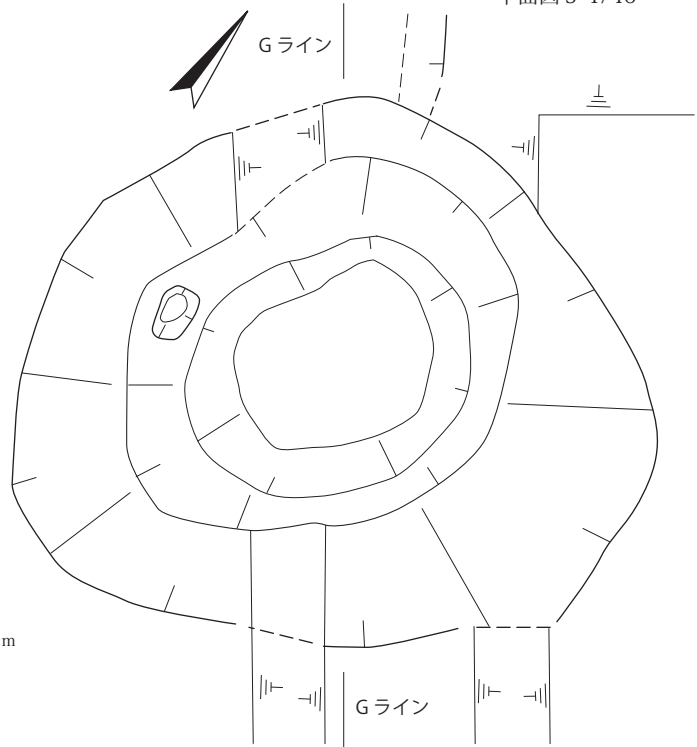
竪坑3

平面図 S=1/40



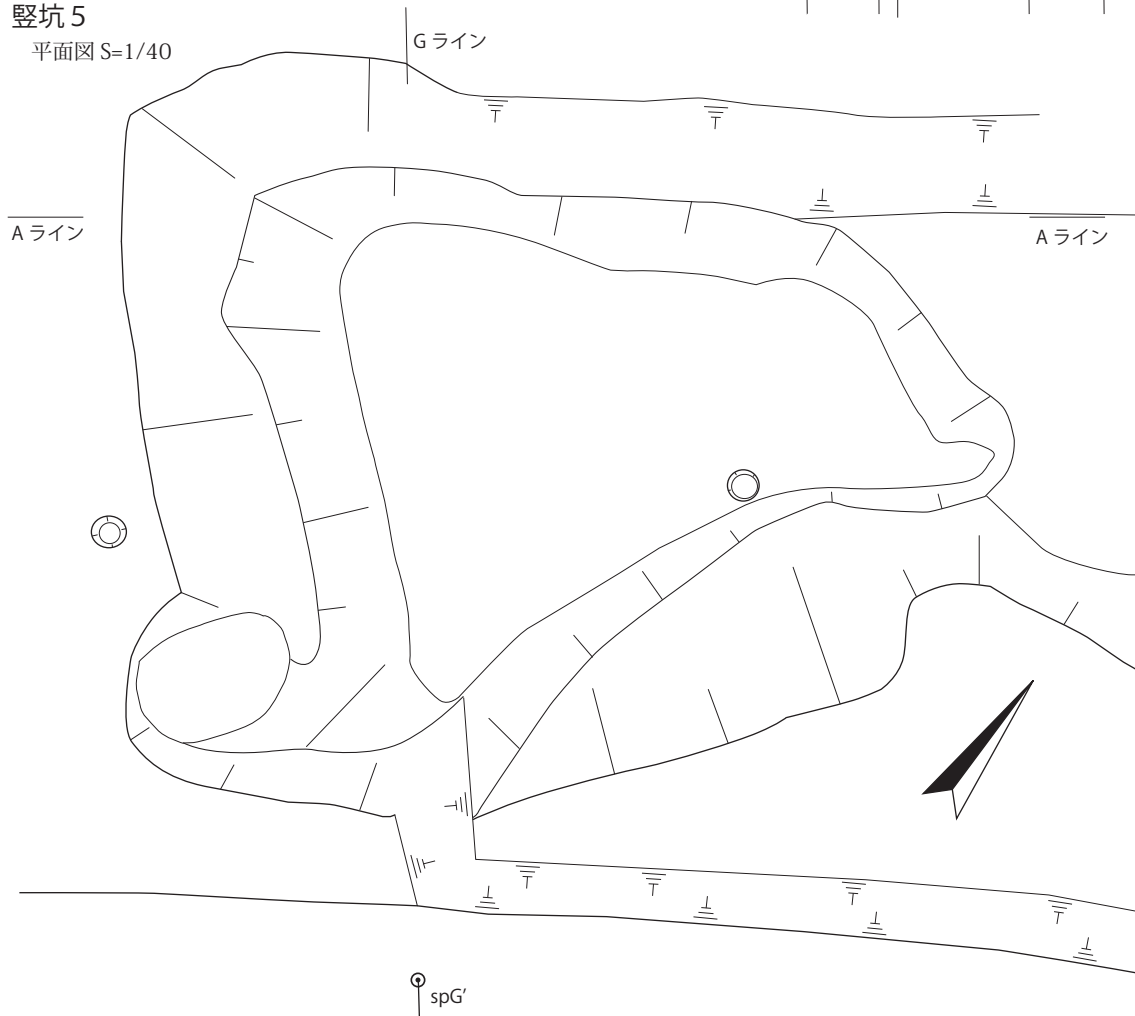
竪坑4

平面図 S=1/40



竪坑5

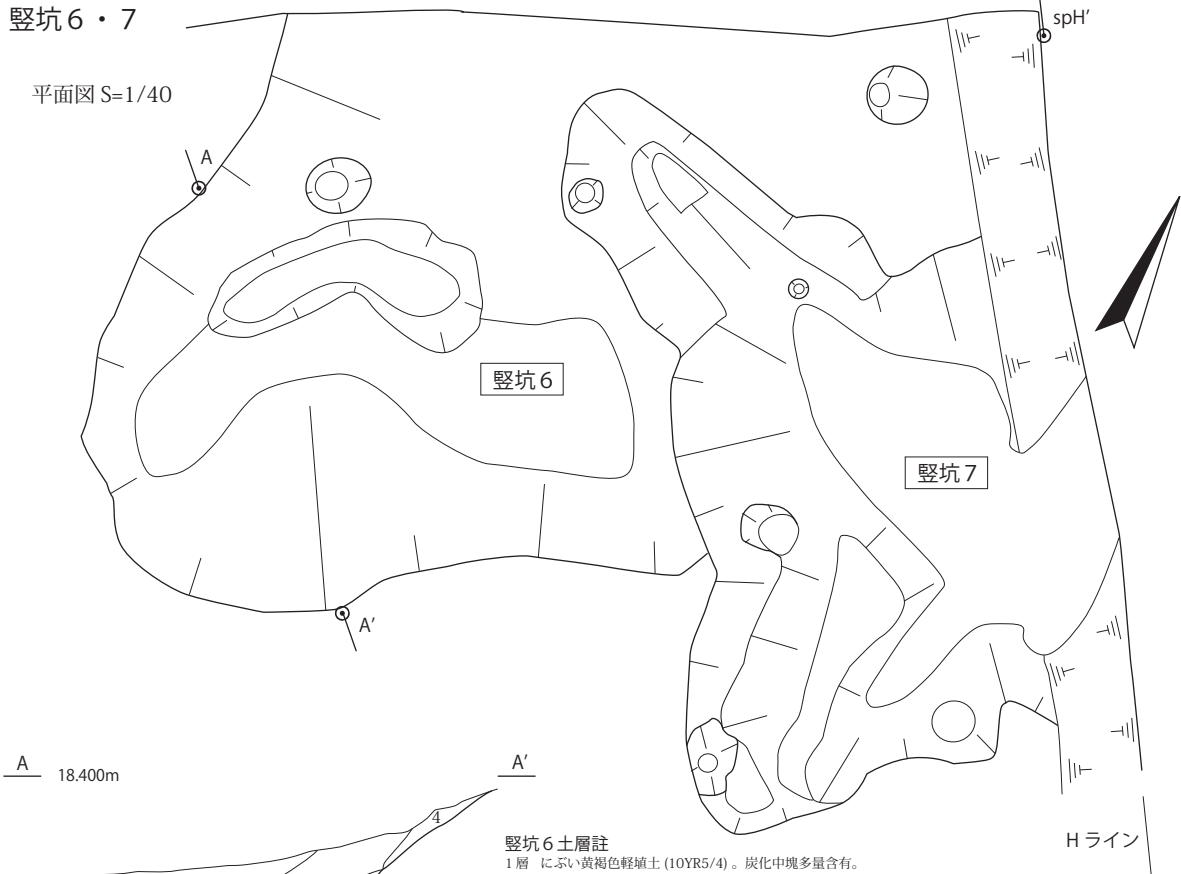
平面図 S=1/40



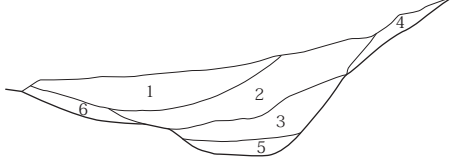
第13図 ニツ梨ゲミノキバラ窯跡群 竪坑3・4・5 遺構図 (S=1/40)

竪坑6・7

平面図 S=1/40



A 18.400m

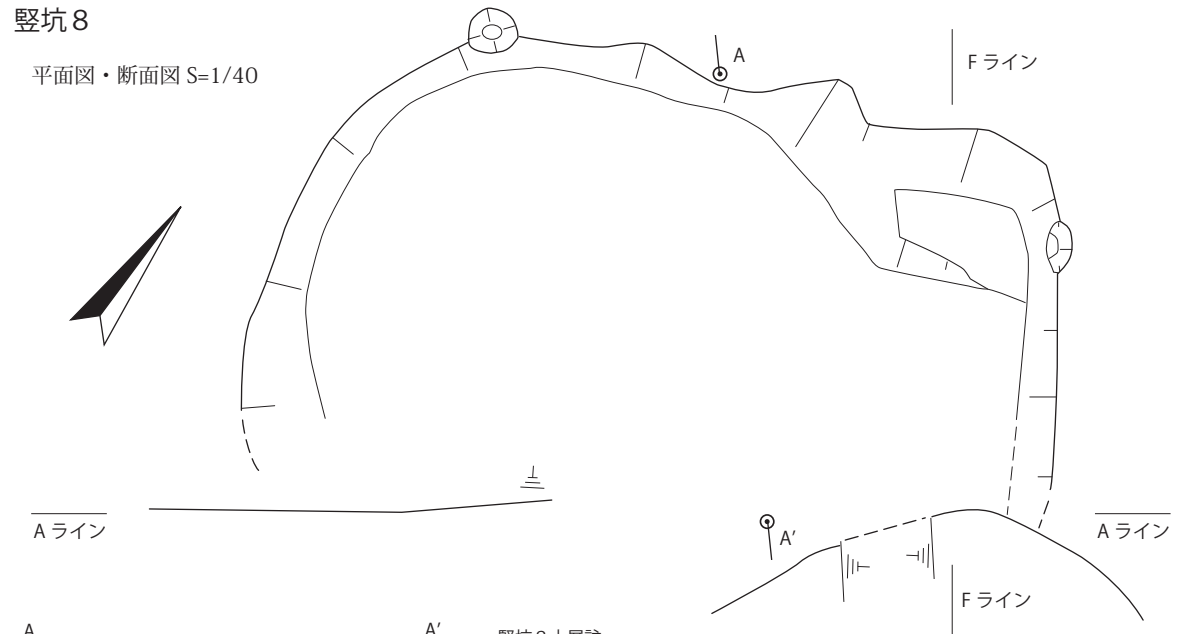


竪坑6土層註

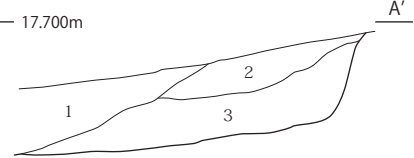
- 1層 にぶい黄褐色軽埴土 (10YR5/4)。炭化中塊多量含有。
- 2層 にぶい黄褐色軽埴土 (10YR6/4 ~ 5/4)。土師器含有。
- 3層 にぶい黄褐色軽埴土 (10YR5/4)。1・2層に比べやや粘性増す。炭化中塊含有。
- 4層 褐色軽埴土 (10YR5/4 ~ 4/4)。炭化物少量含有。地山崩壊土層。
- 5層 黄褐色埴土 (10YR5/4)。3層に比べより粘性増す。土師器小片出土層。
- 6層 にぶい黄褐色軽埴土 (10YR5/4 ~ 5/6)。鉄分含む。地山崩壊土層。

竪坑8

平面図・断面図 S=1/40

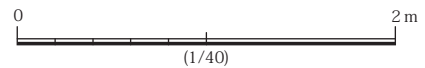


A 17.700m



竪坑8土層註

- 1層 浅黄橙色軽埴土 (10YR8/4 ~ 7/4)。他遺構のベース面同等層。
- 2層 にぶい黄褐色軽埴土 (10YR5/4)。炭化中塊含有。締まりなし。
- 3層 にぶい黄褐色軽埴土 (10YR5/4)。炭化中塊含有。土器多量含有。



第14図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 竪坑6・7・8遺構図 (S=1/40)

⑤ 竪坑5

径450cm、深さ170～182cmを測る、やや隅丸形状プランをもつ竪坑である。断面は緩やかな落ち込みで、若干の小テラスを形成する。底面は不整形三角形を呈し、ほぼ平坦となっている。

出土遺物は、埋土から田嶋編年Ⅳ2期のものや、田嶋編年Ⅲ・Ⅳ期にあたる赤彩品、Ⅵ期のものなどが出土している。出土量としてはⅣ期のものが多く主体的だが、竪坑の掘り込み・埋没はⅥ期になるものと思われる。竪坑の底面からは、スギ材や炭化するものを含む腐食木が多量に出土しているものの、全て自然木である。

⑥ 竪坑6

全体のプランは不明だが、残存部分から想定して不整形楕円形状になるものと考えられる竪坑である。径350cm、深さ120cmを測り、緩やかに落ち込みながら、底面に窪みを形成する。なお、前述したが、竪坑4の30-2層と竪坑6埋土にて土器の接合が認められるため、竪坑6の方が竪坑4よりも早く埋没していた可能性がある。

出土遺物は、埋土内から赤彩品が少量認められるものの、これ以外は田嶋編年Ⅵ期のものが主体である。Aライン中央付近の標高17.500m地点で、つまり底面から田嶋編年Ⅵ期に位置付けされる小型鍋(図掲載No.22)が出土している。また、同時期の皿A(図掲載No.21)は道路状遺構出土のものと同接合されている。この竪坑は、Ⅵ期に掘り込まれ、そして同時に埋没していった可能性をもつ。

⑦ 竪坑7

残存径230～350cm、深さ150～160cmを測る、不整形プランのものである。断面は幾つものテラスを形成して緩やかに底面に至る。底面付近では自然木の腐植木が多く出土している。

出土遺物では、標高17.200m地点において、漆12群相当とされる小型丸底壺が出土するものの、他の出土物と時期が大幅に異なり、また点数もこの1点のみである。これ以外では、田嶋編年Ⅳ期のものやⅥ期のものが埋土から出土している。底面からは自然腐植木が多く出土している。

なお、竪坑4や竪坑5と下層埋土が同層であることから、これらと同時期に埋没していったものと考えられる。

⑧ 竪坑8

この土坑は、竪坑5の埋土層を追いかけて除去していた際に、プランを検出したものである。残存径220～420cm、深さ130cmを測るもので、おそらく楕円形状プランとなるのだろう。底面は平坦を呈し、土層は上面に白色粘土が10cmほど被った状態であり、このレベル面から竪坑5が掘削された可能性をもつ。

出土遺物は、田嶋編年のⅢ・Ⅳ期に相当する赤彩品や、Ⅳ2期に相当するものが目立つ。

(3) 道路状遺構

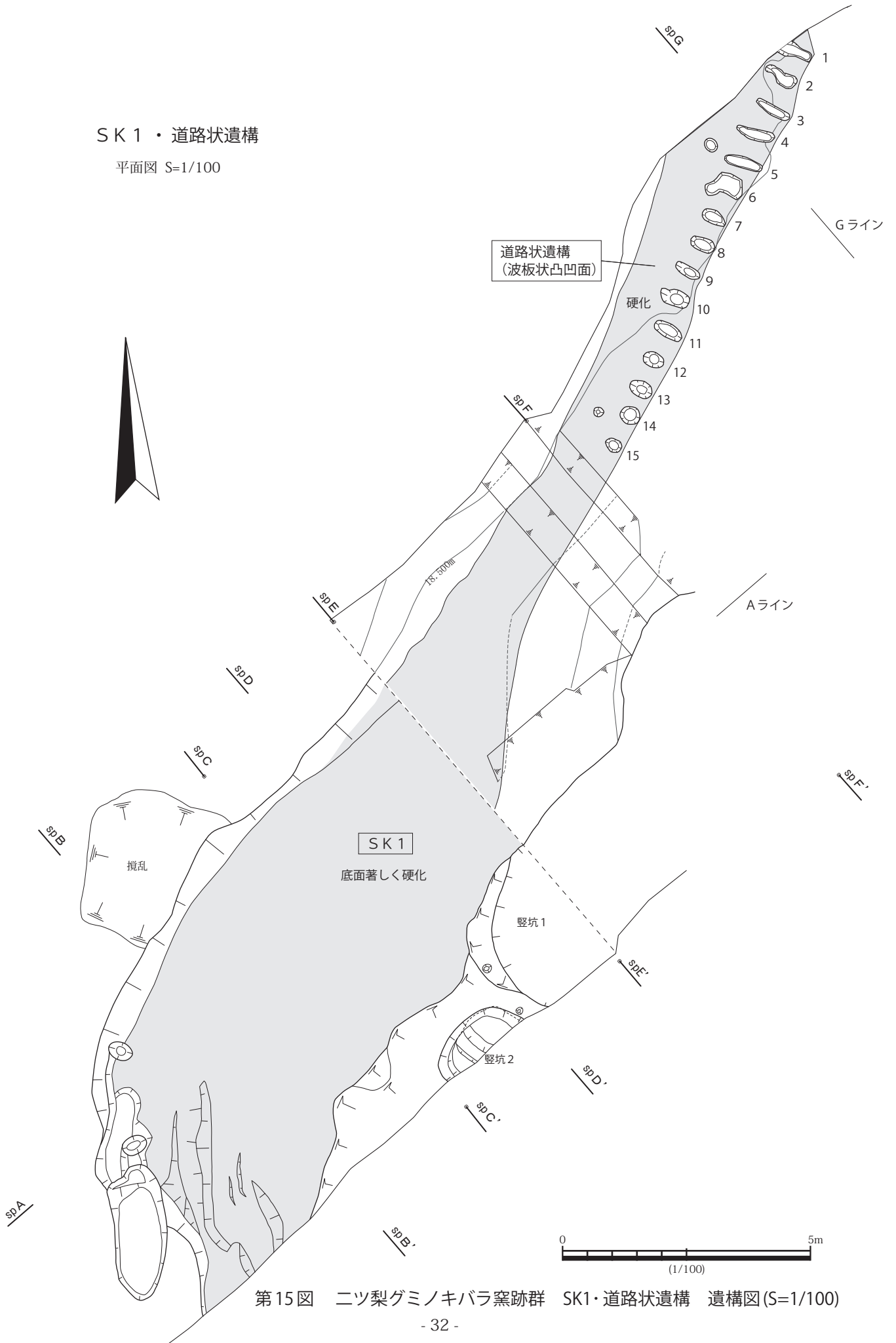
平成21年度調査において波板状凸凹面が検出され、周囲が硬化していたことから道路状遺構と判明したものである。粘土採掘坑群の西側に位置し、標高18.500mに添うように検出されている。

硬化面は、最小幅135cm、最大幅250cm、長さはSK1までで16mを測る。

波板状凸凹面は、楕円形や不整形楕円形プランの浅い15のピットで構成されており、長軸を合わせ北東方向に並んでいる。規模は、小さなもので34cm×24cm、大きなもので74cm×38cmを測る。深さは、P1で2cm、P2が2～4cm、P3が2～3cm、P4が2.5cm、P5が2cm、P6が2cm、P7が3～5cm、P8が5～7cm、P9が4～5cm、P10が4cm、P11が3～5cm、P12が8cm、P13が5～7cm、P14が2～3cm、P15が2～3cmである。最も浅いもので2cm、最も深いもので8cmである。

SK1・道路状遺構

平面図 S=1/100



第15図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 SK1・道路状遺構 遺構図(S=1/100)

ピット内では、須恵器、小石、製鉄滓を中心に遺物が出土するが、補填や地盤改良のためのものとしては出土量が少ないため、混入したものと判断される。出土遺物の時期は、出土量の比較的多い田嶋編年Ⅳ 2 期を主体とするものの、Ⅱ・Ⅲ期やⅥ期と時期幅が認められる。これ以降の時期となる遺物は認められないので、Ⅵ期中には埋没していったものと思われる。

波板状凸凹面については様々な捉え方がある。これについては小結にて改めて述べてみたい。

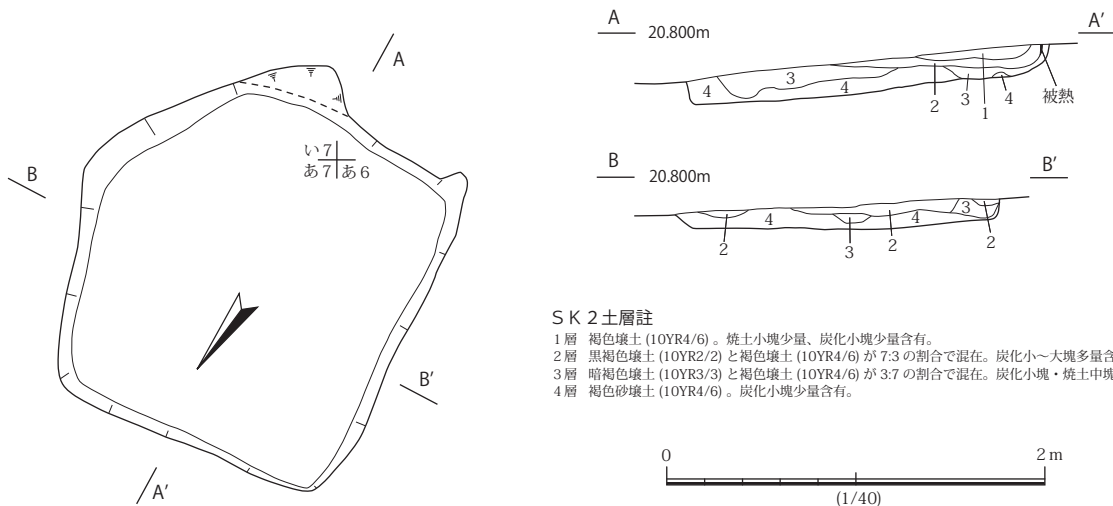
(4) 焼土坑 SK 2

SK2 は調査区の主要遺構である SK1 や粘土採掘坑群から西側へ外れた場所に位置するものである。規模は長径 190cm×短径 185cm、隅丸五角形状のプランを呈し、深さ 10～16cm を測る。底面は斜面に若干添う形状をもちつつも平坦面を形成する。北壁面の中央で、幅 37cm、厚み 2～3cm の被熱層を確認している。被熱は壁外の地山まで及ばず、下方にも延びないもので、貼られた粘土が被熱したようである。内面が強く焼けたとみえ薄い黄色をしており、外側に向かい赤色となる。

出土遺物は、田嶋編年Ⅴ 2 期相当と判断する埴 1 点と、被熱する粘土塊が 9 点のみである。全ての遺物が 1 層・2 層で、被熱壁から 50cm 範囲にまとまって出土している。

この土坑を焼土坑とするには、焼けた痕跡があまりに部分的で乏しいため、望月精司氏に意見を求めたところ、現代のものではないかという意見をいただいている。しかし、プランや規模などが土師器焼成坑に類似する点もあり、ありのままに報告することとした。

SK 2 平面図・土層断面図 S=1/40



第 16 図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 SK2 遺構図 (S=1/40)

第5節 出土遺物

出土遺物は、本調査にて、パンケース（内法径 55 × 39 × 14cm）で 15 箱、須恵器、土師器、砥石などの石製品、円筒形や紡錘車などの土製品、瓦、焼台、窯壁・窯床、製鉄・精錬滓が出土している。試掘調査ではパンケース 2 箱が出土している。

内訳は、破片総数で、須恵器食膳具 629 点、須恵器貯蔵具 534 点、土師器食膳具 66 点、土師器煮炊具 201 点、土製品 3 点、焼台 57 点、砥石 1 点、瓦 1 点、窯壁・窯床 31 点である。

出土遺物は調査面積の割りに少なく、広い時期差をもつことが特徴といえる。これは、当地の周囲には窯跡や土師器焼成坑が存在し、当地が斜面と谷部でもあり、流れ込み等での混入によるところが大きいものと考えられる。実測に至っていないものの、製鉄滓は 373 点（総重量 18,699.7 g）出土しており、やはり流れ込んできたものである。ただ、周囲に周知の製鉄遺跡はないため、未発見の製鉄遺跡が存在する可能性をもつものと思われる。

1. SK1 出土遺物

実測可能だったのは 13 点。硬化面をもつ層は“下層”表記であり、SK1 機能時において信憑性の高い遺物と言える。なお、型式の○期は田嶋編年にもとづくが、以下これを略した形で表記する。

1 は、体部が外反する小型タイプの坏 A である。底部がやや厚いため、V 期の特徴である器厚の均一化に外れそうだが厚いタイプも存在することから、この坏 A は IV 2 期～V 期のものと考えられる。

2～6 は坏 B の蓋である。2 は、口縁端部の折り返しをもたないもので、南加賀窯跡群では IV～V 期に焼成されるタイプである。天井部にケズリをもち、内面が降灰する。

3 は、扁平タイプの蓋で口径 15cm 前後を測り、口縁端部の折り返しがぼってりとした、断面三角形形状を呈すものである。

4 も扁平タイプの蓋だが、3 に比べシャープな作りとなっており、法量も一回り大きく、折り返しを小さく鋭くもつものである。3・4 とともに隣接する二ツ梨豆岡向山窯跡群の 9 号窯 10 号窯で出土するものに類似するため、時期は II 3 期～III 期になるものと思われる。

5 は、口縁端部が長く鋭く小さいタイプで、V 1・V 2 期ともにみられる特徴である。天井部にケズリはなく、ヘラ切りのち簡単なナデ調整を行っているものである。

7 は、坏 B の身で、深身で体部がやや外傾し高台がやや厚手で踏ん張るタイプのものである。IV 期の特徴である体部箱形とはいえ、口径も縮小タイプであり、V 期のものでも厚手高台が確認できることから V 1 期に位置付けされるものと思われる。

8 は、坑 B で、VI 2～VI 3 期に焼成されているものだが、二ツ梨豆岡向山窯跡群の 7 号窯・1-A 号窯・1-B 号窯と隣接しているため、同時期の VI 3 期相当とするのが妥当だろう。

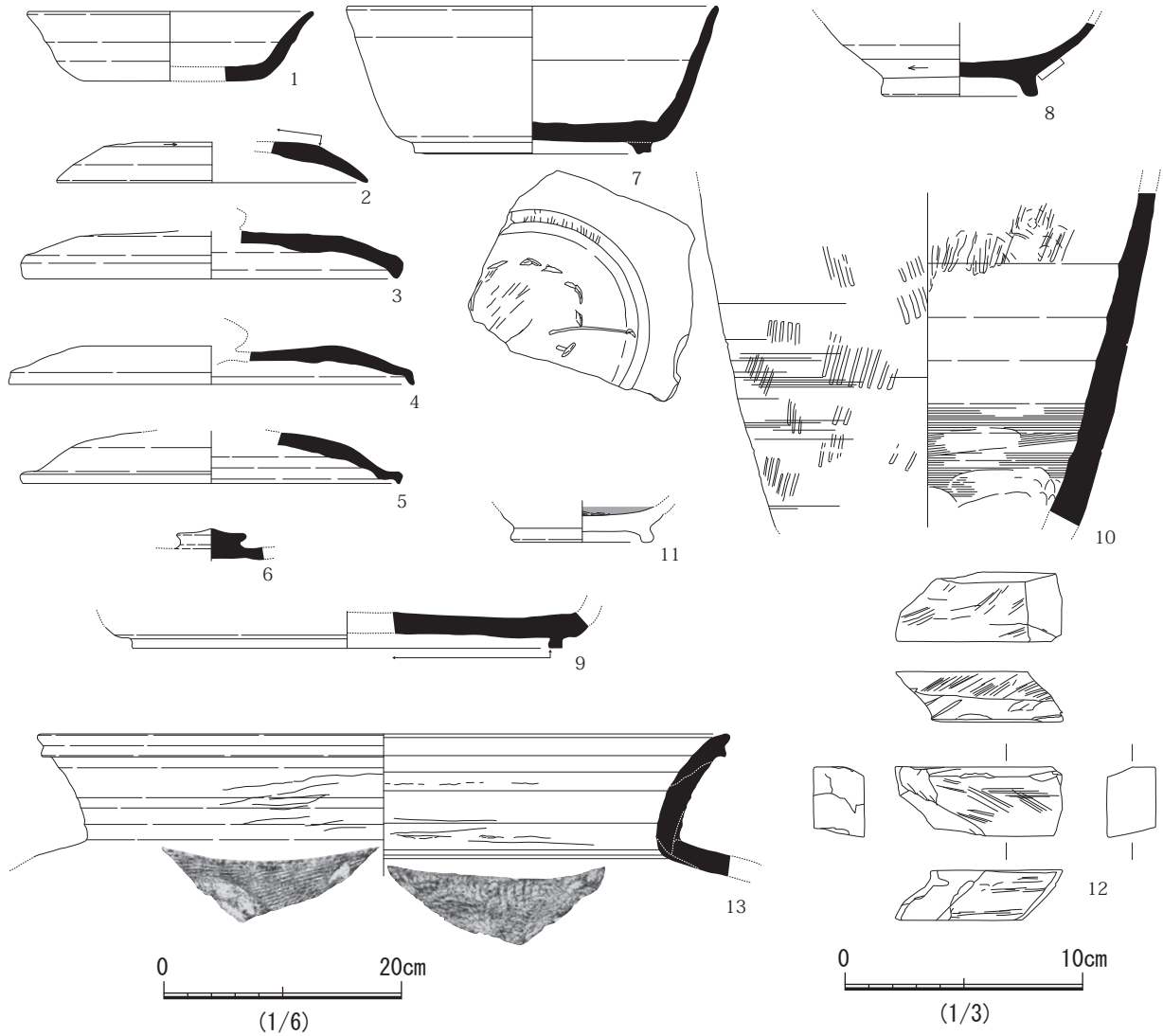
9 は、底部対面にケズリ調整がそのまま残るもので、III 期から IV 期の特徴を示している。

10 は、双耳瓶（瓶 D）の胴部で、器肉が厚く、硬度は比較的堅緻であるものの、焼成は量産化の特徴をもって粗い。よって量産化が一層顕著となる VI 期とするのが妥当と思われる。

11 は、内黒焼成する坑 B で、内面にミガキ調整が認められるものである。

12 は、長軸両端を欠損する砥石、4 面に擦痕・摩耗跡がみられる。

13 は、大甕の口頸部で、頸部高は低く、外面装飾せず、口縁端部は外側へ突出して沈線を巡らし、内部に明らかな面を有する。これは、戸津窯跡群 1 号土器溜まり出土の甕によく似ており、時期は VI 1 期になるものと思われる。



第 17 図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 出土遺物 1 (SK1) (S=1/3・左下 S=1/6)

2. 竪坑出土遺物

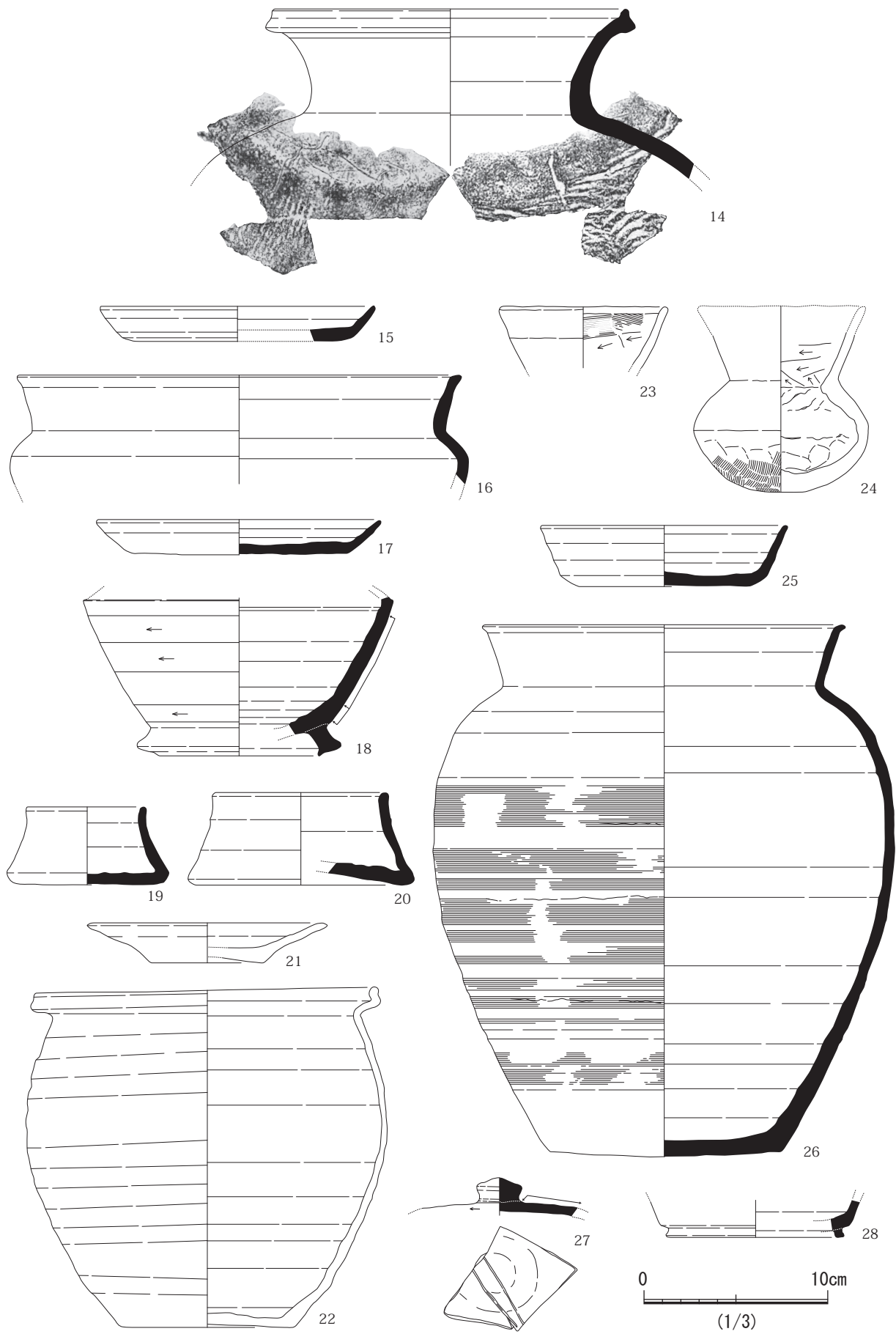
14 は、竪坑 1 より出土し、SK1 と接合されている小甕である。口縁端部が外面へ強く反って内面端部に沈線状の窪みをもち、外面では沈線を巡らすタイプであり、VI 2 期相当になるものと考えられる。

15 は、竪坑 2 より出土した盤 A で、これも SK1 と接合されており、IV 期でも口径が IV 1 期に比べさらに小型化する IV 2 期相当にあたるものと思われる。

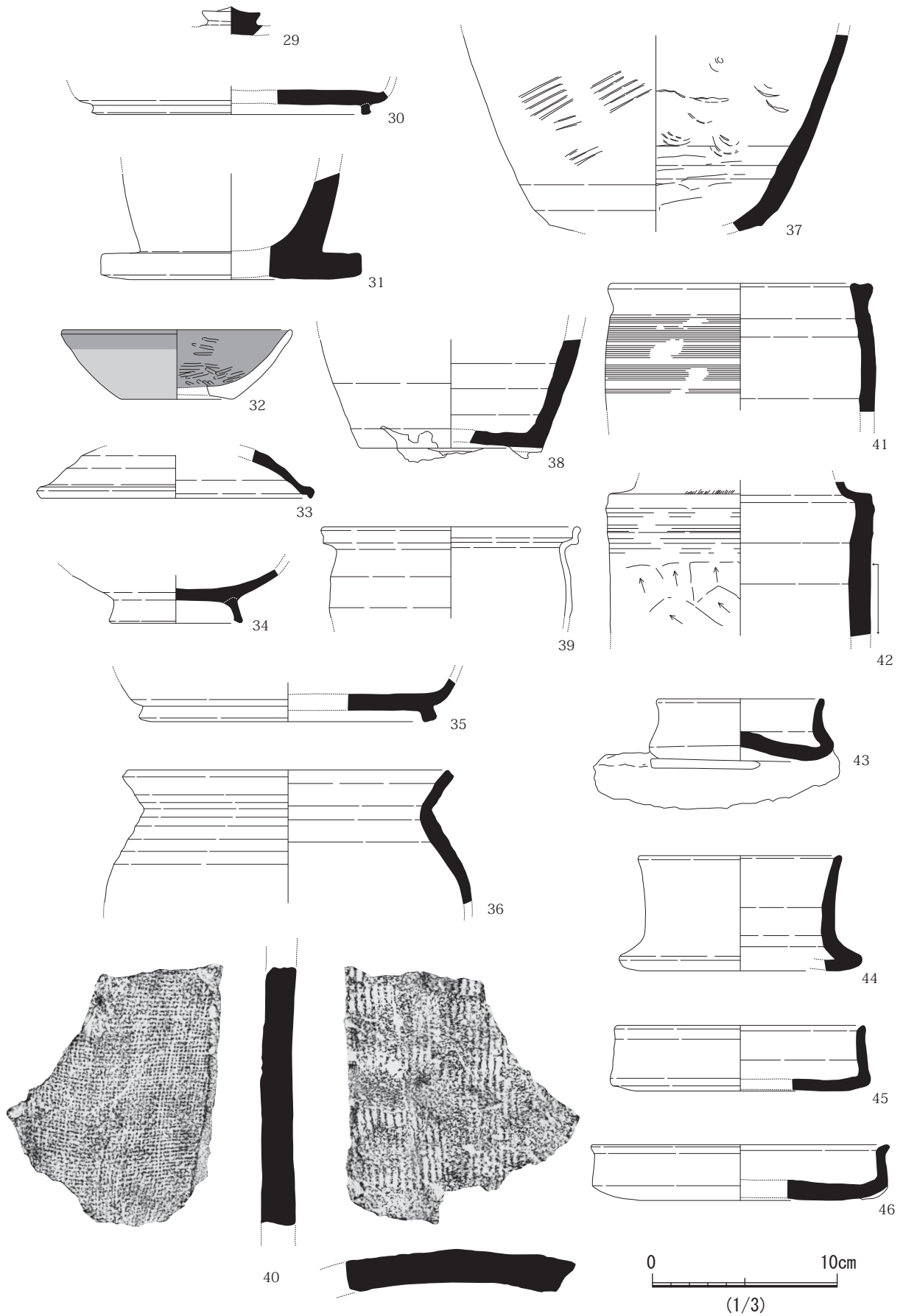
16 は、竪坑 4 より出土した端部に面をもって頸部が比較的長い広口鉢（鉢 B）で、VI 期に相当するものである。

17 は、竪坑 5 より出土した盤 A で、ロクロヒダをもつものの、V 期のような器肉の薄さがないため、IV 2 期とするのが妥当と考えられるものである。

18 も竪坑 5 より出土した長頸瓶（瓶 A）で、肩部が角張るものであり、V 1 期まで確認できる器形である。体部にケズリ調整を行っており、内面底部にはガラス状となった灰が付着、外面にも黒色となった灰が付着する。



第18図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 出土遺物2 (竪坑) (S=1/3)



第19図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 出土遺物3 (道路状遺構・グリッド) (S=1/3)

19・20は、竪坑5より出土した焼台で、戸津11号や8号窯段階で使用されるタイプのものであり、時期としてはVI1期やVI2期に相当するものとなる。

21は、竪坑6から出土し、道路状遺構出土のものと接合されている皿Aで、焼成の粗い量産品である。時期としてはVI2・VI3期に焼成されているものである。

22は、竪坑6から出土する小型鍋で、遺構底面より完形に近い形で出土したものである。器肉が極めて薄く、口縁端部を上部につまみ上げて形成するもので、ロクロヒダも著しく、VI2～VI3期に相当するものである。

23・24は、接点が認められなかったものの、同一個体となる小型丸底壺である。竪坑7から出土しており、外面底部に黒斑をもち、砂の少ない良質な胎土である。漆町12群に位置付けされるものである。

25・26も竪坑7から出土しているものである。25は、口縁端部内外に降灰が認められる、体部が箱形となるIV1期に相当する坏Aである。

26は、広口壺（壺F）である。外面の粘土紐痕が顕著に残り、口縁端部に面を有するものである。内面頸部と底部に降灰が認められるため、正位で焼成されている。この器種は、VI1期に焼成量がピークを迎えVI2期には焼成率が3割に減少する傾向をもつものであるため、同時期に相当するものと考えられる。

28は、竪坑8から出土した坏B・身の底部である。底部から体部にかけての立ち上がり角張って箱形タイプになるものと考えられる。よって、IV1期に相当するものと思われる。

3. 道路状遺構出土遺物

29は、坏B・蓋の鈕で内面に工具痕をもつものである。

30は、盤Bで底部にヘラケズリを施さないものである。IV2期がヘラケズリ施行の最終段階、V期からは省略される特徴をもつため、この盤BもIV2期～V期に相当するものと考えられる。

31は、厚底鉢（鉢E）である。台周囲に突出部をもつものは古いタイプのものであり、II期相当になるものと考えられる。

4. SK2出土遺物

SK2から出土するのは、32の塚Aのみである。外面に赤彩、内面に黒色を施すもので、VI2期～VI3期に二ツ梨一貫山窯の3号窯で焼成されるタイプと同じであるため、この塚も同時期に位置づけされるものと考えられる。

5. グリッド出土遺物

33は、口縁端部を長くもち、折り曲げを短く鋭くもつV期段階の坏B・蓋である。

34は、塚BでありVI期相当の量産品である。

35は、底部ヘラケズリのないIV2期以降の盤Bで、36は口縁端部に面をもつ短頸壺（壺F）、IV2期から出現する器種である。

37は、同じく短頸壺（壺D）の胴部から底部の一部、焼成は堅緻で、隣接するII3～III期にあたる二ツ梨豆岡向山窯跡9号窯・10号窯にて極めて類似したものが出土している。混入し流れ込んできたものであろう。

38は、双耳瓶（瓶D）の底部、内面底部のみ降灰し、質の粗い量産品である。

39の小型鍋は、層位的に豎坑7出土としてよいものである。極めて薄いつくりで、口縁端部は垂直に上方へつまみ上げられている。釜や鍋類は、時期が進むにつれ器肉が薄くなる傾向をもつため、この鍋はVI3期に相当するものと思われる。

40は、凸面に平行線文タタキをもつ平瓦である。平行線文が、条線と木目が併行するHe類タタキであり、隣接するニツ梨豆岡向山窯跡群のA地区(1-A号・1-B号所在区)で同じものが出土している。

41・42は、須恵質の円筒形である。41は、口縁部形でソケット状に段を形成するタイプと考えられる。ロクロ成形で、体面にケズリ調整を行っている。42は、口縁端部に面を形成して、恐らくそのまま筒状になるものと思われる。

43～46は、焼台である。焼台については望月精司氏の分類があり(望月1994、望月2003)、1～3期までの時期区分が変遷されている。本書では田嶋編年を主体として時期を表示しているため、置き換えてみると、43はVI3期に、44はVI1期、45・46はVI1～VI2期相当になるものと思われる。ちなみに前述の19・20については、19はVI1期、20はV期の段階に位置付けられるものと考えられる。

6. 試掘での出土遺物

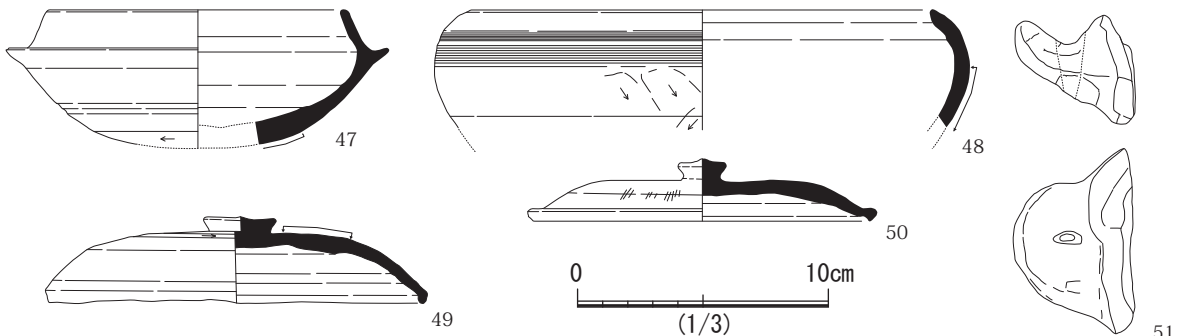
ここで試掘調査での出土遺物について触れておきたい。試掘での出土量は全体でパンケース2箱、出土状況は、トレンチ5・6・7・10・11・13・14・15において須恵器が、トレンチ6・10・13において土師器が出土している。特にトレンチ13・14・15ではまとまった量の須恵器が出土している。トレンチ13では土師器焼成坑が検出されているためか、全体として土師器の出土量が多い。そして、前述したように、この13トレンチ帯は試掘段階で保存区域となったところである。

さて、試掘時における出土遺物は、これまで報告してきたものをほぼ網羅するものである。ここでは、残存率の高いものと特筆すべきもののみ実測し掲載しておく。また、これら全ては流土層からの出土となる。

47は、坏Hの身で、口縁端部に面を形成して受部立ち上がりやや内傾し、底部にケズリ調整を行うもので、古墳時代後期の後半、TK209併行に位置付けされるものである。

48は、器形が大きく内湾する鉄鉢(鉢D)である。非常に丁寧に作られ、丁寧に焼かれたものである。外面で口縁端部から2.5cmを除く胴部だけに降灰が認められるため、蓋を付す状態で焼成されている。鉄鉢は県内の集落での出土はあるものの、生産地での出土は殆どないため、珍しい事例となろう。

51は、鍋または甑の把手である。穿孔があるため朝鮮系のものと考えられる。これについては、



第20図 ニツ梨グミノキバラ窯跡群 試掘調査 出土遺物(S=1/3)

隣接する二ツ梨豆岡向山窯跡群 C 地区から、形状は違うものの同じく朝鮮系把手が出土している。

第5節 小結

本調査区で粘土採掘坑が検出されたことは、想定内であったと言ってよいだろう。それは、本調査区に隣接して、財団法人石川県埋蔵文化財センターによる広域農道整備に伴う発掘調査が平成 17 年に行われ、平成 19 年に報告書が刊行されていたことによる。この調査で多数の粘土採掘坑が検出されていたことから、本調査区が北東に隣接していたこともあり、粘土採掘坑検出の予想をすることができていたのである。

予想外であったのは、道路状遺構の検出である。道路状遺構は、硬化面の検出、波板状凸凹面の検出、側溝の検出、轍の検出といった人為的な道路整備の痕跡や道路を通行する際にできる痕跡が認められて判断されるものである。本調査で、道路状遺構を決定づけるものとなったのは、波板状凸凹面の検出によるところが大きい。波板状凸凹面の機能や目的については、現在 3 つの説が唱えられている。

1. 道路面地下の基礎構造（軟弱地盤の改良のため）、2. 斜面における荷物等運搬の際の枕木（コロ）の痕跡、3. 牛馬歩行の痕跡である。1 では道路面の硬化の下から波板状凸凹面が検出されることと、検出された地点の地盤が軟弱な場合が多いことからであり、実はこちらの事例は多い。そしてこの場合、波板状凸凹面内の充填土は硬いことが多く、多量の土器が入ることもある。同市額見町遺跡で検出された波板状凸凹面はこの事例となる。3 は牧場などでみられる牛馬の歩行痕跡が波板状凸凹面と酷似することが根拠となっている。

今回検出された波板状凸凹面は、楕円ピット形状の周囲が硬化するという点、ピットが浅いという点、ピット内覆土が軟質であるということがポイントとなる。周囲の硬化面とピットプランが同レベルであるということは、如何に考えても、道路面下の基礎構造とはいえない。よって、前述 2 のような枕木のコロの痕跡、つまり木材や角材を敷いたと考えるのが妥当ではないかと思われる。

本調査区の波板状凸凹面と硬化面は、南東へ下り SK1 へと続く。SK1 底面では非常に強い硬化面を有しており、人がいかにもその場所を歩き、踏み固めたと考えられる面であって、さらにその面は粘土採掘坑へと続くのである。SK1 はいわば採掘した粘土を置く空間であり、採掘作業を迅速に行うための作業空間であった可能性が極めて高い。採取した粘土は運搬しなければならない。その運搬道が今回検出した道路状遺構である。そして、重い土を運ぶ際に、必要な箇所にコロを敷き並べ、運び出していったのではないかと考えるのである。

本調査で検出した粘土採掘坑の時期については、大きく 2 時期に分けることができる。竪坑 2・8 が田嶋編年 IV 2～V 期で、これらは 1 グループとすることが可能である。竪坑 1・4・5・6・7 は VI 期を主体としたもので、2 つ目のグループとすることができる。竪坑 3 のみ遺物による時期が不明だが、掘削時状況によると古い段階のものということであり、1 つ目に属する可能性がもたれよう。

検出された道路状遺構と連なる SK1 硬化層からは田嶋編年 IV 2～V 期の遺物が主に検出されている。また、波板状凸凹面出土の遺物は IV 2 期主体となる。これらのことから、田嶋編年 IV 2 期、8 世紀後半段階で竪坑 2・8・3 が掘削され、道路ができ、作業空間として SK1 硬化面が形成されたものと考えられる。次の段階は田嶋編年 VI 期、9 世紀後半段階であり、竪坑 1・4・5・6・7 が掘削される。さて、これら 2 段階の間にはかなりの時期差が認められるだろう。しかし、道路状遺構や作業空間は機能していたものと考えている。それは、両者の中間の時期にあたる田嶋編年 V 期・9 世紀前半の遺物も硬化面内から検出しているからであり、この時期に位置付けられる粘土採掘坑が調査区以外に存在する可能性が高いと考えられる。

南加賀窯跡群では、多くの須恵器窯跡や土師器焼成坑は検出されているものの、それに付属または

付設しておかしくない工房跡というものの検出が乏しいことが1つの問題となっている。事例はあるのだが、ニツ梨一貫山窯跡群のみとなっている。よって、今回、県調査に続き粘土採掘坑が検出され、新たに道路状遺構が発見されたことは、1つの前進といえるだろう。今回の成果を今後の調査に繋げ、新たな事実が解明されることを期待し、結語としたい。

引用参考文献

- 小松市教育委員会 1991 『戸津窯跡群Ⅰ』
 小松市教育委員会 1992 『戸津窯跡群Ⅱ』
 横田洋三 1994 「木瓜原遺跡の発掘」『古代の製鉄コンビナート』立命館大学
 山村信栄 2001 「古代道路の構造」『古代交通研究第10号』古代交通研究会
 小松市教育委員会 2002 『ニツ梨一貫山窯跡群』
 近江俊秀 2003 『古代国家と道路』青木書店
 近江俊秀 2003 「道路遺構の変遷」『古代交通研究第10号』古代交通研究会
 望月精司 2003 「北陸の概要及び南加賀の須恵器窯構造」『第9回須恵器窯構造検討会（北陸例会）』窯跡研究会
 小松市教育委員会 2005 「ニツ梨豆岡向山窯跡群」『小松市内発掘調査報告書Ⅰ』
 近江俊秀 2008 『道路誕生 一考古学からみた道づくり』青木書店
 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2007 『小松市ニツ梨グミノキバラ遺跡』
 小松市教育委員会 2009 『額見町遺跡Ⅳ』

ニツ梨グミノキバラ窯跡群 出土遺物観察表

掲載No.	実測No.	種別	器種名	出土地点	法量	胎土	焼成	色調	残存	時期	備考
1	1	須恵器	坏A	SK1・D区下層	口12.0,底7.5,高2.9	南加賀産	堅緻	外:N6/,内:断:N8/-7/	7/36	IV 2~V 1	ロクロ右回転。
2	16	須恵器	坏B・蓋	SK1・G区	口13.0,残高1.7	白色系で良質。能美産か?	堅緻	外:2.5Y7/1,断:2.5Y7/1-6/1	1/36	IV~V	重焼きⅡa類。
3	11	須恵器	坏B・蓋	SK1・A区	口15.6,残高2.0	南加賀産、白小石	堅緻	N6/-7/	5/36(体1/5)	II 3~III	ロクロ右回転。重焼Ⅰ類。
4	12	須恵器	坏B・蓋	SK1・F区下層	口16.9,残高1.6	南加賀産	堅緻	内:N6/-7/,外:7.5Y8/1・N2/,断:5PB5/1-4/1	1/36	II 3~III	焼き歪みあり。重焼Ⅰ類。
5	13	須恵器	坏B・蓋	SK1・B区下層+F区下層+C区下層	口15.8,残高2.1	南加賀	良好	N6/-7/	5/36	V	重焼Ⅱb類、ロクロ右回転。
6	17	須恵器	坏B・蓋・鈕	SK1・H区	鈕2.9,鈕高0.8,残高1.2	南加賀産	堅緻	5Y7/1-6/1			内面に工具痕。重焼Ⅰ類。
7	3	須恵器	坏B・身	お9・21層+SK1G区下層	口15.4,台9.8,台高0.5,高6.2	南加賀産、白石粒	堅緻	N7/-6/	12/36	V 1	重焼Ⅰ類。底面外部にヘラ記号「-」・工具痕。ロクロ右回転。
8	20	須恵器	碗B	SK1・D区+B区	台6.5,台高0.8,残高3.05	南加賀産	良	外:5Y6/1・7.5Y7/7,内:N5/-4/	底略完	VI 2~VI 3	糸切り痕。転用焼台。
9	5	須恵器	盤B	SK1・F区	台18.0,台高0.4,残高1.5	南加賀産	良	7.5Y7/1-6/1	5/36	III~IV	ロクロ左回転。内面工具ナデ。
10	25	須恵器	双耳瓶(瓶D)	SK1・H区+C区	残高14.0	南加賀産、白小石	堅緻	外:5Y7/1-6/1,断:10Y6/1-5/1,内:10YR7/1	15/36	VI	正位焼。外面タタキ→カキメ。内面ナデ→下底カキメ、胴部当て具→工具ナデ。ロクロ右回転。
11	43	土師器	内黒碗B	SK1・G区	残高1.2,台6.0,台高0.6	地元産、良質、焼土粒	良	内黒:7.5Y2/1,外:断:10YR7/4	13/36	VI	内面のみに内黒。
12	42	石製品	砥石	SK1・G区	残長6.9,幅2.9,厚2.1						頁岩。
13	31	須恵器	大甕	SK1・G区	口56.4,残高11.8,頸49.4	南加賀産	堅緻	5Y7/1-6/1	5/36	IV 1	口縁部別作り。ロクロ右回転。当て具Dc類、タタキHa類。正位焼。
14	32	須恵器	小甕	竪坑1+SK1・D区+SK1・F区下層	口19.0,頸16.0,残高8.35	南加賀産、白小石	堅緻	2.5Y6/1	7/36	IV 1	当て具Db類。タタキHe類。ロクロ右回転。正位焼。
15	9	須恵器	盤A	SK1・竪坑2下層	口14.8,高1.9,底12.5	南加賀産、白小石	良好	N6/・2.5GY6/	5/36	IV 2	ロクロ右回転。
16	29	須恵器	広口鉢(鉢B)	お12・竪坑4最下層	口23.8,頸高22.4,残高5.85	南加賀産・白小石	良	外:N3/~4/,内:断:N6/~5/	3/36	VI	ロクロ左回転。逆位焼。
17	10	須恵器	盤A	竪坑5・1	口15.3,高1.9,底12.0	南加賀産	やや不良	断:5Y7/1,表:10Y7/1-5/1	5/36	IV 2	外底面ヘラ切りのちナデのみ。内面底部に径9.5cm重ね焼痕。
18	23	須恵器	長頸瓶(瓶A)	お10・竪坑5黒灰埴土層	残高8.5,台11.0,台高1.5	南加賀産、白小石多目	堅緻	外:N7/・N1.5/,内:N7/~6/	11/36	~V 1	正位焼。
19	50	須恵質	焼台	お11・竪坑5最下層・黒灰埴土	口6.4,高4.25,底8.75	南加賀、砂多い	良好	断:N7/,表:N7/~6/1	7/8	VI 1	ロクロ右回転。

掲載 No	実測 No	種別	器種名	出土地点	法量	胎土	焼成	色調	残存	時期	備考
20	35	須恵質	焼台	お11・竪坑5最 下層黒灰埴土+お 10・29-2層上面+ SK1・H区+SK1・F 区	口9.2, 高5.0, 底12.2	南加賀	堅緻	5Y8/1-7/1	17/36	VI 2	底面除く外面降灰。火ぶ くれ。
21	45	土師器	皿A	竪坑6覆土+え 12・13道路状遺構上 面	口13.0, 高2.15, 底6.0	地元産、良質	良好	表:7.5Y7/6, 断:10YR8/3-8/4	11/36	VI	糸切り痕。ロクロ右回転。
22	49	土師器	小型鍋	竪坑6・1+覆土	口18.2,高 18.45,頸 16.55,底9.4	地元産	良好	10YR8/3-8/4	略完	VI 2-VI 3	ロクロ右回転。糸切り痕。 内外煤焦げあり。
23	46-1	土師器	小型丸底 壺	竪坑7・1	口9.0,残3.3	良質、焼土粒多 い	良好	外:10YR6/4, 内:7.5YR6/6, 断:10YR8/4	3/36	漆町12群	No 24と同一個体(接点な し)
24	46-2	土師器	小型丸底 壺	竪坑7・1	残高8.6,頸 5.8,胴最9.4	良質、砂少な い、焼土粒多い	良好	表:7.5Y6/6-8/4, 断:10YR8/3-8/4	1/2	漆町12群	No 23と同一個体(接点な し)。推定高10.1。正位焼。
25	2	須恵器	坏A	え13・竪坑7上面土 層	口13.2,台 9.2,高3.3	南加賀産	やや不 良	7.5Y7/1-6/1	7/36 (体1/2)	IV 1	ロクロ右回転。重焼Ⅲ類。
26	33	須恵器	広口壺 (壺F)	え13竪坑7・P1+ 竪坑7上面~上層、 え13流土層	口19.2,頸 17.3,底12.4	南加賀産	堅緻	外:N8/~6/ 断:5Y5/1	11/36	IV 1・IV 2	ロクロ左回転。底面焼台 癒着、スサ入り粘土付着。 正位焼。
27	19	須恵器	坏B・蓋・ 鈕	竪坑8	鈕2.5,鈕高 1.3,残高1.7	南加賀産	堅緻	断:N6/ 表:5Y7/1-6/ 1・2.5Y5/2-4/2			ロクロ右回転。内面へラ 記号「二」。
28	4	須恵器	坏B・身	竪坑8	台9.6,台高 0.5,残高1.9	南加賀産	堅緻	5Y6/1-7/1	4/36	IV 2	ロクロ左回転。外面のみ 降灰。
29	18	須恵器	坏B・蓋・ 鈕	え10道路状遺構・ 肩部地山直上	鈕3.1,鈕高 1.0,残高1.4	南加賀産	良	表:5G6/1, 断:7.5Y6/1-5/1			
30	7	須恵器	盤B	え10道路状遺構・ 肩部地山直上	え15.0,台高 0.5,残高1.35	南加賀産	やや不 良	10Y7/1-6/1	5/36	IV 2~V	ロクロ右回転。
31	28	須恵器	厚底鉢 (鉢E)	え12・13道路状遺 構上面	底14.0,底高 1.4,残高5.7	南加賀産、砂多 量	良	2.5Y7/1-6/1	7/36	II	ロクロ右回転。
32	44	土師器	赤彩内黒 碗A	SK02	口12.3,高 3.75,底6.0	地元産、良質	良	外赤:2.5YR6/6, 内黒:N2/ 断:10YR7/4-6/4	1/4	VI 2-VI 3	内面底部に、重ね痕跡。 ロクロ左回転。
33	15	須恵器	坏B・蓋	え9	口7.4,残高 1.3	南加賀産、砂多 い	良	5Y6/1	7/36	V	重焼Ⅱa類、位置は最上 位か。ロクロ左回転。
34	21	須恵器	碗B	お13	台7.2,台高 1.25,残高 2.55	南加賀産、白石 粒	良	N-2.5GY6/	10/36	VI	ロクロ右開眼。重焼Ⅲ類。
35	6	須恵器	盤B	お9・10暗灰埴土	台16.0,台高 0.85,残高2.3	南加賀産、砂多 量	やや不 良	7.5YR7/1	4/36	IV 2	
36	27	須恵器	短頸壺 (壺F)	え11暗褐色埴土上 面	口17.2,頸 15.5,残高7.1	南加賀産	良好	2.5Y7/1-7/2	4/36	IV 2~	正位焼。量産化タイプで 焼成粗い。
37	24	須恵器	短頸壺 (壺D)	え12暗褐色埴土上 面	底11.4,残高 10.55	南加賀産、砂多 い	堅緻	5Y6/1-7/1	7/36	II 3~III	正位焼。内面タタキ→工 具ナデ。
38	26	須恵器	双耳瓶 (瓶D)	え・お13流土層	底9.9,残高 5.85	南加賀産	良好	2.5YR7/1-6/1	1/4	V・VI	正位焼。ロクロ右回転。 量産化タイプで焼成粗い。
39	47	土師器	小型鍋	え13・33層	口13.7,残高 4.9,頸12.3	地元産、砂多 い	良好	10YR8/3	4/36	VI 3	ロクロ右回転。竪坑7出 土品。
40	41	瓦	平瓦	お6	残長13.9, 残幅12.3, 厚2.05	南加賀産、小石 粒	良好	N6/~5/	1/8		タタキHe類。
41	39	須恵質	円筒形	お7	口14.0,残高 6.8	南加賀産、砂多 い	良	外:2.5Y7/1・7/2・ 6/1・6/2, 断:2.5Y7/1・5/1・ 7/2	5/36		ロクロ右回転。量産タイ プで焼き質粗い。
42	40	須恵質	円筒形	か3	残高8.4,胴 最14.0	南加賀産	良好	5Y7/1-5/1	7/36		外面カキメ→ケズリ→ナ デ。ロクロ左回転。量産 タイプで焼き質粗い。
43	36	須恵質	焼台	え8	口8.85, 高3.3,底9.0	南加賀、砂多 量	堅緻	2.5Y7/1-6/1	略完		粘土置台・土器片癒着。 歪み顕著。火ぶくれ。ロ クロ右回転。
44	34	須恵質	焼台	え・お13流土層	口10.8,底 13.1,高6.2	南加賀、砂多 い	堅緻	外:N6/~5/ 内:断:N7/~6/	11/36		ロクロ右回転。
45	37	須恵質	焼台	あ7	口13.2,高 3.55,底13.7	南加賀、砂多 量	堅緻	2.5Y7/1	7/36		底面含む外面に降灰。ロ クロ右回転。
46	38	須恵質	焼台	調査区東	口15.9,高 3.0,底15.9	南加賀	良	表:2.5Y7/1-6/1, 断:5Y5/1	3/36		底面に窯床癒着。底面含 む外面に降灰。
47	1	須恵器	坏H・身	試掘10トレA	口11.8,受 径15.1,受高 1.5,残高5.3	南加賀産、砂少 なめ	良	10Y7/1-6/1	8/36	T K 209	内面底部に工具ナデ。
48	2	須恵器	鉄鉢 (鉢D)	試掘7トレC	口18.3, 残高4.7	南加賀産、良質	堅緻	2.5Y7/1	1/36	III ~	蓋付焼成。
49	3	須恵器	坏B・蓋	試掘13トレA下	口14.8,高 3.4,鈕径2.9, 鈕高0.6	南加賀産	堅緻	N7/~6/	完形	II 3	焼き歪み。重焼Ⅰ類。ロ クロ右回転。
50	4	須恵器	坏B・蓋	試掘3トレA	口13.35,高 2.5,鈕径1.9, 鈕高0.9	南加賀産、砂多 量	良	7.5Y6/1	24/36	V	重焼Ⅱa類。ロクロ右回 転。
51	5	土師器	把手	試掘13トレC	-	地元産、砂・石 粒多い	良	外:2.5Y6/1-5/1, 内:10YR7/4・8/ 4.5YR6/8	把手のみ		穿孔あり。

第Ⅲ章 薬師遺跡Ⅶ次発掘調査

第1節 調査に到る経緯

小松市矢崎町地内で計画された住宅新築工事に伴い、平成21年9月4日付けで河原達夫氏より埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（薬師遺跡）に含まれていたため、埋蔵文化財調査室は同日付けで試掘調査が必要との旨を回答し、9月11日に試掘調査を実施。対象地に設定した3か所の試掘坑すべてにおいて埋蔵文化財が確認され、工事実施にあたっては、事前に発掘調査を実施するなど、埋蔵文化財に対する適切な保護措置が必要との旨を9月14日付けで通知した。

住宅新築工事の計画では、基礎工事の及ぶ深さと埋蔵文化財の確認高との間は10cmしかとれなく、さらにその基礎を支えるための表層改良工事が計画されていた。そのため、基礎工事範囲における埋蔵文化財の現状保存は不可能と判断され、その範囲137㎡を発掘調査することとなった。9月17日付けで事業主からの発掘調査依頼の提出、9月29日付けで発掘調査に関する協定書の締結があり、10月6日、発掘調査の実施に至った。

なお、当調査の原因が個人住宅の建設であったため、国庫補助事業として発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

1. 調査方法

国土座標（日本測地系）に沿ってグリッドを5m間隔で設け、重機による表土除去を行い、人力掘削による遺構検出作業を実施した。その他の遺構は半裁またはアゼを設け土層確認した。遺構図面は、平面図・断面図を1/20または1/10で作成し、全体遺構図は1/40で作成した。随時必要に応じて、



第21図 薬師遺跡Ⅶ次 調査区位置図 (S=5000)

モノクロ・カラー・リバーサル・ネガ・ポジフィルムとデジタルカメラを用いて写真記録を撮った。調査完了後、重機で埋め戻しを行った。

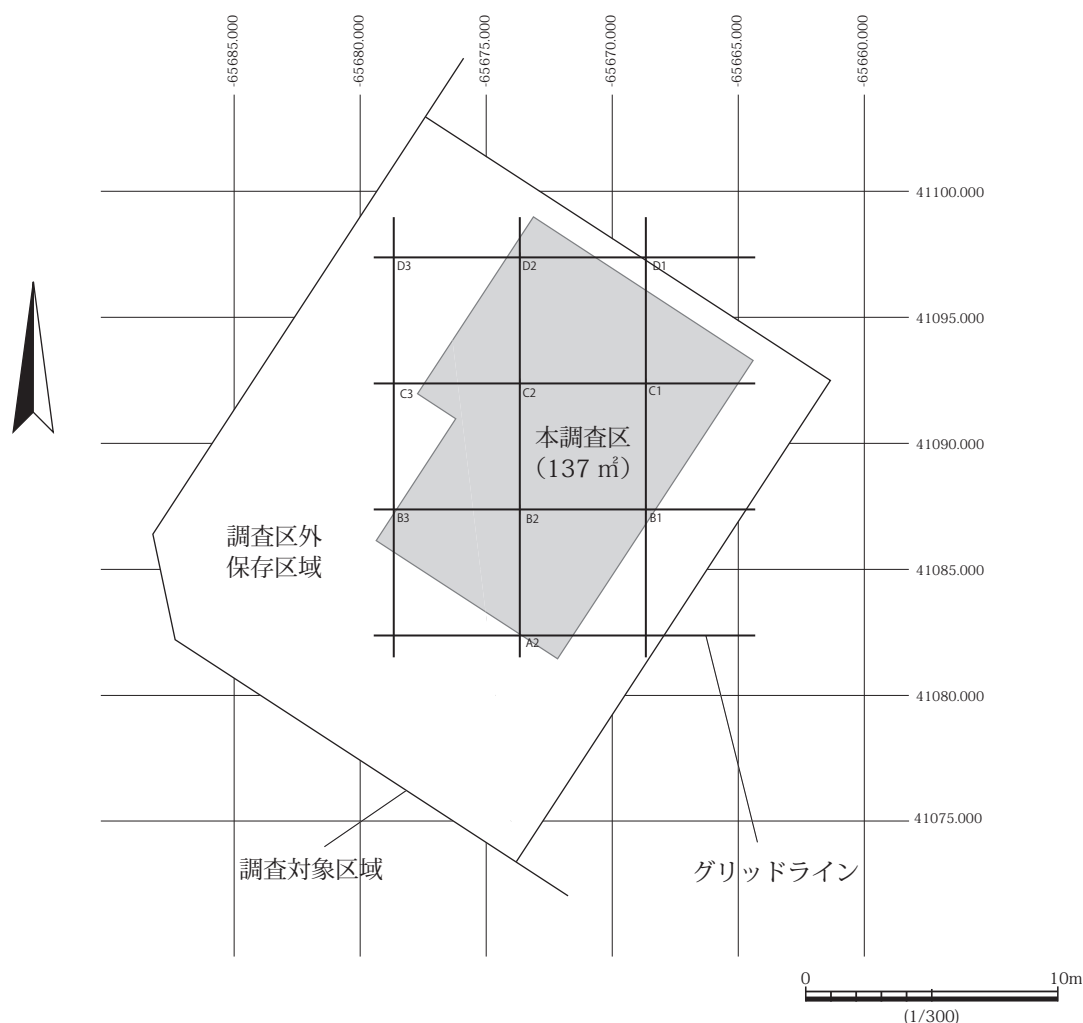
遺構番号と既往の調査については、次章で述べるⅧ次調査にまとめて示すこととする。

2. 発掘作業の経過

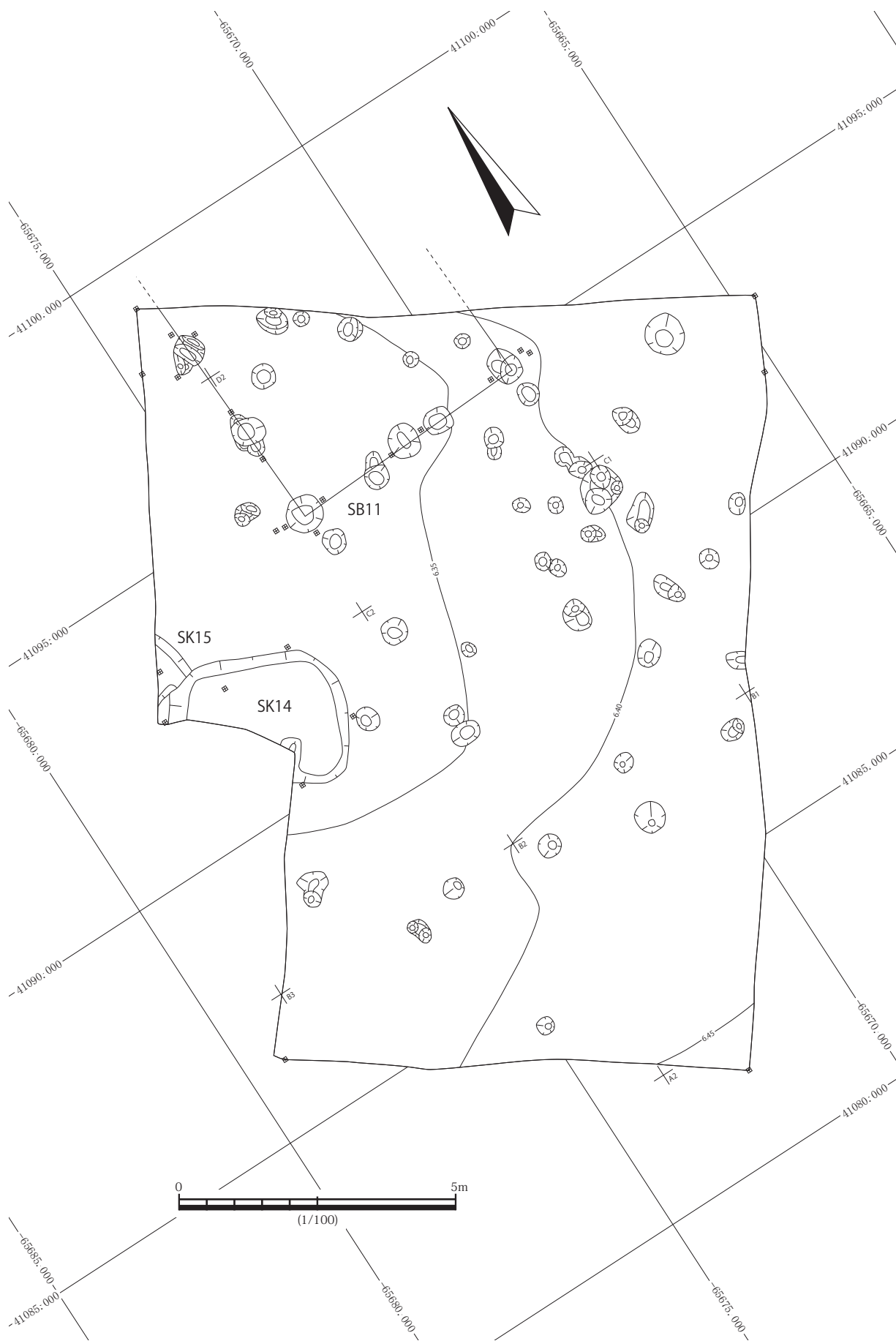
平成 21 年 10 月 6 日	発掘調査開始。重機による表土除去。
10 月 7 日	基準点測量・水準測量およびグリッド設定。
10 月 9 日	作業員による遺構検出作業、ピット半裁作業の開始。
10 月 14 日	SK14・15を確認し、掘り下げ開始。SB11を確認。
10 月 20 日	すべての遺構を完掘。全景写真撮影。
10 月 21 日	全体平面図作成。
10 月 28 日	重機による埋め戻し作業。調査完了。

3. 出土品整理等

出土品整理は平成 23 年度に実施した。出土品の洗浄・注記作業を整理作業員により行い、分類・接合作業、実測作業を整理作業員・調査員で実施した。その後トレース作業はデジタルで調査員・臨時職員が行った。この整理段階にて、調査時の日本測地系グリッドは、世界測地系へ変換した。



第 22 図 薬師遺跡Ⅶ次 調査区位置とグリッド配置図 (S=300)



第 23 図 薬師遺跡Ⅶ次 全体遺構図 (S=1/100)

第3節 発見された遺構

1. 基本層序

現況面下で深さ 20～30cmの耕作土層、この直下に耕作土と黒褐色土の攪拌土や整地層が認められる。その下に、現況面から深さ 30～40cmで遺構確認面でもある黒褐色土地山となり、その下の深さ 55～65cmで明度の高い黒褐色土地山に至る。遺構確認面の黒褐色土と遺構埋土との明確な差はなく、埋土の遺物や挟雑物の量により判断する、極めて分層が難しい土層と言える。

2. 遺構

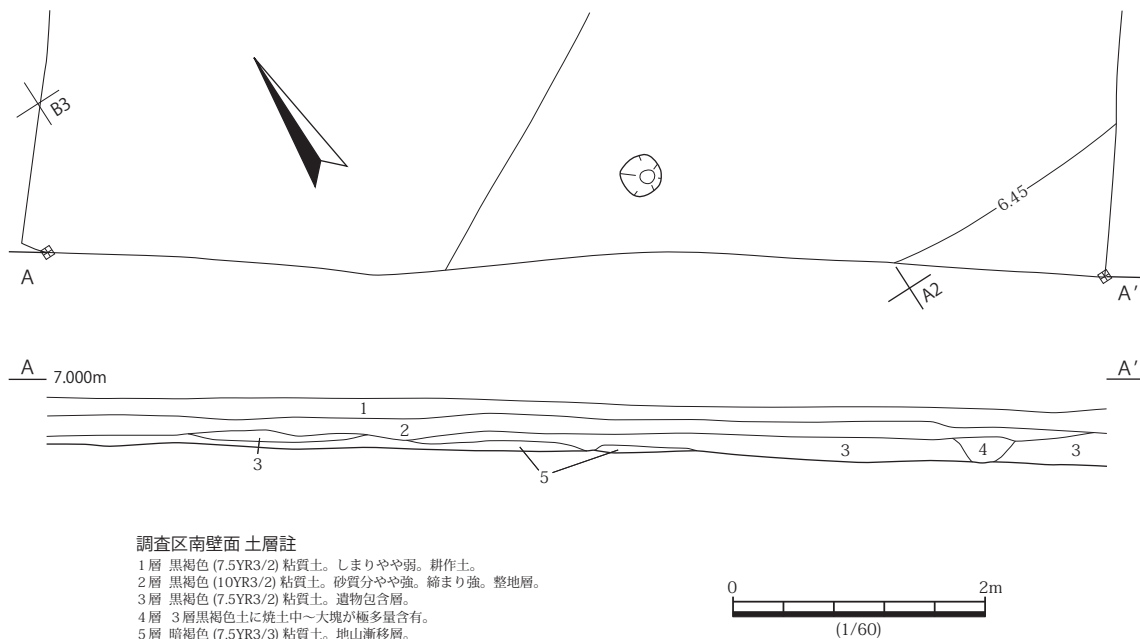
本調査区からは、掘立柱建物 1 棟、土坑 2 基が検出された。狭小地であるため、すべての遺構が調査区外に延びる形となっている。

(1) 掘立柱建物 SB11

調査区の北端で検出されたもので、残存桁行 2 間（残存 3.62m）×残存梁行 2 間（残存 4.5m）の側柱建物である。柱間寸法は、桁間 180cm、梁間 220・230cmを測り、残存面積は 16.29㎡だが、予想面積として 3 間×2 間なら 24.39㎡、4 間×3 間であれば 48.37㎡相当になるものと思われる。建物主軸は N-3° -W、ほぼ真北である。

柱穴の掘方プランは隅丸形状や円形を呈し、断面形状は段掘り、スロープ、すり鉢状と様々な形状をもち一貫性のない掘方となっている。径 54～68cm、深さ 30cm、ただし P1 のみ 54cmと深くもつ。“柱のあたり”が認められ、P1 土層断面から判断すれば、径は 10cm程度となるものの、段掘り形状からみれば、柱径は 20cm以内であったと思われる。柱筋の通りは桁行・梁行とも良好である。掘方の並びや向きはランダムで、掘方プランが方形を呈するものがあるものの、縄張りはされず形状のみ意識して掘り込まれたものと考えられる。柱は、建物廃絶時に抜き取られている。

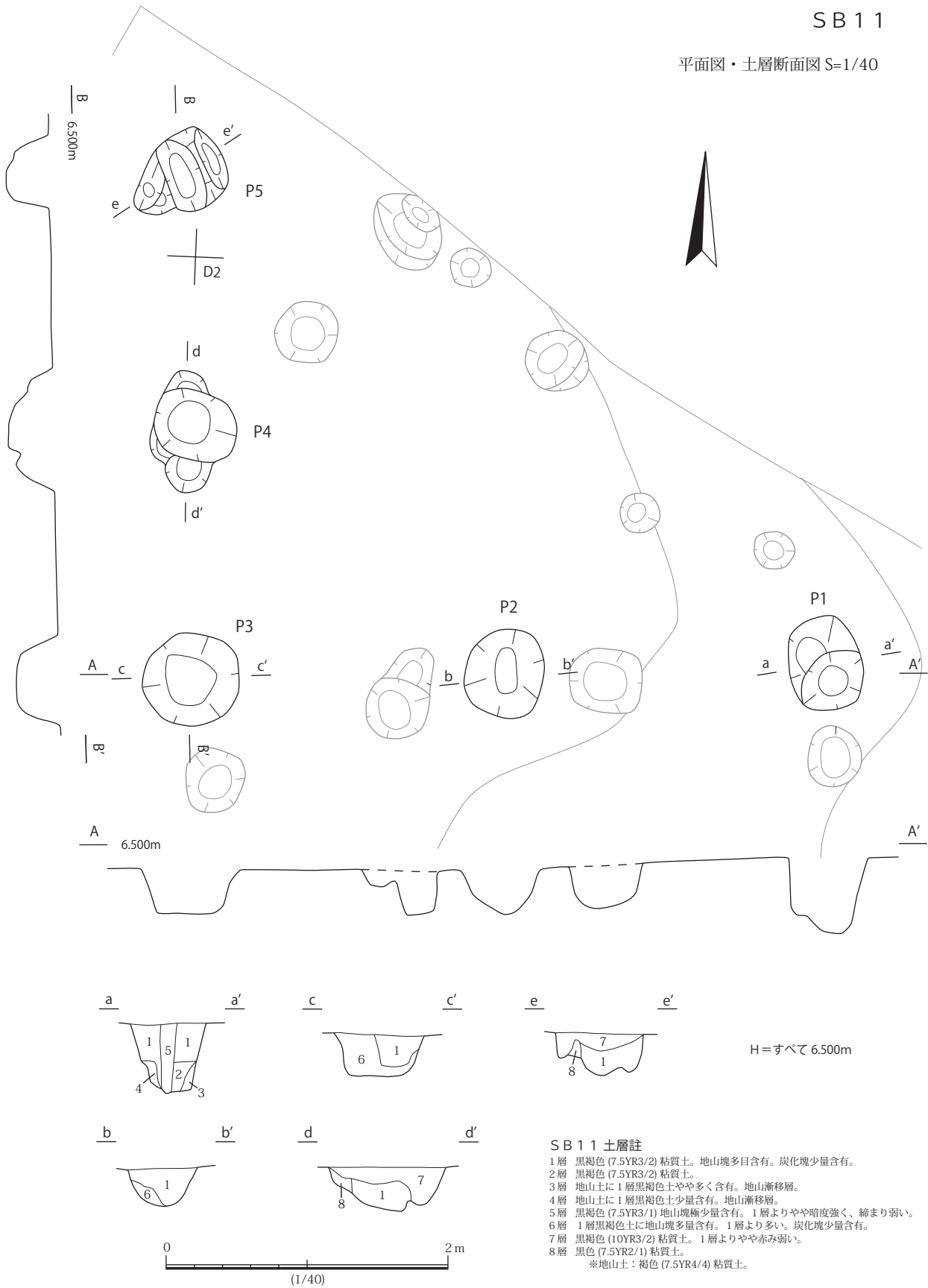
調査区土層（調査区南壁面） S=1/60



第 24 図 薬師遺跡Ⅶ次 基本土層図 (S=1/60)

SB11

平面図・土層断面図 S=1/40



SB11 土層註

- 1層 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。地山塊多量含有。炭化塊少量含有。
 - 2層 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。
 - 3層 地山土に1層黒褐色土やや多く含有。地山漸移層。
 - 4層 地山土に1層黒褐色土少量含有。地山漸移層。
 - 5層 黒褐色 (7.5YR3/1) 地山塊極少量含有。1層よりやや暗度強く、締まり弱い。
 - 6層 1層黒褐色土に地山塊多量含有。1層より多い。炭化塊少量含有。
 - 7層 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。1層よりやや赤み弱い。
 - 8層 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土。
- ※地山土：褐色 (7.5YR4/4) 粘質土。

第25図 薬師遺跡VII次 SB11 遺構図 (S=1/40)

(2) 土坑 SK14・SK15

2基の土坑が重なって検出されている。SK15はごく一部が検出されたもので、SK14を切って掘り込まれていることが特徴である。SK14は長径320cm、短径236cmの隅丸方形プランをもつもので、深さは20～25cmを測る。底面はほぼ平坦を呈すが、南西側でテラスを形成している。SK14の遺物は、覆土の上層・下層や上面から満遍なく出土している。遺物の時期としては田嶋編年Ⅲ～Ⅴ2期のものが認められ、最も新しいⅤ2期に埋没したと考えるのが妥当ではないかと考えられるが、出土量としてⅢ～Ⅳ期が最も多く、特に赤彩品が目立つため、Ⅴ2期にあたる遺物の方が混入品である可能性もある。なお、SK15からの出土遺物は検出されていない。

第4節 出土遺物

出土遺物は、須恵器、土師器、鉄生産関連遺物である鞆羽口・砥石・鍛冶滓が出土しており、全体量として、遺物箱（内法645cm×380cm×145cm）4箱である。大まかではあるが、土師器量が全体の1/2以上、須恵器量が1/4であり、こういった割合は典型的な集落の出土傾向と言えるだろう。出土遺物は細片が多い。遺構が少ないので土坑出土のものが主体だが、包含層出土のものも同等量あり、実測は可能なものを出来るだけ行っている。また、掘立柱建物ピットからの出土は僅か3点のみであり、実測に至っていないのだが、口縁端部の面・外面タタキ調整をもつ須恵器甕破片1点は、田嶋編年Ⅲ期～Ⅳ期で見られる傾向のものである。以下、文中では田嶋編年を抜いた形で表記する。

1. SK14出土遺物

1～3は坏Aである。1・2はⅤ期で、Ⅴ1期に比べ、口径をやや大きく器肉を薄くし、体部が開く傾向をもつⅤ2期に位置付けられるものと考えられる。

4・5は坏Bの蓋で、4は口径19.2cmを測り、天井ケズリが施され、口縁端部がそのまま折れ曲がるタイプである。法量とケズリの特徴から、Ⅲ～Ⅳ1期になるものと思われる。5も同様であり、4と接点がなかったのだが同一個体の可能性をもつ。

6・7は坏Bの身である。6は体部が角張って立ち上がる箱形タイプで、高台が踏ん張って小さいためⅣ2期に位置付けされるものである。

8は須恵器甕で、外面にタタキ後ケズリとナデ調整を、内面に当て具後ケズリとナデ調整を施しているものである。

9は赤彩碗、10・11は赤彩碗Fである。9は底部欠損し剥落が著しいものの、内外にミガキ調整が認められるものである。

10・11は底部を平たく広くもち内外にミガキ調整が施され、両者とも底部外面はミガキをせず、ケズリ調整がそのまま残っているものである。こういった調整が出現し定着するのがⅢ～Ⅳ1期にあたるため、この時期に位置付けできよう。

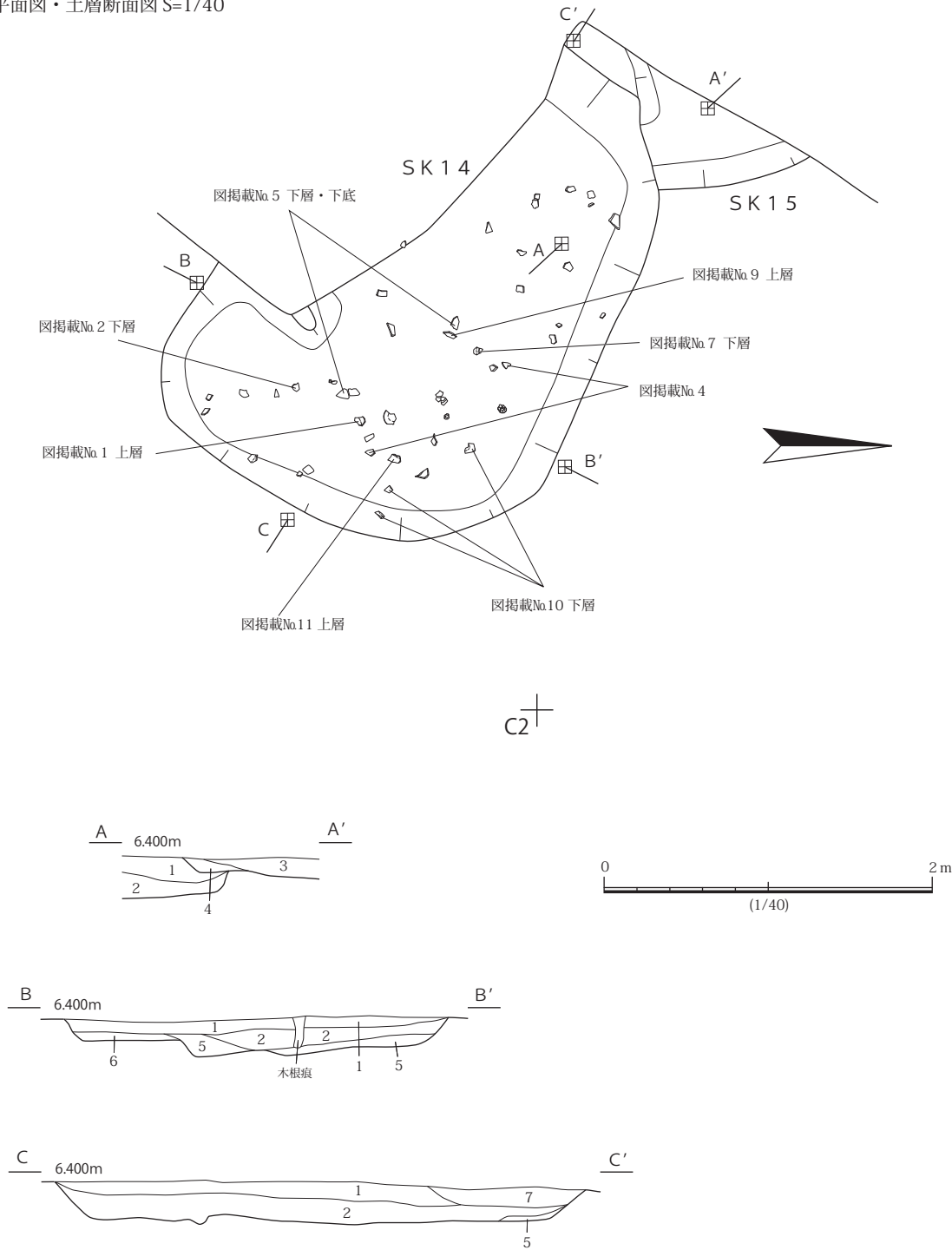
2. SK14上面出土遺物

当出土地点の遺物は、SK14・15とその周辺の最も上位層から出土しているもので、遺構プランが確定できない掘削時の初期段階に、土坑と竪穴建物の可能性を考えて、別に取り扱われていたものである。

12は、底部の器肉が厚めの碗タイプの坏Aであり、口径・器高からⅢ～Ⅳ1期に見られる特徴のものである。

SK14・15

平面図・土層断面図 S=1/40



SK14・15 土層註

- 1層 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。土器細粒やや多く混入。SK14 覆土。
- 2層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。1層よりやや暗度強。土器細粒やや多く混入。SK14 覆土。
- 3層 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。1層よりやや明るみあり。地山塊少量混入。SK15 覆土。
- 4層 3層土に地山塊多量混入。SK15 覆土。
- 5層 地山土に2層土多量混入。SK14 覆土。
- 6層 地山土に1層土少量混入。地山漸移層。SK14 覆土。
- 7層 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土に、黒褐色 (10YR3/2) 粘質土多量混入。別遺構か。

第26図 薬師遺跡Ⅶ次 SK14・15 遺構図 (S=1/40)

13は、やや爪立ち気味だが踏ん張って高台がつき、底部から胴部へ急に立ち上がり箱形を呈すタイプで、IV 2期に見られる特徴をもつ。

14は、横瓶の閉塞部分である。円盤閉塞が顕著で、外面にタタキ痕跡はなく、シッタ痕跡が認められるため、両面閉塞で作られた底部側面にあたるものである。内面には、一見焼成後の段階で先端の鋭いもので刺突したような痕跡が認められるが、粘土内の白小石が弾け飛んだ可能性ももたれる。両面閉塞の成形技法は、南加賀窯跡群でII 3期からIV期の8世紀代に見られる特徴である。

15は、鉢C、別名碗形鉢の口縁と考えられるものである。南加賀窯跡群ではVI期に焼成されているものである。

16・17はロクロ成形の赤彩碗Fである。16は端部が内湾するタイプで、こちらは内外赤彩されミガキ調整の施されるもの。口径も小さく、器種組成が増えるIII期に相当するものと考えられる。

17は、外面のみ赤彩を施し体部下半にケズリ調整がそのまま残って、ミガキがされないものであり、ケズリ調整の定着するIV期に位置付けされるも b である。

18・19は長胴釜の口頸部である。18は口縁端部に面をもつタイプのロクロ成形品で、頸部内面に工具で付けたナデツケが認められる。口縁端部に面のみをもつ特徴はIII～IV期に限られるものである。

19は、器肉の薄く、口縁端部がつまみ上げられて作られるタイプで、VI期に見られる特徴である。

20は、19と同時期の浅鍋で、やはり器肉が薄く、口縁端部がつまみ上げられるタイプのものである。

3. グリッド・ピット 出土遺物

21は、口径14.9cmを測る坏Aの蓋でII 1～II 2期に相当するものである。

22は坏Bの蓋で、口径が小さいため、II 2期のものと判断されるものである。

23はVI 2～VI 3期に位置付けられる碗Bで、底部外面に糸切り痕がそのまま残っているものである。

24は、双耳瓶(瓶D)の底部で、体部にケズリ調整がみられる。双耳瓶はIV期に出現してVI期まで確認できる器種であるが、南加賀窯跡群ではVI 2・VI 3期に量産化が進み、多く焼成される。この双耳瓶は底部内外に糸切り痕がそのまま残ため、量産化の痕跡とも言えるもの。また、焼成についても焼きが粗く、VI 2・VI 3期のものでよいと思われる。

25からは土師器である。25は中実の高坏Hで、外面に工具で撫でつけた痕跡が認められるもの。

26はロクロ成形の赤彩碗で内面にミガキを施すものである。

27は甑か鍋の把手であり、丸いタイプではなく平たいタイプなのでロクロ成形品に付くものと考えられる。

28・29は在地系の短胴釜。28は、口縁端部がくの字に曲がる、I・II期に位置付けされる典型的な形状を呈すものである。

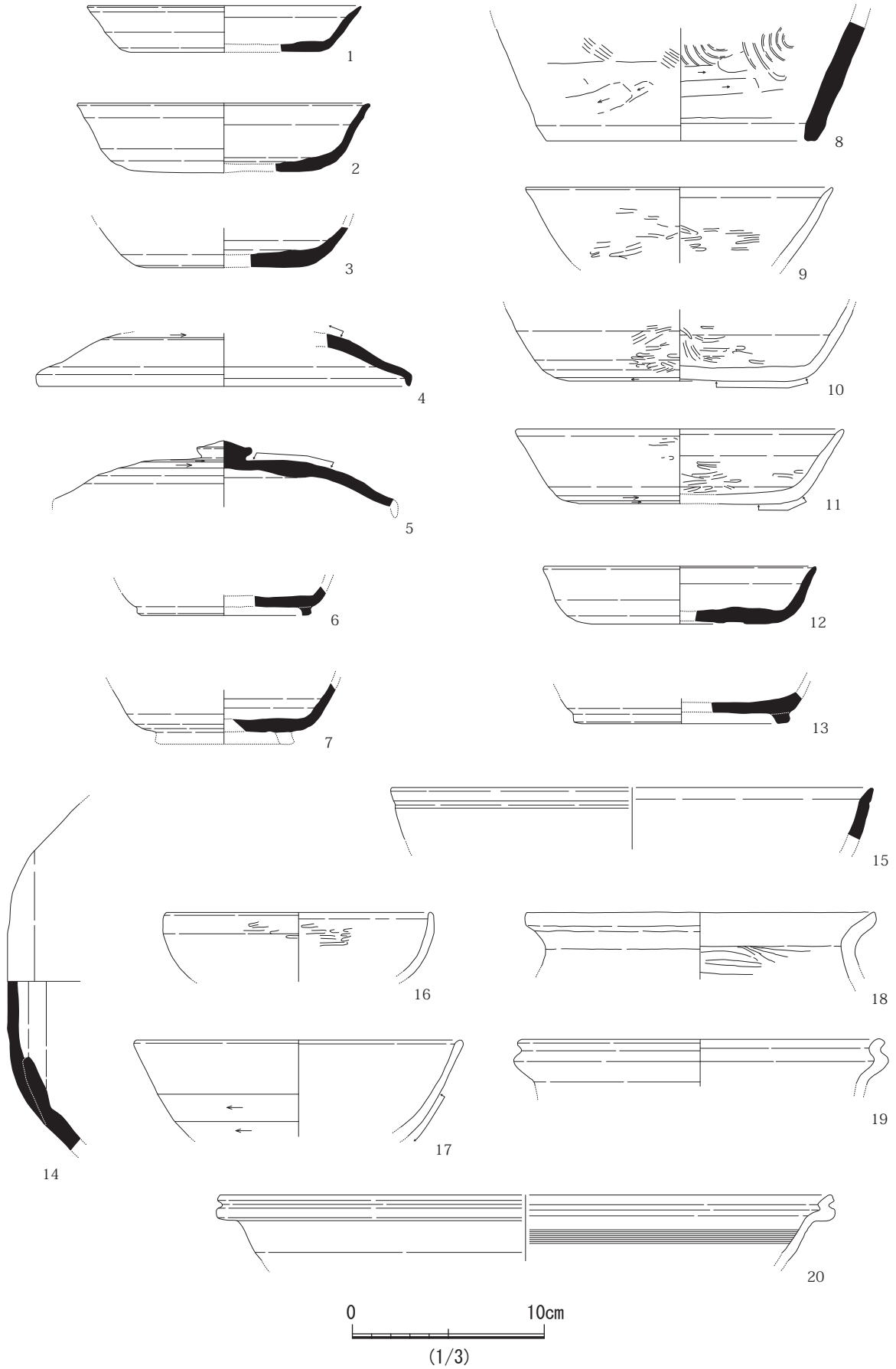
29は内外にハケ調整やナデ調整が認められるものである。

30・31はロクロ成形の長胴釜である。30は、口縁端部に面を形成するタイプで内外にカキメ調整が施され、II～IV期での傾向を示している。

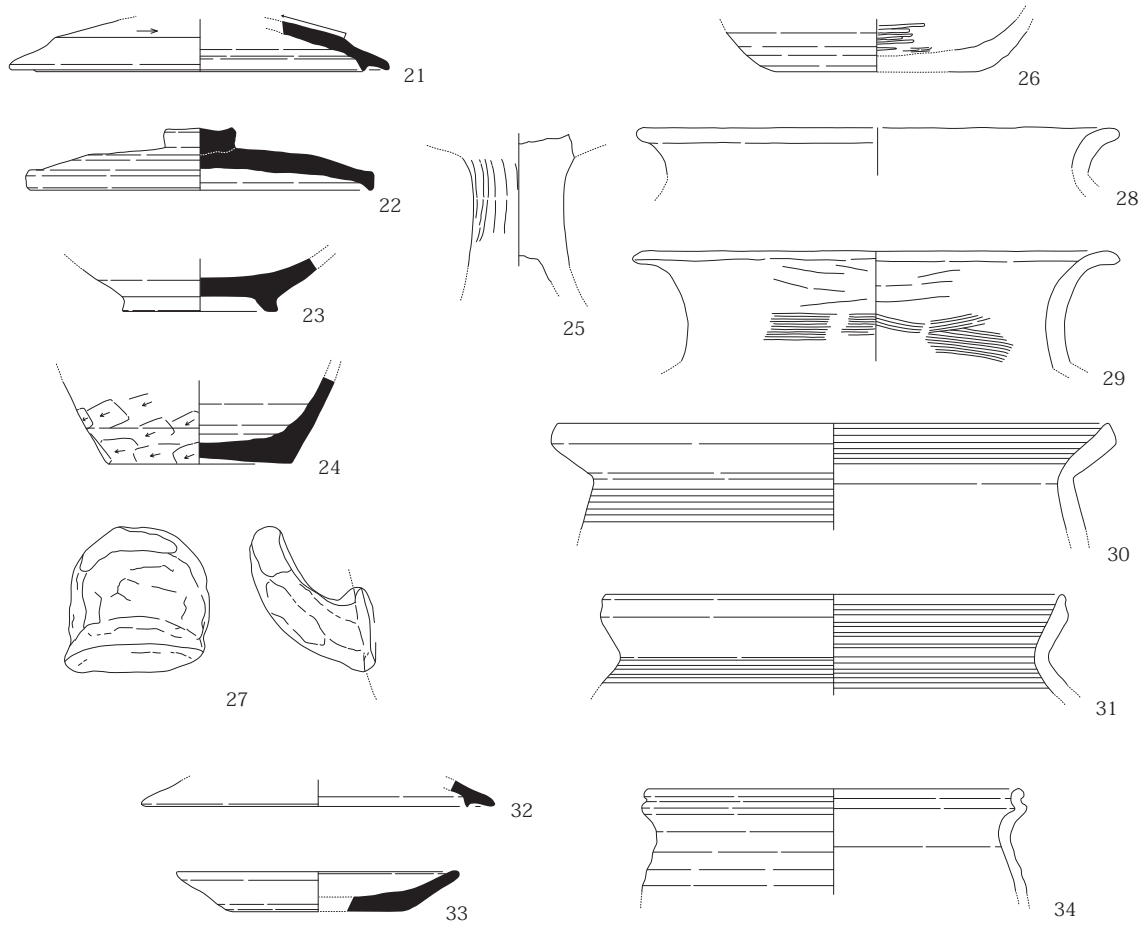
31は口縁端部に若干のつまみ上げが認められるもので、内外にカキメ調整が施され、III～IV期の特徴をもっているものである。

32から34は、ピット出土の遺物である。32は坏A蓋の端部、折り返し部分のみの出土であるが、II 1～II 2期に位置付けられるものである。

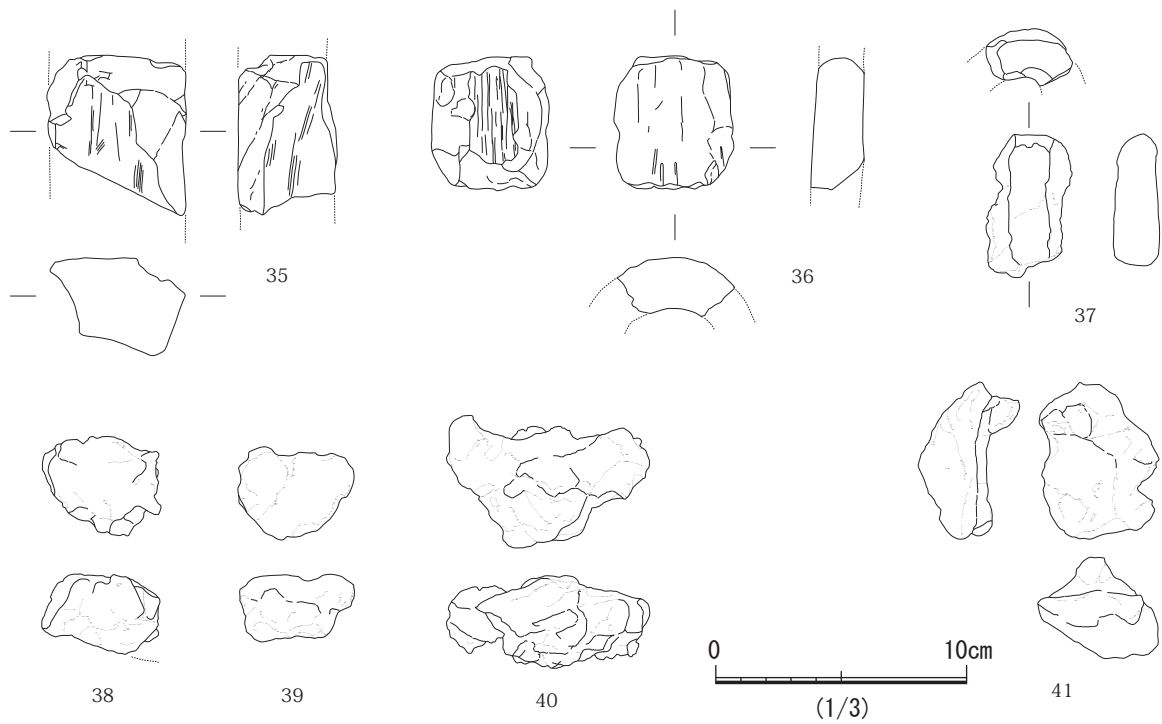
33は皿A、重焼皿類の典型的な無台の皿であり、VI 3期に位置付けできる、焼成の粗い量産品である。



第 27 図 薬師遺跡Ⅶ次 出土遺物 1 (SK14) (S=1/3)



第 28 図 薬師遺跡Ⅶ次 出土遺物 2 (グリッド・ピット) (S=1/3)



第 29 図 薬師遺跡Ⅶ次 出土鉄生産関連遺物 (S=1/3)

34 は、小型鍋。名称としては小型釜とすべきかもしれないが、外面の全ての突出部に煤が付着し、被熱により器面が脆くなるといった煮炊の痕跡が著しいものであるため、鍋とした。器肉が非常に薄く、口縁端部をつまみ上げて形成するもので、Ⅵ期に位置付けてよいものである。

4. 鉄生産関連 出土遺物

鉄生産関連としたが、当調査区では鍛冶滓と砥石・鞴羽口が出土している。鍛冶滓は、総計 80 点、総重量 1134.1 g であり、殆どが精錬・鍛錬鍛冶滓である。ただし 5 点のみ製鉄・精錬鍛冶滓を含む。坩形鍛冶滓をはじめ、内面に砂の痕跡をもつ炉壁、含鉄の鍛冶滓、炉壁での上位部にあたるものとされるガラス状や気泡の多い軽い滓、そして、製鉄・精錬系の流動滓が確認される。この他、鞴の羽口 4 点、砥石 1 点が出土している。出土位置は SK14 から約 6 割を占めるものの、グリッド・包含層・ピットのあらゆる地点で散布程度に出土している。

35 は砥石である。凝灰岩製で、擦痕が 2 面確認できる。

36・37 は鞴の羽口である。36 は、径が全体の 1/4 のみが残る羽口の中央部分であり、直径は推定で 6.7cm になるものと考えられる。断面での色調は、外面が須恵器色、所謂灰色であり、内面は黄白色となっている。混和材が多く入りざらついており、内面には枝に巻き付けたような筋状の痕跡と、粘土が重なった時に出来る痕跡で粘土紐痕のような痕跡が 2 筋確認できる。

37 は、羽口の端部で、先端が溶解しガラス状となっているものである。出土物の径が全体の約 1/4 のみ残存、直径は推定で 5cm 程度になるものと思われる。外面端部は黒色を呈し、次第に灰黄色となってゆく。胎土は砂を多く含み、断面に筋状の痕跡が見られるため、スサのような混和材を混入した可能性がある。

38～41 は鉄滓である。38・39 は鍛冶滓だが、鉄分を多く含むために亀裂が入り錆化するもの。

40 は坩形鍛冶滓。41 は、炉壁の上部と考えられるもので突端は気泡状を呈している。内面に角のある面を形成した痕跡が認められる。

第5節 小結

狭小区域ということもあろうが、今回の調査区での検出としては遺構密度は薄く、薬師遺跡全体の中でも末端、所謂ムラの外れ的な様相をもつ可能性がある。ただし、特筆すべきは、まとまった量の鍛冶滓が出土していることであろう。特に、SK14 からまとまった量が出土するため、鍛冶滓を廃棄した土坑であった可能性が高い。となれば、近くに鍛造鍛冶炉や、精錬鍛冶炉が存在する可能性もたれらると思えよう。

さて、次章においても薬師遺跡のⅧ次調査を報告する。よって、Ⅶ次とⅧ次を合わせて小結とさせていたただきたくため、ここではこのあたりに止めておきたい。

引用参考文献

- 宮田 明 2007 「薬師遺跡」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』小松市教育委員会
 坂下義視 2008 「薬師遺跡」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』小松市教育委員会
 大橋由美子 2011 「薬師遺跡Ⅴ次・Ⅵ次」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』小松市教育委員会

薬師遺跡Ⅶ次 出土遺物観察表

掲載No	実測No	種別	器種名	出土地点	法量	胎土	焼成	色調	残存	時期	備考
1	23	須恵器	坏A	SK14・17	口14.1,高2.4,底10.9	南加賀産	良	5Y7/1-6/1	2/36	V 2	重焼Ⅲ類。ロクロ左回転。
2	14	須恵器	坏A	SK14・31+C区	口15.0,高3.6,底11.7	南加賀産	良 (酸化気味)	内:2.5Y4/1, 外:7.5YR6/3	5/36 (体1/4)	V 2	内面全面降灰。重焼Ⅲ類。ロクロ左回転。
3	19	須恵器	坏A	SK14・C区	残高2.05,底9.0	南加賀産, 白砂	良	10Y6/1	6/36		ロクロ左回転。
4	21	須恵器	坏B・蓋	SK14・5+25+A区+C区	口19.2,残高2.7	南加賀産	良	5Y6/1	1/4	Ⅲ-IV1	ロクロ右回転。重焼Ⅰ類。天井にケズリ。
5	31	須恵器	坏B・蓋	C-3 SK14上面+SK14・15+29	残高3.4,鈕2.85,鈕高0.95	南加賀産	良好	5Y6/1	10/36	Ⅲ?	重焼Ⅰ類。ロクロ右回転。
6	20	須恵器	坏B・身	SK14・B区	残高1.5,台8.6,台高0.45	南加賀産	良	5Y7/1	5/36	IV 2	ロクロ左回転。
7	24	須恵器	坏B・身	SK14・27	残高2.2	南加賀産, 良質	良好	2.5Y6/1	6/36	V 1?	ロクロ右回転。
8	13	須恵器	甌	SK14・C区	残高5.8,底14.0	南加賀産, 小石	堅緻	2.5Y7/1	4/36		外面:タタキ→ケズリ→ナデ,内面:当て具→ケズリ→ナデ。当て具Da類。ロクロ左回転。
9	28	土師器	赤彩碗	SK14・28	口16.0,残高4.0	地元産	良	断:10YR8/4, 表:5YR6/8, 赤:2.5YR4/8	6/36	Ⅲ~	ロクロ成形。内外赤彩,ミガキ。剥落顕著。ロクロ左回転。
10	25・34	土師器	赤彩碗F	SK14・1+2+16+21+C区+C-3 SK14上面	残高3.75,底13.0	地元産	良	表:5YR6/6, 断:10YR8/4, 赤:2.5YR5/6-5/8	3/4	Ⅲ-IV1	ロクロ成形,ロクロ左回転。底部左方向へケズリ。内外赤彩,ミガキ。外底面右回転方向へケズリ。
11	26	土師器	赤彩碗F	SK14・4+B区+C-3 SK14上面	口17.0,高3.85,底11.8	地元産,良質	良	断:10YR8/1・8/2, 表:7.5YR8/6, 赤:2.5YR5/8-4/8	2/36	Ⅲ-IV 1	ロクロ成形。外面ケズリ。内外赤彩,ミガキ。ロクロ右回転。
12	30	須恵器	坏A	C-3 SK14上面	口14.0,高3.0,底11.7	南加賀産	不良	5Y8/1-7/1	6/36	Ⅲ	ロクロ右回転。ヘラ切り顕著。重焼Ⅲ類。
13	29	須恵器	坏B・身	C-3 SK14上面	残高1.3,台11.1,台高0.5	南加賀産	良	断:10GY7/1, 表:7.5Y6/1	8/36	IV2	ロクロ左回転。
14	9	須恵器	横甌	D-2+C-3 SK14上面	残高3.7	砂・白石粒多い	堅緻	内:54/1-5/1, 断:2.5Y6/1-5/1	閉1/4		内面:焼成後工具による刺突痕。シッタ痕。ロクロ回転右。
15	32	須恵器	鉢C	C-3 SK14上面	残高2.7	南加賀産	良好	表:5Y4/1-3/1, 断:2.5Y6/1, 内:2.5Y5/1	2/36	VI	ロクロ左回転。外面降灰,逆位焼。
16	35	土師器	赤彩碗F	C-3 SK14上面	口13.7,残高3.4	地元産,良質	良好	断:7.5YR8/4, 赤:2.5YR5/6-5/8	3/36	Ⅲ	内外赤彩,ミガキ。ロクロ左回転。
17	33	土師器	赤彩碗F	C-3 SK14上面	口16.8,残高5.0	地元産	良	内:10YR7/4, 断:10YR8/3, 赤:5Y5/6	1/36	IV	ロクロ左回転。外面のみ赤彩,底部ケズリ。
18	15	土師器	長胴釜	D-3・C-3 SK14上面	口18.0,頸16.0,残高2.75	在地産,白粒石,黒粒石	良	5YR6/6	3/36	Ⅲ-IV	頸部に後部ナデ。ロクロ左回転。
19	37	土師器	長胴釜	C-3 SK14上面	口18.6,残高2.4	地元産,焼土粒,砂多い	良好	7.5YR7/4-7/6	3/36	VI	ロクロ左回転。
20	36	土師器	浅鍋	C-3 SK14上面	残高3.45,口32~34	地元産	良好	7.5YR7/6	3/36	VI	ロクロ左回転。
21	5	須恵器	坏A・蓋	C-3グリッド	口14.9,残高1.9,返13,返高0.2	南加賀産	良好	7.5Y6/1	2/36	II 1-II 2	ロクロ右回転。
22	4	須恵器	坏B・蓋	C-3+D-3グリッド	口13.5,高2.5,鈕2.8,鈕高0.7	南加賀産	良好	10YR7/1-6/1	2/36	II 2	重焼Ⅰ類。内面指と工具でナデツケ。
23	2	須恵器	碗B	B-3グリッド南壁面	残高1.7,台6.2,台高0.6	南加賀産	不良	2.5Y8/1	10/36 (底1/3)	VI3-VI3	糸切り痕。
24	7	須恵器	双耳瓶(瓶D)	D-2グリッド	残高3.25,底7.2	南加賀産	堅緻	内:5 B5 Y, 外:N 6/	19/36	IV2~	糸切り痕。ロクロ右回転。
25	17	土師器	高坏H	D-3グリッド	残高5.2,脚3.5	在地産	良好	外:10YR7/4, 内:5YR6/6	脚36/36	I・II	中実。非ロクロ成形。脚部工具ナデ。
26	16	土師器	赤彩碗F	D-3グリッド	底7.0,残高2.1	在地産	良好	断:5YR6/6, 赤:2.5YR5/6	3/36	II 3-IV1	ロクロ成形。内外赤彩。内面ミガキ。
27	11	土師器	把手	D-2グリッド	最大5.75,最幅5.5,最厚3.3	在地産,白石粒,黒石粒	良好	外:7.5YR7/6, 断:10YR8/4			ロクロ成形の甌または鍋の把手
28	1	土師器	短胴釜	B-2グリッド	残高1.85	在地	良好	5YR6/6	2/36	I・II	非ロクロ成形。在地系。
29	10	土師器	短胴釜	D-2グリッド	口19.3,頸15.0,残高4.35	在地産,砂多量,焼土粒	良好	10YR8/4	2/36		非ロクロ成形。
30	3	土師器	長胴釜	C-2グリッド	口21.8,頸19.0,残高4.2	在地,焼土粒・砂多い	堅緻	表:7.5Y6/6, 断:7.5YR8/4	4/36	II-IV	ロクロ成形。
31	6	土師器	長胴釜	C-3グリッド	口18.2,頸16.0,残高3.55	在地,焼土粒・砂多い	良好	7.5YR8/6	3/36	Ⅲ-IV	ロクロ成形。
32	40	須恵器	坏A・蓋	P37	口14.0,残高1.05,返11.8,返高0.15	南加賀産	良好	5Y6/1	3/36	II 1-II 2	ロクロ右回転。重焼Ⅰ類。
33	38	須恵器	ⅢA	P15	口11.1,高1.6,底6.8	南加賀産	良	5Y4/1-3/1	7/36	VI 3	ロクロ右回転。重焼Ⅲ類。
34	39	土師器	小型鍋	P34	口14.7,残高4.1	地元産	良	表:10YR4/2, 断:7.5YR8/4	5/36	VI	ロクロ右回転。口縁端部・肩に煤付着。
35	12	石製品	砥石	D-2グリッド	最大6.1,最幅5.45,最厚4.55						凝灰岩。
36	18	土製品	羽口	D-3グリッド	最大5.25,最幅4.65,最厚2.1	焼土粒・砂多量	良好	外・断:2.5YR8/2, 内:7.5YR7/6	破片		羽口中央部分。
37	3	土製品	羽口	C-3 SK14上面	最大5.7,最幅3.05,最厚1.85			外:N7/2.5Y6/2, 内:2.5Y5/2・4/2.7.5Y6/8.10YR8/3	破片		端部,溶解部あり。
38	2	鉄関連	鍛冶滓	SK14・24	最大4.55,最幅3.9,最厚3.1						含鉄,亀裂あり。重量70.8g。
39	1	鉄関連	鍛冶滓	SK14A区	最大4.5,最幅3.45,最厚2.6						含鉄,亀裂あり。重量47.9g。
40	5	鉄関連	塊形鍛冶滓	C-3 SK14上面	最大7.95,最幅4.7,最厚3.7						重量129g。
41	4	鉄関連	鍛冶・炉壁	D-2	最大6.15,最幅4.4,最厚2.95						重量76g。

第Ⅳ章 薬師遺跡Ⅷ次発掘調査

第1節 調査に至る経緯

小松市矢崎町地内で計画された住宅新築工事に伴い、平成21年10月9日付けで山口善樹氏より埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（薬師遺跡）に含まれていたため、埋蔵文化財調査室は同日付けで試掘調査が必要との旨を回答し、10月16日に試掘調査を実施。対象地に設定した3か所の試掘坑すべてにおいて埋蔵文化財が確認され、工事実施にあたっては、事前に発掘調査を実施するなど、埋蔵文化財に対する適切な保護措置が必要との旨を10月19日付けで通知した。

住宅新築工事の計画では、基礎工事範囲に直径800mmのパイルが40か所設定されており、これが基礎工事範囲の18%を占めていた。よって、基礎工事範囲における埋蔵文化財の現状保存は不可能と判断され、その範囲112㎡を発掘調査することとなった。10月22日付けで事業主からの発掘調査依頼の提出、10月26日付けで協定書の締結を行い、11月5日、発掘調査の実施に至った。

なお、当調査の原因が個人住宅の建設であったため、国庫補助事業として発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

1. 調査方法

国土座標（世界測地系）に沿ってグリッドを5m間隔で設け、調査区を2区に分け重機による表土除去を行った。表土除去段階で竪穴建物を確認したため、人力掘削により遺構検出作業を行い、竪穴建物の土層は調査区壁面で確認した。その他の遺構は半裁またはアゼを設け土層確認した。遺構図面は、平面図・断面図を1/20または1/10で作成し、全体遺構図は1/40で作成した。写真記録は随時必要に応じて、モノクロ・カラー・リバーサル・ネガ・ポジフィルムとデジタルカメラを用いて撮った。残り区域を同様の方法で調査し、調査完了後、埋め戻しを重機で行った。

2. 発掘調査の経過

平成21年11月5日	発掘調査開始。重機による表土除去（残土置場の確保のため、南側3分の2を残し、北側3分の1を除去）
11月6日	基準点測量およびグリッド設定
11月9日	作業員による遺構検出・ピット半裁作業開始。 SD01検出・掘り下げ（11月10日完掘）。SI13確認。
11月10日	SB11確認。調査区北側3分の1完掘・写真撮影。
11月12日	調査区北側3分の1平面図作成。
11月16日	重機により調査区南側3分の2を表土除去。
11月19日	SI13全体検出。
11月20日	SI13床面の写真撮影・平面図作成。
11月23日	SI13掘方の掘り下げを開始。
11月25日	SI13掘方完掘。すべての遺構を完掘。全景写真撮影。
11月26日	調査区南側3分の2平面図作成。
12月1日	重機による埋め戻し作業。調査完了。



第30図 薬師遺跡Ⅷ次 位置図 (S=1/5000)

第3節 調査の概要

1. 現地調査の概要

調査地で検出されたものは、竪穴建物1軒 (SI13) と溝状遺構1条 (SD01)、掘立柱建物1棟 (SB12) である。いずれも、調査区外に延びる形で検出された。

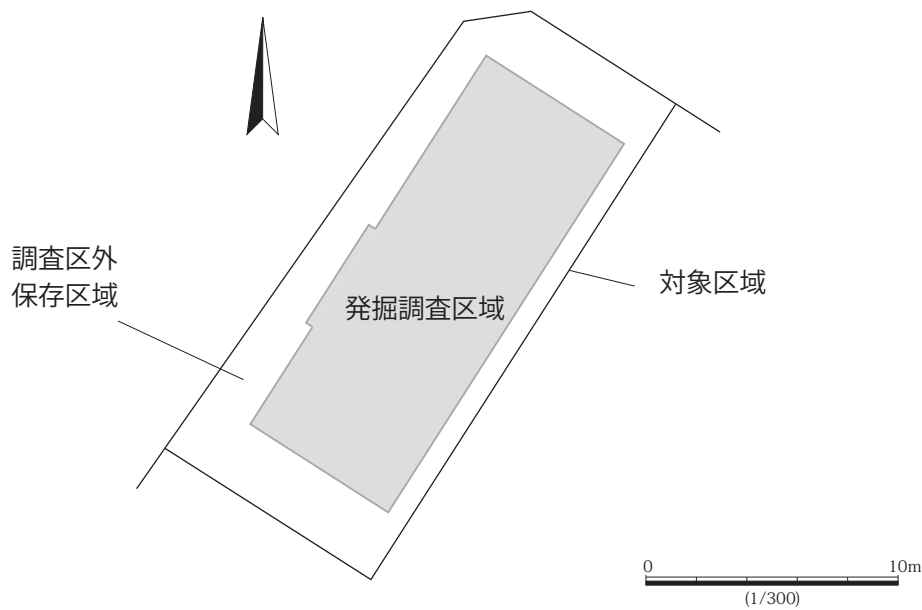
ここで竪穴建物の検出時について述べておく。現地の最上面地山は、黒褐色土であった。表土除去の際に、遺物の混入や遺構内部に認められる地山塊の夥しい混入などの痕跡に細心の注意を払いながら、重機による表土除去掘削を実施することは知られていることである。特に竪穴建物が埋蔵されている場合は、覆土内の土器混入やカマド崩壊土等の痕跡、または焼土などの生活痕跡が顕著な場合が多い。しかし、本調査では、重機による掘削時に、建物床面が検出されたことから、竪穴建物ということが初めてわかったという状況に至った。これは、遺構埋土内の生活痕跡が極めて乏しい状態であったと予想され、また地山が黒褐色土であったことから、判断が難しい状況だったと思われる。しかし、竪穴建物の土層断面が、東壁面にて観察できたため、埋土の状況は把握できている。また、カマドソデ崩壊の痕跡や基底部の検出はないものの、床下に残存する被熱痕跡が確認されている。

2. 遺構番号について (Ⅶ次・Ⅷ次)

第三章で述べた薬師遺跡Ⅶ次調査とあわせ、本報告Ⅷ次調査での遺構番号について述べておく。薬師遺跡では、小規模な調査が続いており、遺構数などを把握するために、県調査も含めて通し番号を付けている。



第31図 薬師遺跡Ⅷ次 全体遺構図・グリッド配置図(S=1/100)



第 32 図 薬師遺跡Ⅷ次 調査区位置図 (S=1/300)

第Ⅶ次では、掘立柱建物を SB11、土坑を SK14・15 とした。第Ⅷ次調査では、竪穴建物を SI13、掘立柱建物を SB12、溝状遺構を SD01 とした。

3. 出土品整理

出土品整理は平成 23 年度に実施した。出土品の洗浄・注記作業を整理作業員により行い、分類・接合作業、実測作業を整理作業員・調査員で実施した。その後トレース作業はデジタルで調査員・臨時職員が行った。

第 4 節 遺跡の概要・既往の調査

薬師遺跡の所在する今江町と矢崎町には丘があり、矢崎町では通称「タカヤマ」と呼称され、今江町ではその昔麓に薬師堂があったことから当遺跡名の由来となっている。この丘は、昭和 30 年代の国道 8 号線（現在、国道 305 号線）建設等により掘削されてしまい、現在では昔時の面影はなくなったが、木場瀧と白山を望む風光明媚な立地である。この国道沿いには、店舗が立ち並んだ。

平成 11 年の市道矢崎町 1 号線の道路改良工事、平成 14 年の市道矢崎 2 号線の道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、これを皮切りにインフラ整備と個人の宅地化が急速に進んだ。調査室（現センター）で、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の取り扱い協議に対応すべく、体制整備を整え始めたのが平成 15 年度のことである。個人住宅建設に対し実態を把握するため建築指導課での建築確認概要書を閲覧し、取り扱い協議に上がらない事例がかなり多いことを確認した。そして、協議に上がらない個人住宅建設に対し、連絡をとって交渉し、また周知徹底の活動に取り組んだ。現在でもこの活動は変わらず行われており、最近では協議にあがってくるようになっている。

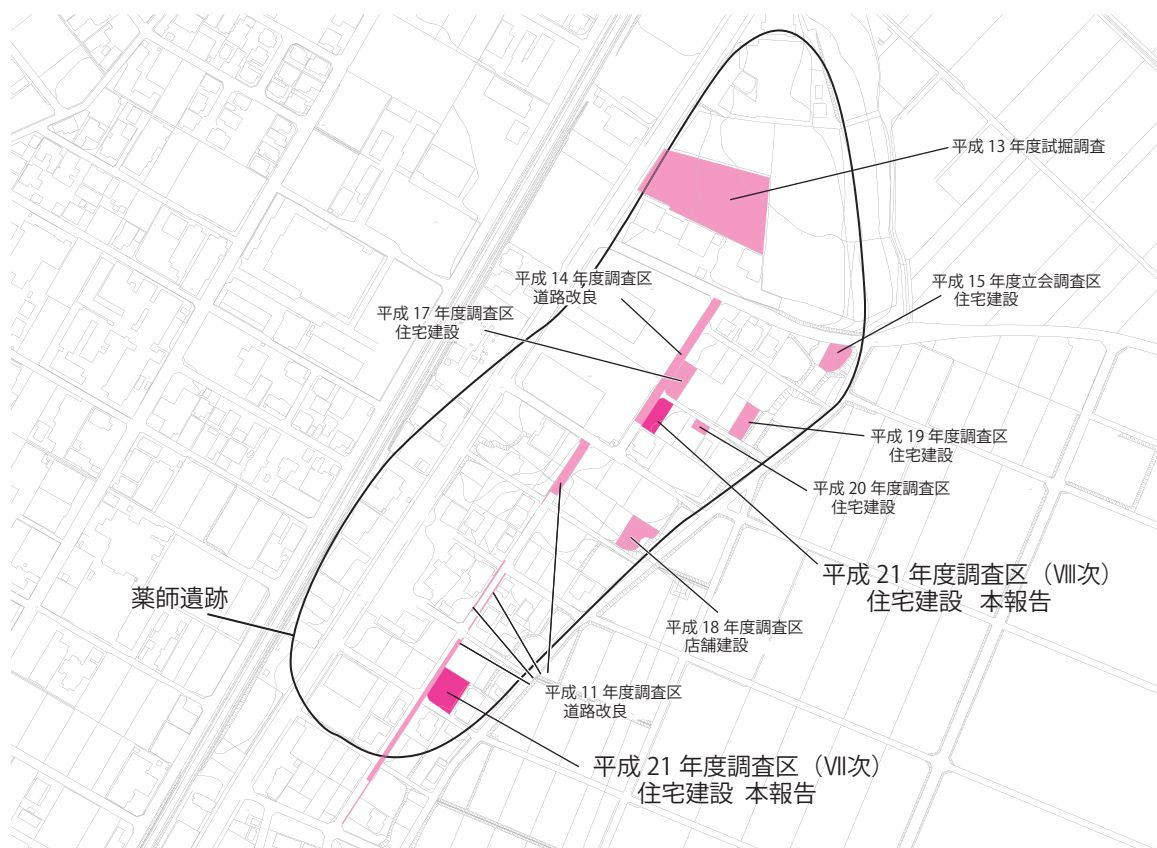
平成 15 年度、協議に上がってこないものが確認された。これは本遺跡で唯一の応急的な調査の例であるものの、建築確認の段階で察知すればやむを得ない措置である。しかし、掘立柱建物（SB05）1 棟と竪穴建物（SI06～SI08）等を検出した。

平成17年、初めて協議にあがった件で、正式な手続きのもとに個人住宅建設に伴う発掘調査が実施された(Ⅲ次調査)。この調査では、竪穴建物(SI09)、掘立柱建物(SB04)、土坑(SK04)が発見された。竪穴建物は、ほぼ一軒分がまるまる検出され、カマドは渡来系とされるオンドル状構造をもつオンドル型(L字型)カマドであった。当検出に至るまで、オンドル型カマドは月津(三湖)台地上の西側にあたる額見町遺跡や額見町西遺跡、南側にあたる矢田野遺跡で検出されていたため、この平成17年度の調査で、月津(三湖)台地の北東区域にも広がることが明らかとなったのである。

平成18年度には店舗建設に伴う発掘調査が実施された(Ⅳ次調査)。ここでは竪穴建物(SI10)、掘立柱建物(SB06・07・08)、土坑(SK05・06)が検出された。

その後、平成17年度調査地から僅かしか離れていない区域で、平成19年度、平成20年度に個人住宅に伴う発掘調査が実施された。平成19年度(第Ⅴ次)では、ここでもオンドル型カマド付設の竪穴建物がほぼ完全な形で1軒(SI11)が発見され、この他、コーナーカマド付設の竪穴建物(SI05・12)や掘立柱建物(SB09)、土坑(SK11・12)が検出された。一方、平成20年度調査(第Ⅵ次)では、建て替えの総柱建物2棟(SB10・11)が検出され、倉庫群が並ぶ可能性も出てきた。

これら一連の調査でこれまで判断できていることは、薬師遺跡は7世紀前から12世紀に至るまで営まれた集落ということである。ただし、12世紀の遺構は、低床の総柱建物1棟だけであるため、今のところ7～9世紀が主体的と言える。そして、7世紀前半のオンドル型カマドが付設する渡来系建物が2軒検出されていることや、鉄生産関連の遺物が出土することが特徴となっている。これは、額見町遺跡、額見町西遺跡、矢田野遺跡といった月津台地(三湖台地)の南西部に立地する遺跡と類似している様相であり、渡来系移民集落としての性格付けがされている。



第33図 薬師遺跡 既往の調査区(S=1/5000)

第5節 発見された遺構

1. 基本層序

現況面の標高は約 7.350 m で、現況面下で深さ 20 ～ 30cm の耕作土層、この直下に耕作土と黒褐色土の攪拌土や整地層、さらにその下に、黒褐色土が認められる。この黒褐色土と遺構土との明確な差はなく、覆土には少量の遺物が混入はするものの、この他の挟雑物が少ないため、非常に分層が難しい土である。現況面から深さ 30 ～ 40cm でこの黒褐色土地山に至り、深さ 55 ～ 65cm で明度の高い黒褐色土地山となる。Ⅶ次調査の基本層と極めてよく似る土層である。

2. 遺構

当調査区からは、竪穴建物 1 軒、掘立柱建物 1 棟、溝状遺構 1 基が検出された。狭小地であるため、すべての遺構が調査区外に延びる形である。

(1) 竪穴建物 S I 1 3

〈立地・規模・形態と状況〉 SI13 は、表除除去中に床面を確認したことから判明した建物である。建物全体の 1/2、床面の一部が残存する形で検出されており、被熱面からカマド位置が判断できるものである。竪穴規模は、残長径 774cm、土層断面で確認できた長径 800cm、残短径 400cm であり、深さは土層断面から確認して最大 30cm を測る。プランは隅丸方形、4 本主柱を有すものと考えられる。推定面積 64㎡、大型建物である。主軸は N-56° -W。

〈柱穴・建物理土〉 4 本主柱穴のうち、2 本が検出されている。柱の掘方形は 60cm ～ 100cm で、深さは P1 が 100cm、P2 が 95cm である。掲載している柱穴の土層断面図は掘削途中のものであり、埋土の様子のみを知ることができるものである。掘方断面図での“柱のあたり”から、柱径は 30cm 前後であった可能性がもたれる。また、掘方掘削時に、主柱穴規模に類似する P4 が検出され、同様に P3 も検出されている。P4 は径 65 ～ 95cm、深さ 95cm を測るもので、埋土が版築状となっており埋め戻され固められた印象のものである。この P4 は当初の主柱であり、これが埋め戻され、新たに P1 を構築して建物を拡張している可能性がある。なお、P2 と P4 の柱間寸法は 290cm である。

P3 は柱穴とは言えない規模のもので、深さ 36cm を測り、7 層の下底より上位 15 ～ 17cm 内でシジミ貝殻が集中して多量に検出されている。両掌で一杯程度の量である。

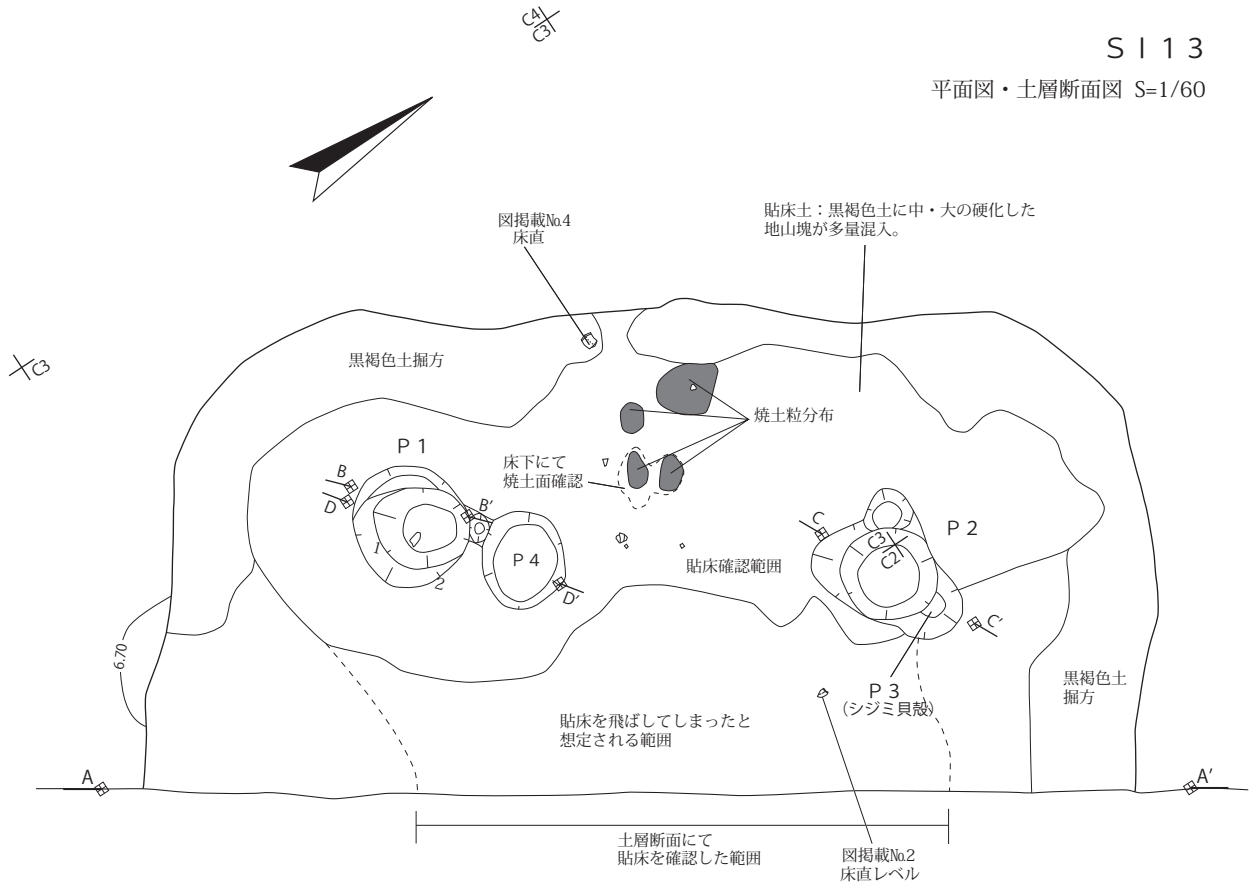
建物理土は、少々遺物が混入するものの違いは明度の差のみ、地山土とあまり変わらないもので、分層自体も非常に難しいものだったと思われる。埋土内でも分層が認められず、廃絶時の埋め戻しが行われたのか、自然埋土なのかも不明である。

〈床の状況・カマド・掘方〉 検出できた床は、柱穴周辺の長径 670cm × 210cm の範囲である。床は黒褐色土主体で、所々に硬化する地山塊が混入するものであり、所々で赤褐色の焼土粒も分布する状況である。貼床の厚さは 2 ～ 10cm、床面は平らではなく、凸凹を呈しており、北東床と南西床で 6cm の差をもつ。土層断面から確認して、床レベルは標高 6.82 ～ 6.75 m であったものと考えている。

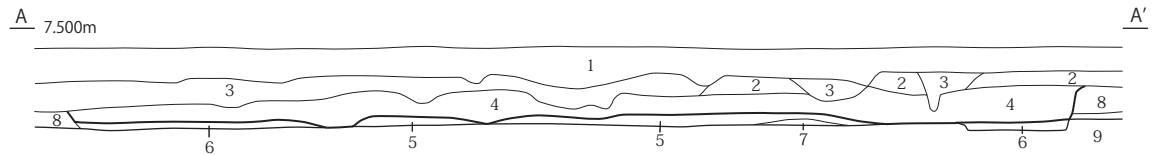
床面レベルで焼土分布を確認している。ただし、硬化するような被熱ではなく、床土が黒褐色土であるためこのような状態になった可能性をもつ。こういった焼土が 4 カ所検出されており、掘方で確認したところ地山被熱を検出している。壁ラインから建物内方向へ 110 ～ 120cm 位置で、長径 52cm、短径 48cm を測るものである。おそらく焚口被熱にあたるものとみているが、調査時にソデ構築土や崩壊土が認められなかったため、調査担当者もカマドではなく炉の可能性を考えたようである。

S I 13

平面図・土層断面図 S=1/60



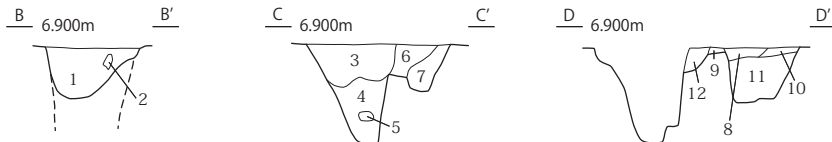
調査区南東壁面土層 (SI13 埋土) S=1/60



調査区南東壁面土層註

- 1層 暗褐色 (7.5Y3/3) 粘質土。縮まり弱い、砂気やや多く含有。耕作土。
- 2層 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。縮まり強。整地層か？
- 3層 2層黒褐色土に黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土 (4層?) がやや多く混在。やや砂気あり、縮まりは2層に比べやや弱い。比較的縮まり強。
- 4層 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土。少しだが土器細片あり。SI13 覆土層。
- 5層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。硬化した赤地山土の大塊多量混在。SI13 貼床。
- 6層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。SI13 の黒褐色掘方。
- 7層 黒褐色 (5YR2/2) 粘質土に、5層の黒褐色土が少量混在。地山漸移層。
- 8層 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土。4層のSI13 覆土に比べやや明度あり。地山土。
- 9層 7層に8層が少量混在。地山土。

SI13 柱穴土層 S=1/60

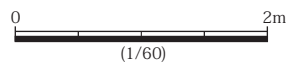


P1・P2・P3 土層註

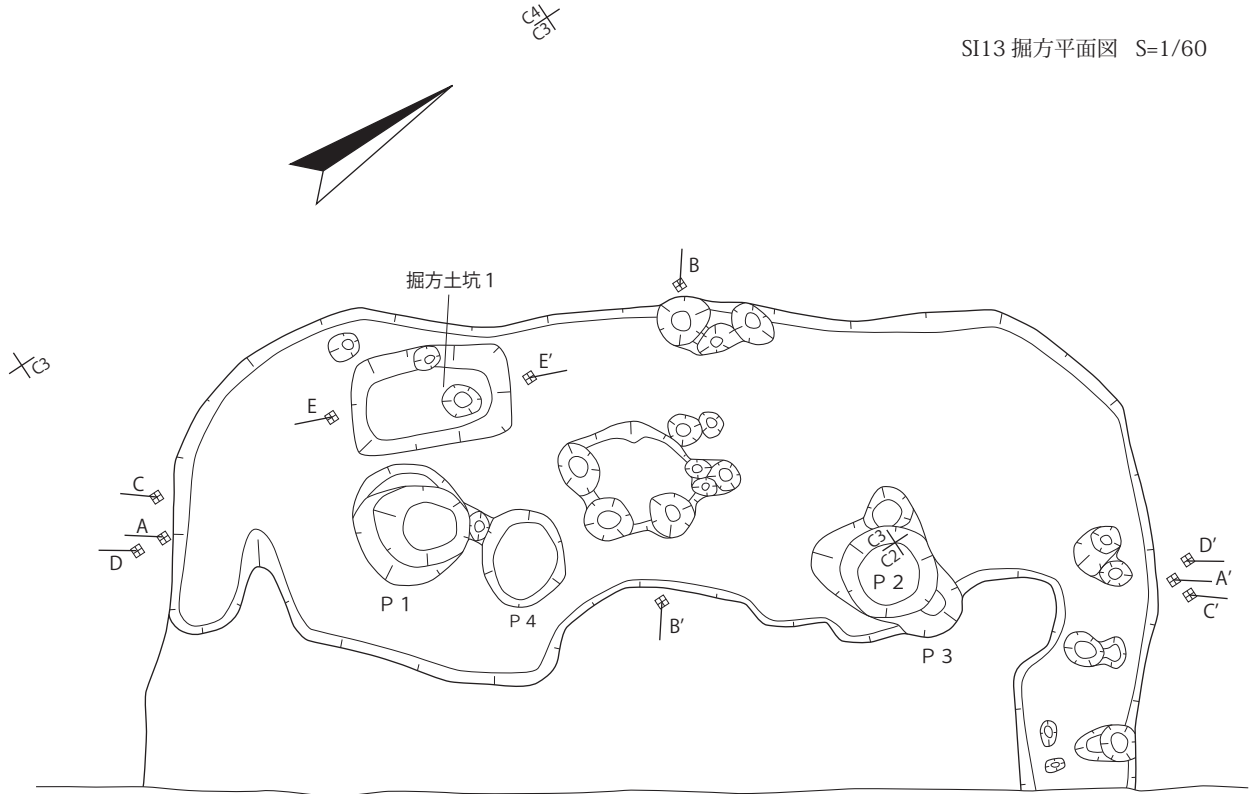
- 1層 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土。地山大塊を少量含有。
- 2層 地山塊。
- 3層 1層黒色土と同質で地山大塊多量含有。
- 4層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土に、地山大塊やや多目含有。
- 5層 縮まりの強い地山塊。
- 6層 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土。別ビット土層。
- 7層 黒色 (7.5YR1.7/1) 粘質土。地山中塊少量含有。別ビット土層。
7層の下半部にシジミ貝殻を極多量検出。

P4 土層註

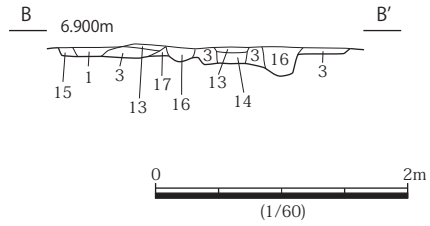
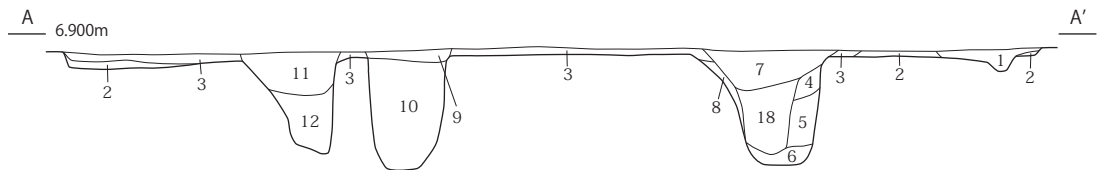
- 8層 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。
- 9層 1層黒褐色土に地山塊少量含有。
- 10層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。1層より明度やや強。
- 11層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。縮まりの強い地山大塊含有。
黒褐色土と地山塊が交互に版築状に重なる。
- 12層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。P1 掘り不足土か？



第34図 薬師遺跡Ⅷ次 SI13 遺構図① (S=1/60)



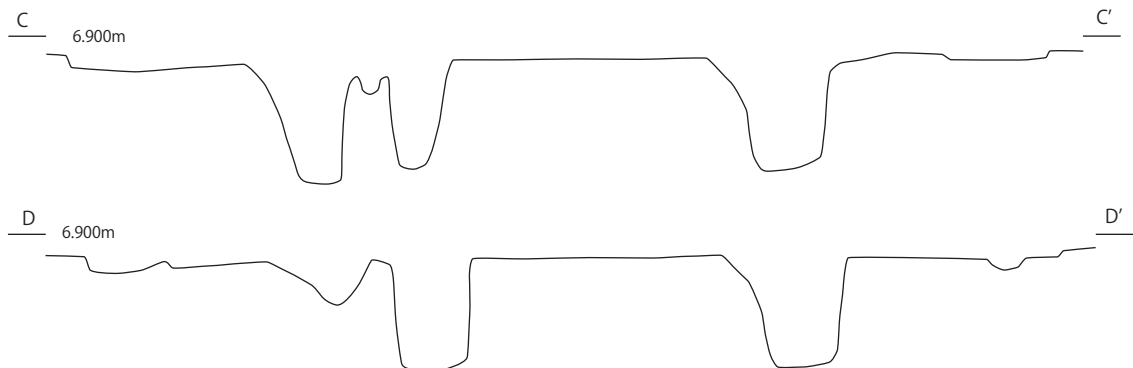
SI13 掘方土層断面図 S=1/60



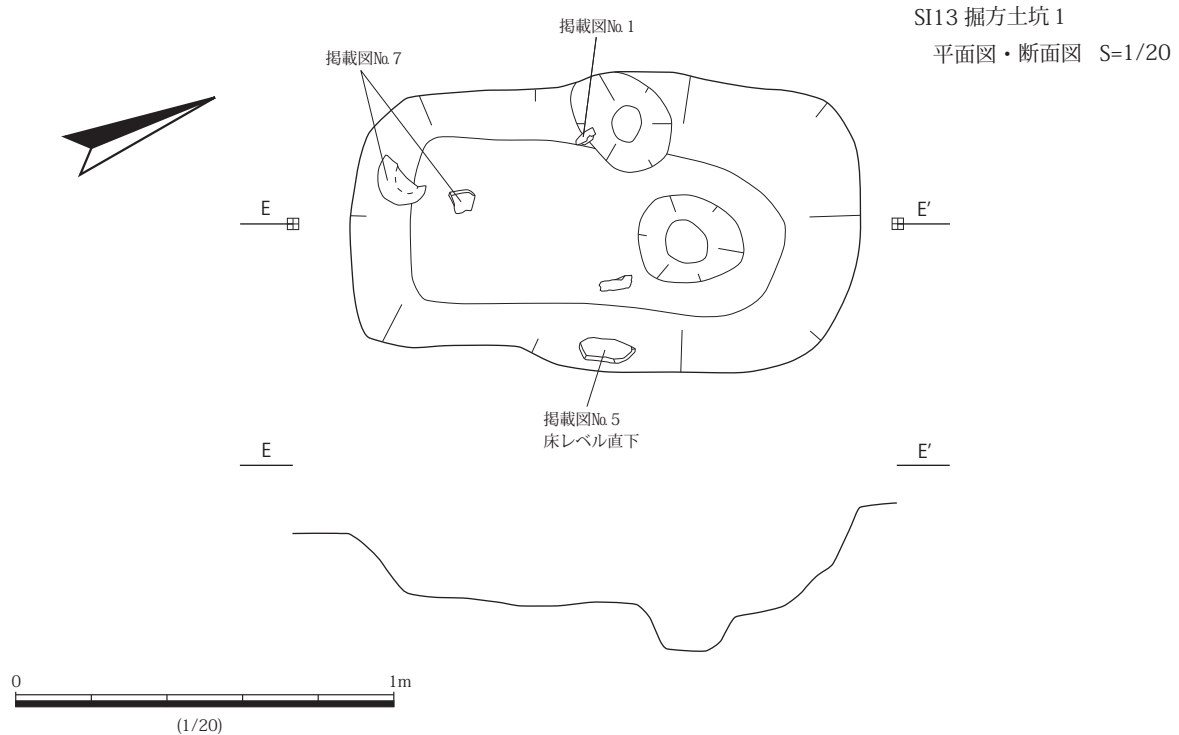
SI13 掘方・柱穴掘方土層註

- 1層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。地山中・大塊少量含有。
- 2層 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土に1層黒褐色土少量含有。地山漸移層。
- 3層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。硬化した地山大塊多量含有。貼床土。
- 4層 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。硬化した地山大塊多量含有。
- 5層 地山土に4層黒褐色土がやや多目含有。
- 6層 4層黒褐色土に硬化した地山塊や多く含有。4層よりも地山塊の割合が少ない。
- 7層 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土。地山中・大塊やや多目含有。(P2・3層と同層)
- 8層 地山土に4層黒褐色土少量含有。地山漸移層。
- 9層 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。
- 10層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土に、締まり強い地山大塊が多量含有。黒褐色土に地山塊が版築状に構成。
- 11層 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土。地山中・大塊少量含有。
- 12層 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土。地山大塊多量含有。
- 13層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。赤褐色 (5YR4/8) 焼土大塊が多量含有。
- 14層 赤褐色 (5YR4/8) 焼土。
- 15層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。地山中・大塊を極多量含有。
- 16層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。1層や3層の黒褐色土よりも暗度強め。地山中・大塊少量含有。
- 17層 地山土に3層黒褐色土やや多目混在。地山漸移層。
- 18層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土に、地山大塊やや多目含有。(P2・4層と同層)

SI13 掘方断面図 S=1/60



第 35 図 薬師遺跡Ⅷ次 SI13 遺構図② (S=1/60)



第36図 薬師遺跡Ⅷ次 SI13 遺構図③ (S=1/60)

掘方についてだが、建物掘方土は殆どない状態で、建物構築時の掘削後に床面を整えるため土を入れた印象である。よって貼床を剥がすと地山が露出する。

〈掘方土坑〉 掘方土坑1が検出されている。規模は長径135cm×短径80cmの隅丸形状を呈したプランで、深さは貼床レベルから30～40cmを測る。掘方土坑の覆土は、黒褐色土(7.5YR2/2)粘質土で、5mm～1cm(中～大)程度の地山ブロック(塊)と炭化塊が少量混在するものである。

〈遺物と時期〉 出土遺物は非常に少ないものの、床レベルで数点の遺物が張り付いて検出されたものと、掘方土坑1から出土する遺物で時期を判断することができよう。掘方土坑からは、TK10～TK43 併行の坏Hや、TK10～TK209 併行の塊H、TK43～TK209 併行の塊Hが出土している。また、床面に張り付いて検出された内黒塊HもTK10～TK209 併行と思われる。よって、6世紀中頃～後半段階で当建物が構築されている可能性が高い。一方で、田嶋編年I期相当の甕口頸部が貼床レベルで出土していることから、この時期まで当建物は使用されていた可能性がある。よって、薬師遺跡の中で、最も古い段階に構築された建物となる。

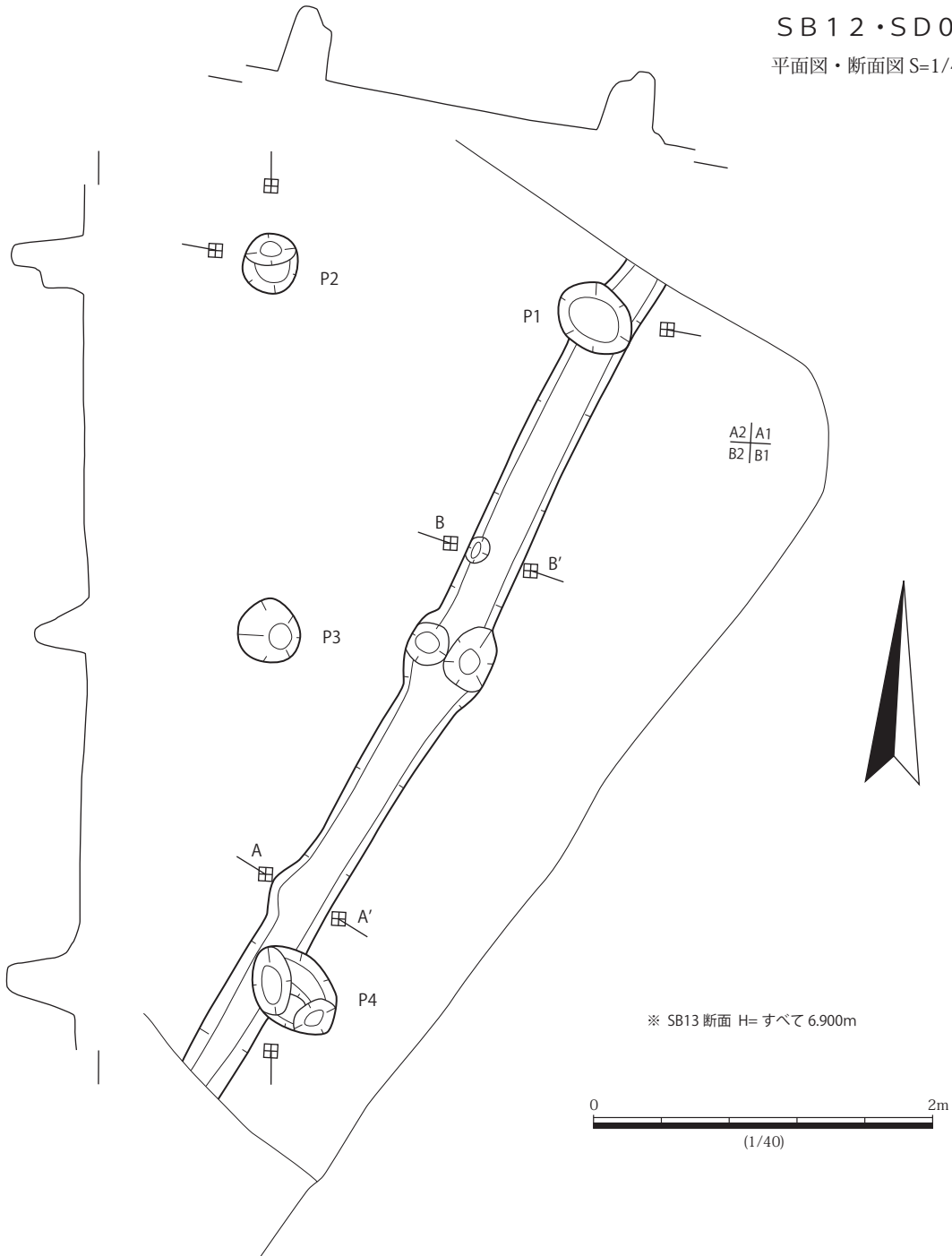
(2) 掘立柱建物 SB12

調査区の北東端で、残存桁行2間(残存4.25m)×残存梁行1間(残存1.86m)の側柱建物である。柱間寸法は、桁間205～220cm、桁間186cmを測る。残存面積7.9㎡。本来の建物を推定すれば、規模は、推定3間×2間で24㎡、推定4間×3間で47.43㎡となる。建物主軸はN-3°-W。

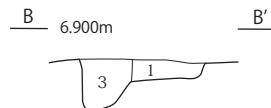
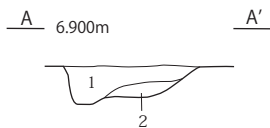
柱穴は円形プランで、掘方断面形状に段掘りやスロープを呈する。径は36～60cm、深さは30～44cmを測るものの40cmを主体にもつ。“柱のあたり”を確認でき、これが12～14cmを測るため、柱は細いものと判断できよう。埋土層はP4のみで確認されており、黒褐色(10YR3/2)粘質土を主

SB12・SD01

平面図・断面図 S=1/40



SD01 土層断面図 S=1/20



SD01 覆土土層註

- 1層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。
- 2層 1層黒褐色土に地山塊や多目混在。
- 3層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土。地山土や多目混在。他ビット覆土？



第 37 図 薬師遺跡Ⅷ次 SB12・SD01 遺構図 (上段 S=1/40・下段 S=1/20)

体としたものである。柱筋の通りだが、桁行は良好であるものの、梁行は悪い。P1が揃わないため、隅が直角とならない不整形の建物平面プランを呈していた可能性がある。出土遺物がないため時期を特定することが難しいが、柱穴規模や形状の傾向から判断すれば、田嶋編年Ⅳ期相当もしくは柱間寸法が広いことと柱穴の細さから古代末の可能性も考えられる。

(3) 溝状遺構 SD01

SD01は、SB12に切られるものである。残存長径542cm、幅は28～50cmだが主体を32cmにもち、深さ5～10cmを測る。出土遺物は4点のみ、甕破片や坏A底部破片などが出土するが、時期を特定することが困難なものである。

第6節 出土遺物

出土遺物は、須恵器、土師器が出土しているが少なく、遺物箱（内法645cm×380cm×145cm）に1箱である。全体の3/4がSI13からの出土であり、残りがSD01とグリッド扱いのものである。特にSD01からの出土は、4点のみで古代のものということは言えるものの、時期を特定することはできない。また、出土遺物は碎片が多く、実測可能であった遺物を次に掲載するが、SI13・P3より出土した貝については実測に至っていない。この貝はシジミで、白色を呈し、全重量は127.42gであった。

1. 竪穴建物SI13出土遺物

1は、坏Hの身である。受け部高が比較的高く、やや内径して立ち上がり端部に面をもつものである。外面底部にケズリを施し、これらの特徴からTK10～TK43併行のものと判断することができる。

2は、内黒の埴Hである。非ロクロにて口縁端部を外反させ成形しているもので、内面の黒色が外面端部1cm程度にわたりはみ出してうっすらと色づく状態となっている。内面に丁寧なミガキが施されている。TK10～TK209段階で検出されている器種と同様のものと思われる。

3・4は埴Hで、両者とも非ロクロ成形品である。3は、体部が埴形で、口縁端部のみが小さく外反するもので、内面に丁寧なミガキが施されており、外面の胴部から底部にかけケズリがみられる。

4は体部が埴形でそのまま上部に向かい内湾せず端部に至り、底部のみ手持ちケズリ調整が認められるものである。粘土紐痕がうっすらと残り、内面ではミガキはないものの、非常に綺麗に撫でつけて仕上げられている。両者の時期だが、TK43～TK209相当になるものと考えられる。

5は短胴釜の底部である。非ロクロ成形で外面にはケズリ後ハケ調整、内面はケズリがそのまま残る。典型的な在来系の釜である。

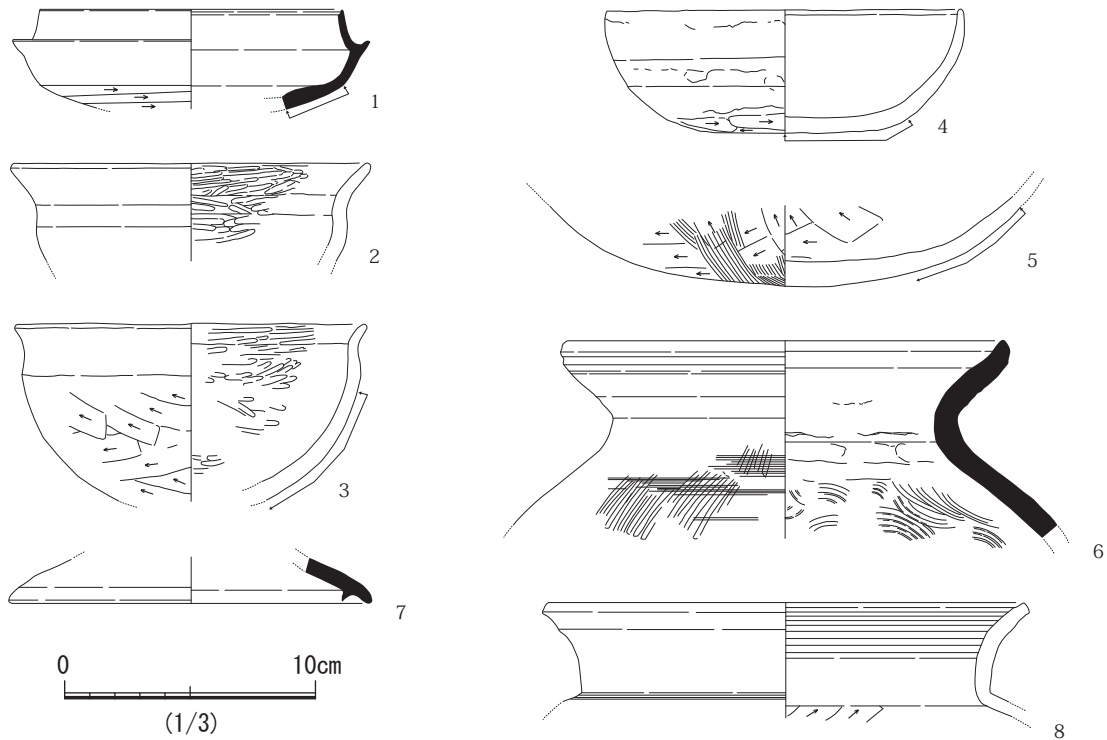
6は須恵器の小甕で半生焼成品であるためか、表面が摩耗している。頸部の内面に粘土紐痕とその下位に指ナデが認められる。口縁端部が内湾する田嶋編年Ⅰ期の特徴をもつものである。

2. グリッド出土遺物

グリッドから出土する遺物は前述したとおり少ないが、SI13でのまとまった時期以外のものをあえて選んで実測している。

7は、口径が大きく、端部に返りの伴う坏Aの蓋と判断されるものである。

8は、甕の口頸部で、ロクロ成形品。口縁内外にカキメ調整があり、内部の頸部付近にケズリが認められるものである。端部が平坦となっているため、時期はⅢ～Ⅳ期になるものと思われる。



第 38 図 薬師遺跡Ⅷ次 SI13・グリッド出土遺物 (S=1/3)

第 7 節 小結

今回の調査で発見された遺構は、Ⅷ次調査で、8世紀中頃～後半のものとなる可能性の高い掘立柱建物と土坑 2 基である。Ⅷ次調査では、6世紀中頃～後半に構築され、古代Ⅰ期・7世紀前半まで使用された可能性の高い竪穴建物 1 軒、時期不明の溝状遺構 1 条、そして古代末となる可能性もある掘立柱建物 1 棟であった。

近年の連続した薬師遺跡の調査では、少しずつだが全体の様相が窺えるようになってきている。これまで、オンドル型カマド付設竪穴住居の検出と 7 世紀から 12 世紀に至る建物や土坑の検出、倉庫群の示唆、石帯（丸軋）出土、鉄関連遺物（鉄製品、精錬・鍛錬鍛冶滓、羽口、砥石、流動滓などの製鉄滓）の出土があり、調査を重ねる毎に、月津（三湖）台地南西部に所在する額見町遺跡に次第に類似する様相をもつことがわかってきている。

視点を月津（三湖）台地全体に広げてみると、オンドル型カマド付設の竪穴建物が、額見町遺跡をはじめ額見町西遺跡や矢田野遺跡、そして本遺跡から発見されており、台地上の西部や南部だけで検出されてきたものが東部でといった具合に、台地全体へ広がりを見せている。

月津（三湖）台地の古代集落遺跡では、島遺跡での多量の鞆羽口廃棄をはじめ、多くの遺跡で鉄生産関連遺物が検出されており、特に鉄滓は何処の遺跡からも出土している状況である。そして、製陶関連の道具なども出土している。月津（三湖）台地对岸には南加賀窯跡群と南加賀製鉄遺跡群が存在し、一大手工業生産地域として知られている。オンドル型カマドの検出は朝鮮系渡来人と結びつくものだが、これまで、このカマドが出現するのは 7 世紀初頭であり、この時期は須恵器窯への新技術導入と同時に製鉄が開始される段階でもある。よって技術伝達のための渡来人が関与したものとされてきた。

こういった月津（三湖）台地の集落遺跡群と対岸の製陶・製鉄遺跡群との関係を明らかにする研究が望月精司氏によってなされている。在来型煮炊具と朝鮮系・近江系・丹波系の移民型煮炊具の存在を明確化した上で、進的技術を保有する移民集団を計画的に配し、月津（三湖）台地の集落と対岸の手工業生産地帯が一体的に経営されたとするもの（望月 2007）。これを三湖台古代集落遺跡群の成立期として6世紀末から7世紀初頭に位置付ける一方、昨年度報告された矢崎宮の下遺跡では新たな事実も浮上した。矢崎宮の下遺跡の調査では、検出した竪穴建物 SI02 が6世紀前半ないし5世紀末に遡る建物と判明し、このカマドがオンドル型である可能性が高く、しかも建物から鍛冶炉壁をはじめとする鉄生産関連遺物の出土を伴うという結果となったのである。この検出により、南加賀窯跡群成立における朝鮮系移民の介入や三湖台古墳群における横穴式木室の理解へと評価が変更されつつある（望月 2011）。ちなみに、この矢崎宮の下遺跡は、薬師遺跡の南端から南へ100m程度離れただけの場所に位置、極めて近接する遺跡である。

今回の薬師遺跡Ⅶ次・Ⅷ次調査では、こういったこれまでの月津（三湖）台地集落遺跡群の評価からみれば、多大な変化があったわけではない。しかし、Ⅷ次調査で検出された竪穴建物 SI13 が6世紀中頃に成立していた可能性が高く、カマドが崩壊していたため確実性に欠けるものの、額見町遺跡の事例をみると、通常の本型カマドの場合、奥壁までの距離は50cm～70cm前後が主体だが、オンドル型カマドの場合は奥壁まで120cm～150cmと、通常のカマドよりもかなりの規模をもつ傾向がみえるため、これと比較すれば、SI13 もオンドル型であった可能性が高いのである。

薬師遺跡も、矢崎宮の下遺跡と同様に、月津（三湖）台地の古代集落遺跡の成立期とされる7世紀初頭より以前に集落が存在していた可能性が高いものと考えられる。よって、当遺跡は、冒頭で述べたように額見町遺跡と似た様相をもちつつも、集落の成立時期には違いが認められるのである。

さて、額見町遺跡で検出されているもので、薬師遺跡で検出や出土がされていないものといえば、土師器焼成坑、須恵器窯道具、鍛冶炉、円面硯や墨書土器などの文字関連遺物、権状錘や陶馬・土馬などの律令祭祀具などがある。調査面積に大差があるため当然のことではあるが、今後の調査でこういった遺構や遺物が検出される可能性も高くなってゆくのではないかと思われる。今後、薬師遺跡という集落の全体像、そして月津（三湖）台地の集落遺跡群の評価がどのように変わってゆくのか期待し、本調査の結果を次へと繋げられれば幸いと考えるのである。

引用参考文献

- 横田洋三 1994 「木瓜原遺跡の発掘」『古代の製鉄コンビナート』立命館大学
 川畑謙二 1998 『島遺跡』小松市教育委員会
 望月精司 2007 「総括～三湖台地集落群の古代前半期土器様相～」『額見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会
 宮田 明 2007 「薬師遺跡」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』小松市教育委員会
 望月精司 2007 「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落—移民系煮炊具と竪穴建物構造、集落経営の視点から—」『日本考古学』第23号日本考古学協会
 坂下義視 2008 「薬師遺跡」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』小松市教育委員会
 望月精司 2009 「手取扇状地における飛鳥時代の移民集落」『ふるさと歴史シンポジウム いまよみがえる末松廃寺』野々市町教育委員会
 望月精司 2010 「総括—三湖台地集落遺跡群の古代後半期土器様相—」『額見町遺跡Ⅴ』小松市教育委員会
 望月精司 2011 「矢崎宮の下遺跡 総括」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』小松市教育委員会
 望月精司 2011 「総括～三湖台地古代集落遺跡群と丘陵部製鉄・製陶遺跡群の動向」『額見町遺跡Ⅵ』
 大橋由美子 2011 「薬師遺跡Ⅴ次・Ⅵ次」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』小松市教育委員会

薬師遺跡Ⅷ次 出土遺物観察表

掲載No.	実測No.	種別	器種名	出土地点	法量	胎土	焼成	色調	残存	時期	備考
1	8	須恵器	坏H	SI13掘方土坑1・5+掘方土坑1	口12.0,残高3.9,受14.0,受高1.4	在地,白小石粒多い,良質	堅緻	2.5Y7/1-6/1	4/36	TK10-TK43	重焼I類。正位焼。ロクロ左回転。
2	5	土師器	内黒碗H	SI13床直6	口14.0,残高3.85	在地,焼土粒	良好	黒:7.5Y2/1,外:2.5Y4/1-3/1,断:2.5Y5/1	5/36	TK10-TK209	内面のみ内黒。
3	6	土師器	碗H	SI13掘方土坑1	口13.8,残高7.0	在地,砂多い	良好	内:5YR4/6・2.5Y3/2,外:5YR6/6-6/8	4/36(体1/4)	TK43-TK209	
4	7	土師器	碗H	SI13掘方土坑1・1+2+掘方土坑1	口14.0,高4.9,底7.6	在地,砂・焼土粒多い	良	断:10YR4/6,外:10YR8/4・5YR7/6・10YR4/1	略完	TK43-TK209	内面ナデ
5	9	土師器	短胴釜	SI13掘方土坑1・4+SI13P1	底8.4,残高3.2	在地,砂多い	良好	表:2.5YR7/6・7.5YR6/4,内:10YR5/3,断:10YR4/1	底完		外面:ケズリ→ハケ
6	4	須恵器	小甕	SI13・床直1+上面	口17.2,頸13.6,残高7.3	白小石・砂多量	不良	7.5Y7/1	1/4	~I	外面:タタキ→カキメ,内面当て具,頸部ナデ。ロクロ右回転。当て具Da類。
7	2	須恵器	坏A・蓋	C-3グリッド	口14.3,残高1.7	南加賀産	良好	2.5Y7/1-6/1	4/36	II 1~II 2	重焼I類。ロクロ右回転。
8	3	土師器	長胴甕	C-3グリッド SI13上面	口18.8,頸16.2,残高3.9	南加賀産,焼土粒・白砂多い	堅緻	表:7.5YR6/6,断:10YR8/4	3/36	III-IV	

グミノキバラ窯跡・薬師遺跡Ⅶ・Ⅷ次 凡例

遺構図について

・遺構名称は、竪穴建物をSI、掘立柱建物をSB、土坑(焼土坑も含め)をSK、ピットをPとした。

遺物図に関して

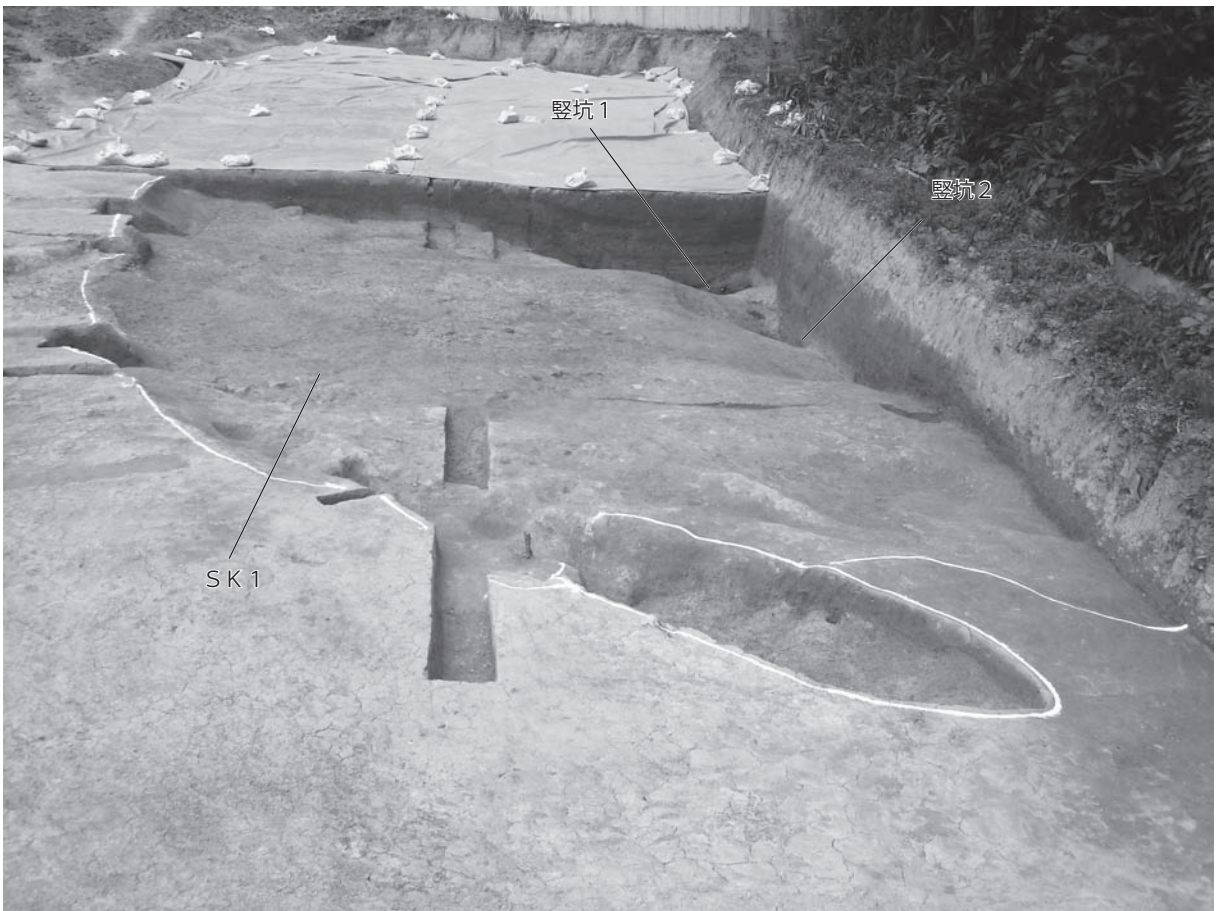
・本書で示した土器編年並びに暦年代観について基準としたものは、古墳時代は、田嶋明人氏が1988年に『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター発行にて提示した「漆町遺跡の編年的考察」と、田辺編年(1981『須恵器大成』)に準じている。古代については、1988年北陸古代土器研究会シンポジウムの際の田嶋明人氏の古代土器編年軸を基本として、1997年北陸古代土器研究会10・11世紀シンポジウムの際の田嶋明人氏の南加賀編年修正を加えたもの(=田嶋編年)に準じた。
 ・出土遺物図版中で示す右側断面に書き込んである「↑」は、ヘラケズリの範囲を、左表面並びに展開図中の「→」はケズリの方向を示す。
 ・出土遺物図版中の右断面の中の破線は、粘土紐接着痕を示す。
 ・土師器で、濃い網点は黒色を示す。薄い網点は赤色を示す。
 ・土層註については、土色名、土色記号は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づいている。

遺物観察表に関して

・焼成、焼き色(色調)で示す用語は、須恵器での「堅緻」が良好以上の強い堅緻な焼きのもの、「良好」が堅緻よりも焼き締まりの弱いもの、「良」が焼き締まりの弱いもの、「不良」は白い還元状態のものや焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。
 ・遺物の色調については、須恵器ならば降灰部分や釉付着部分を除いた色調であり、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じている。「外」は外面色調、「内」は内面色調、「断」は断面色調を示し、「表」は内外面の表面色調を示し、これらの表示のないものは内外表面、断面ともに単色を示す。
 ・法量で示した、口=口径、底=底径、台=台径、台高=高台高、つまみ径=蓋つまみ径、つまみ高=蓋つまみ高さ、基=基部径、坏高=高坏坏部高、高=器高、残高=残存器高、返=口縁端部返し径、返高=口縁端部返し高、受=受け部径、受高=受け部高、頸=頸部径、頸高=口頸部高、胴=胴部最大径、長=長軸長、巾=最大径、厚=平均厚、最厚=最大厚、孔=孔径を示し、「残」は残存部分での法量を示す。単位はcmである。
 ・完存は、無記であれば全体での完存割合、口、胴、底、坏、脚の表示があれば、その部位のみ完存割合を示す。
 ・胎土で示す用語は、須恵器の南加賀窯産は、戸津オオダニ地区で通常見られる素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土で、「砂多」が、通常の胎土よりも砂の混入が多いもの、「砂少」が砂粒の混入が少ない良質の土を示す。
 ・備考中の重焼痕の分類は、北野博司氏の分類(「重焼の観察」『辰口西部遺跡群I』(財)石川県埋蔵文化財センター1988年)に基づき、I類は、蓋身正位に合わせたものを1単位として2段程度に重ねたもの。II a類は、蓋を逆位にして身を重ねたものを1単位として柱状に重ねたもの、II b類は、蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として交互に蓋口同士が合わさるように柱状に重ねたものを示す。
 ・貯蔵具の胴部成形・調整で示すタタキ及び当て具の分類については、花塚信雄氏の分類(「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会1984年)に基づいており、「Ha類」が木目直行の平行文、「Hb類」が木目左下がりの平行線文、「Hc類」が木目右下がりの平行線文、「He類」は木目の見えない平行線文、「Da類」が木目の見えない同心円文、「Db類」は木目が年輪状に入る同心円文、「Dc類」は柁目状木目が入る同心円文、「SD類」は年輪木目のみが見える細かな同心円文(木製無文)で示してある。



平成20年度 調査区 完掘全景 (南西より撮影)



SK 1 完掘全景 (平成20年度)



平成21年度調査区 完掘全景1 (東より撮影)



平成21年度調査区 完掘全景2 (東より撮影)



平成21年度 SK1 完掘全景（北より撮影）



SK1 土層断面Aライン（C・D間）



主要遺構土層断面Eライン1



主要遺構土層断面Eライン2



主要遺構土層断面Eライン3



主要遺構土層断面Eライン4



主要遺構土層断面Eライン5（竪坑1土層）



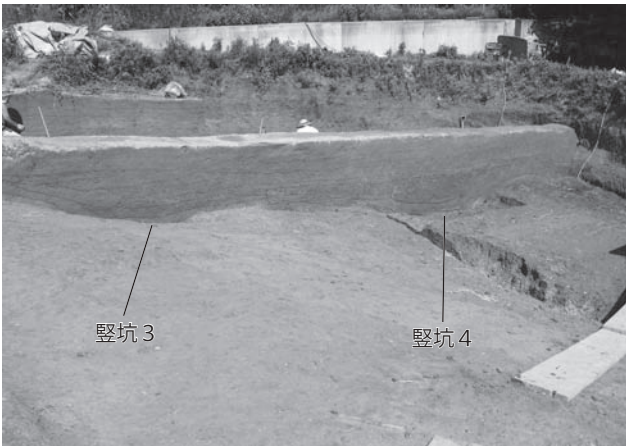
主要遺構土層断面Gライン1（竪坑5）



主要遺構土層断面Gライン2



主要遺構土層断面Fライン1



主要遺構土層断面Fライン2



竪坑1 掘削状況



竪坑1完掘 (平成20年度)



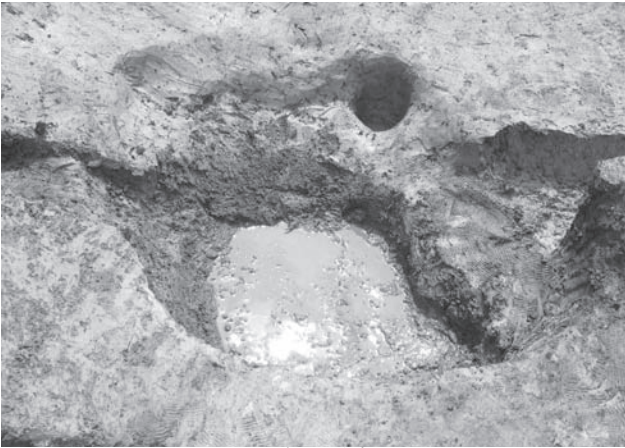
竪坑1完掘 (平成21年度)



竪坑2 土層断面



竪坑3 土層断面



竪坑4 完掘



竪坑4 土坑断面



竪坑5 完掘



竪坑6 土層断面



竪坑7 土層断面 (Hライン)



竪坑7 掘削状況



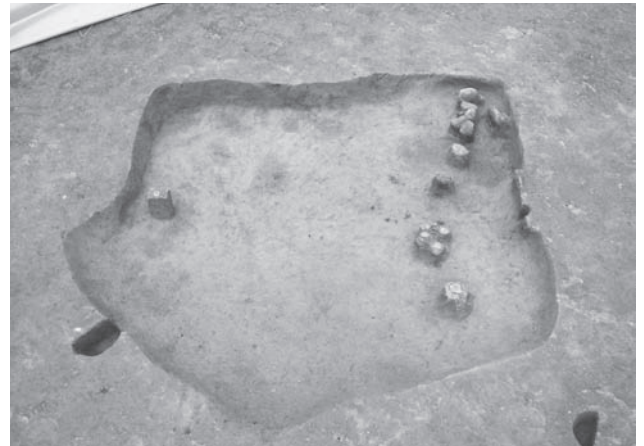
道路状遺構 (波板状凸凹面) 完掘



道路状遺構（波板状凸凹面）完掘（北より撮影）



道路状遺構（波板状凸凹面）（南より撮影）



SK 2 完掘



SK 2 土層断面 Bライン



SK 2 遺物出土状況と被熱状況



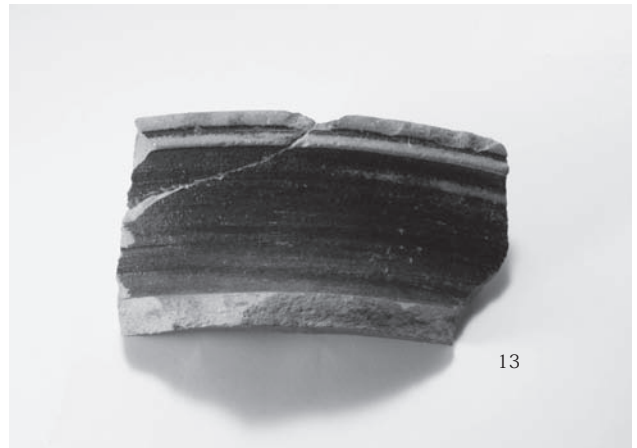
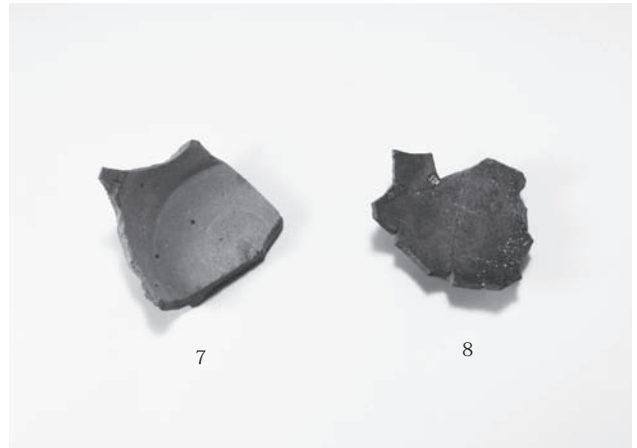
1

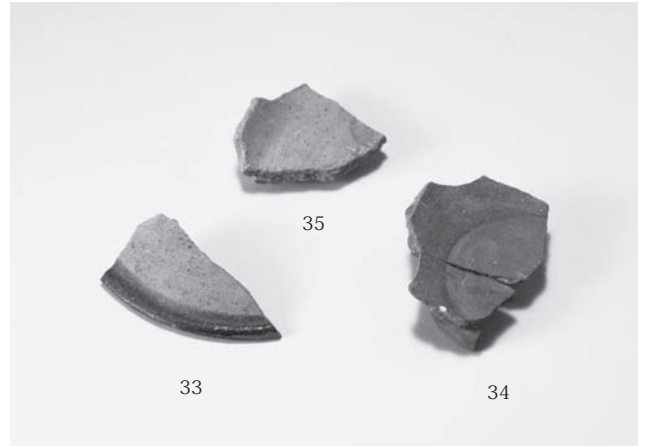
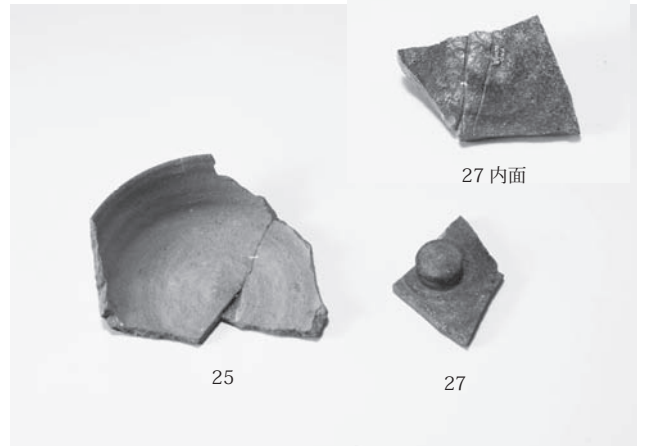
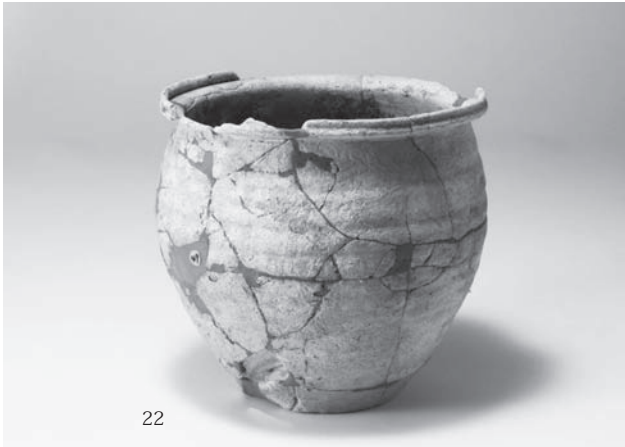
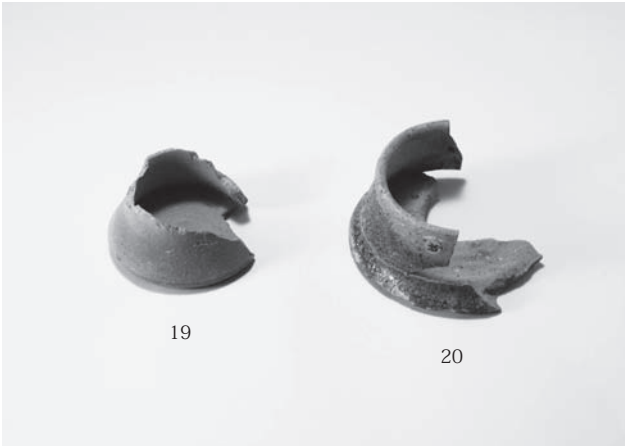
2

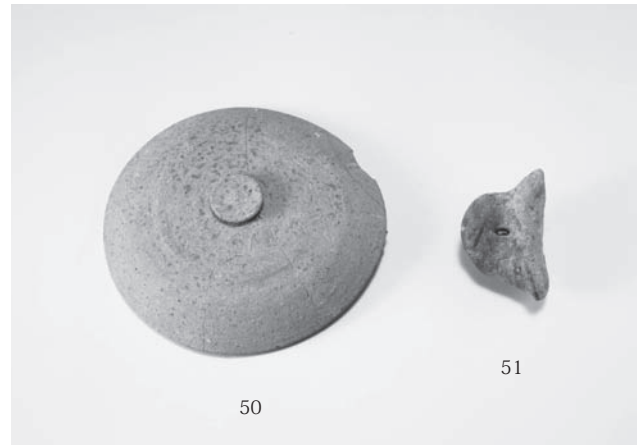
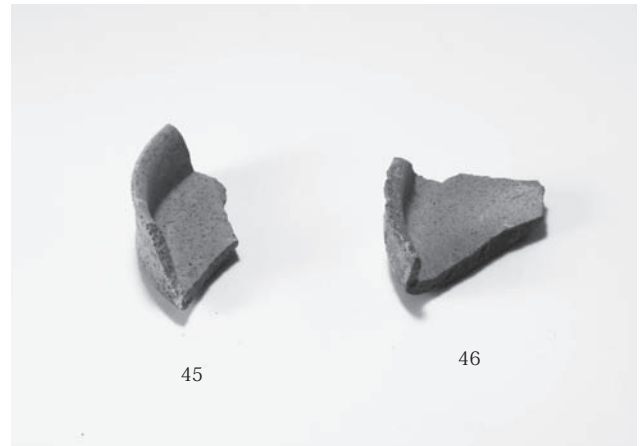
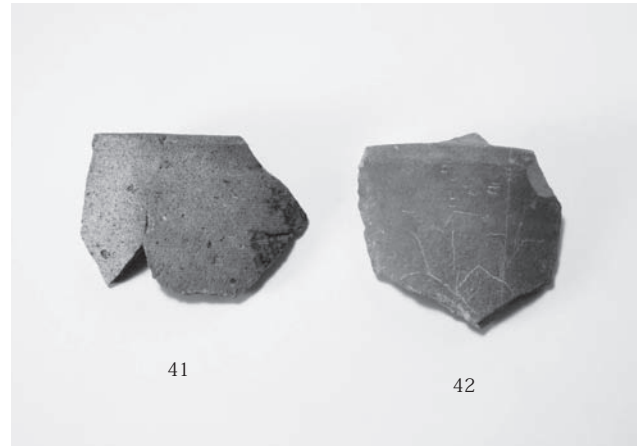
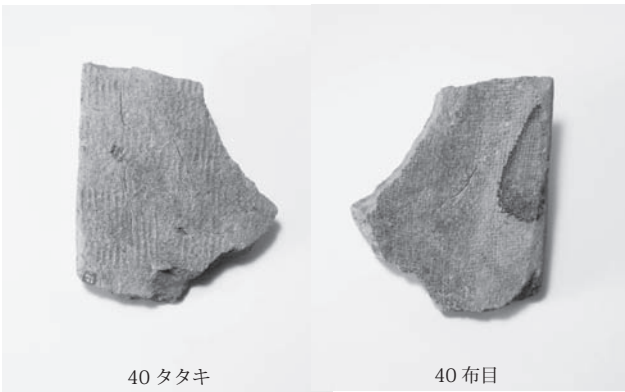
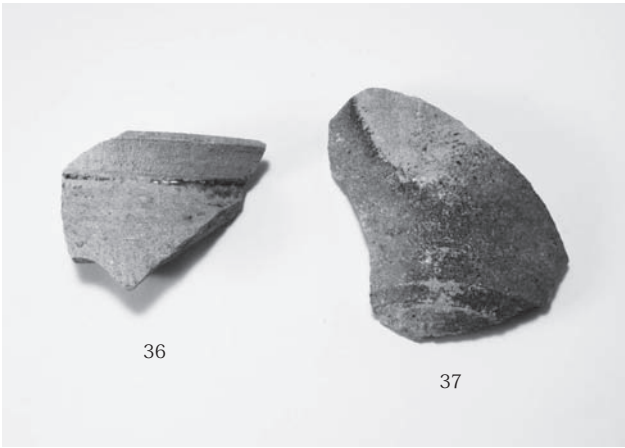


3

4









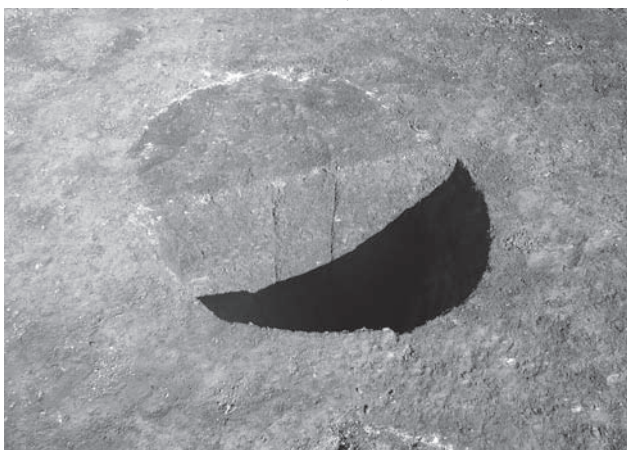
調査区 完掘全景（南より撮影）



SB11 完掘



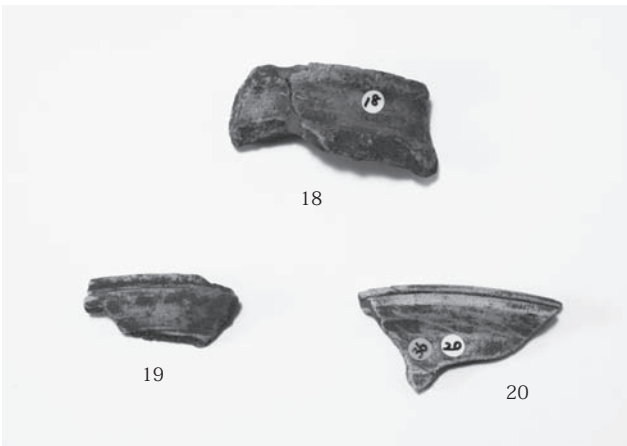
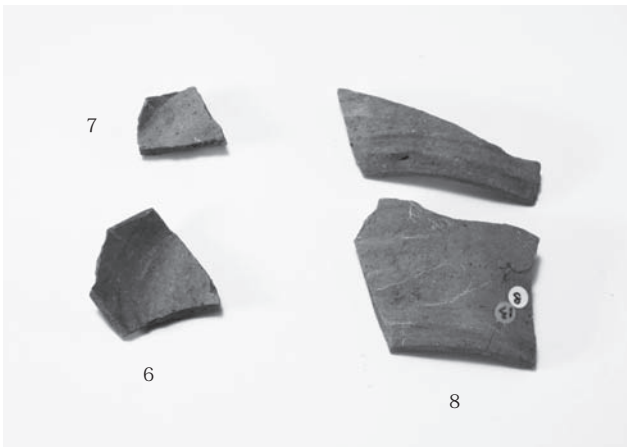
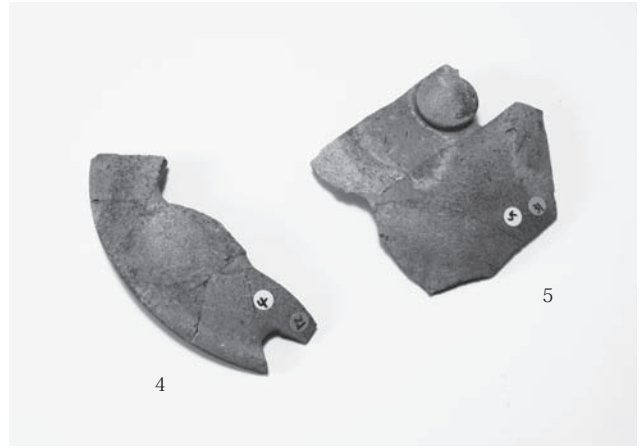
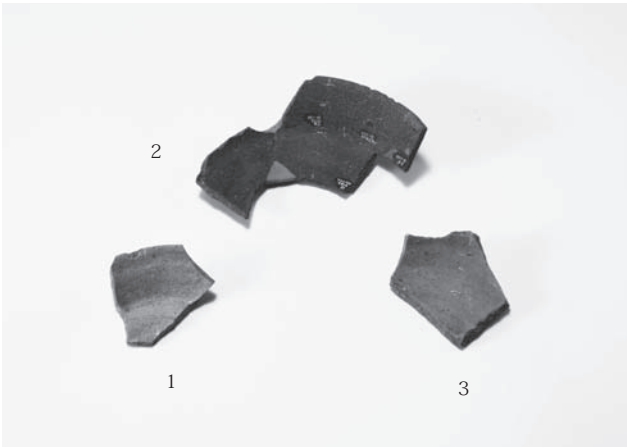
SK14 遺物出土状況

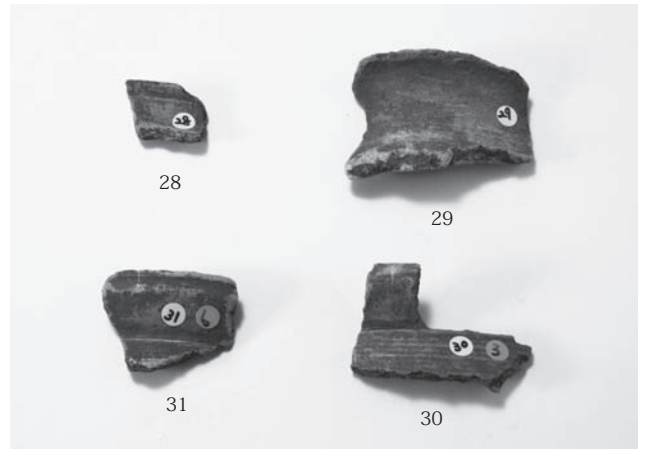


SB11 P1 半裁状況



SK14 土層断面







調査区北側1／3完掘（西より撮影）



調査区南側2／3完掘（北より撮影）



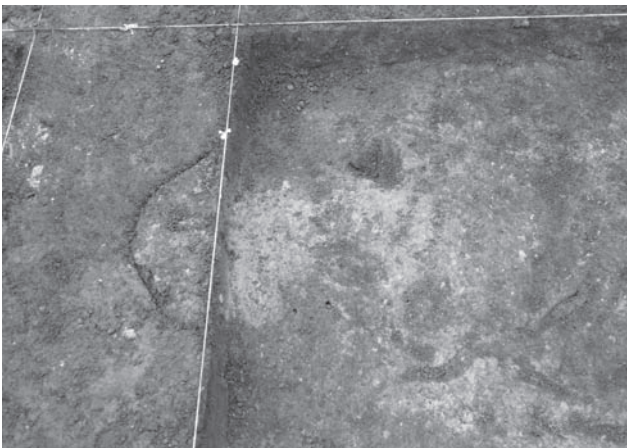
S I 1 3 完掘



S I 1 3 貼床検出状況



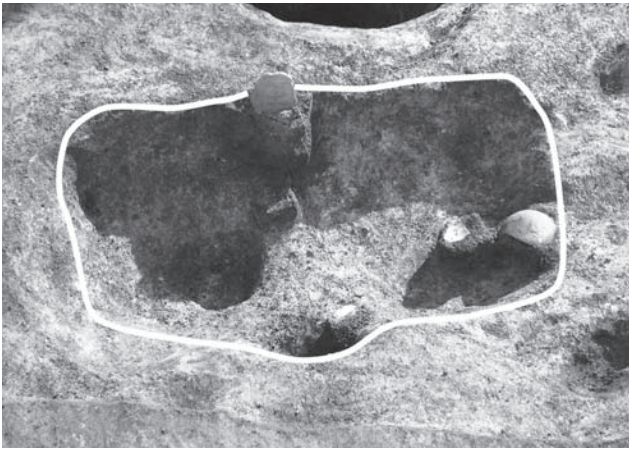
S I 1 3 焼土分布



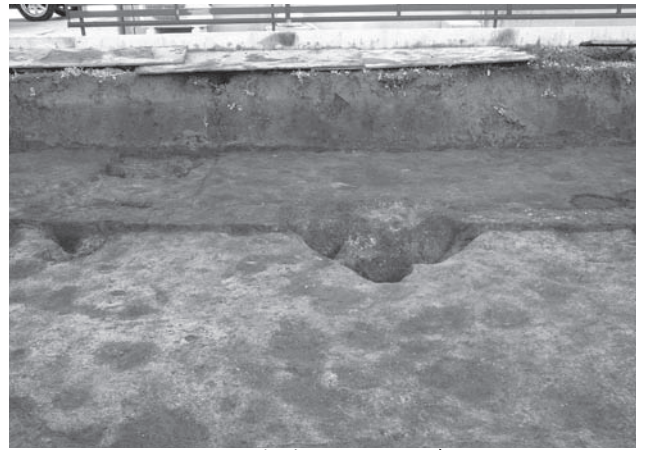
S I 1 3 床下地山被熱検出



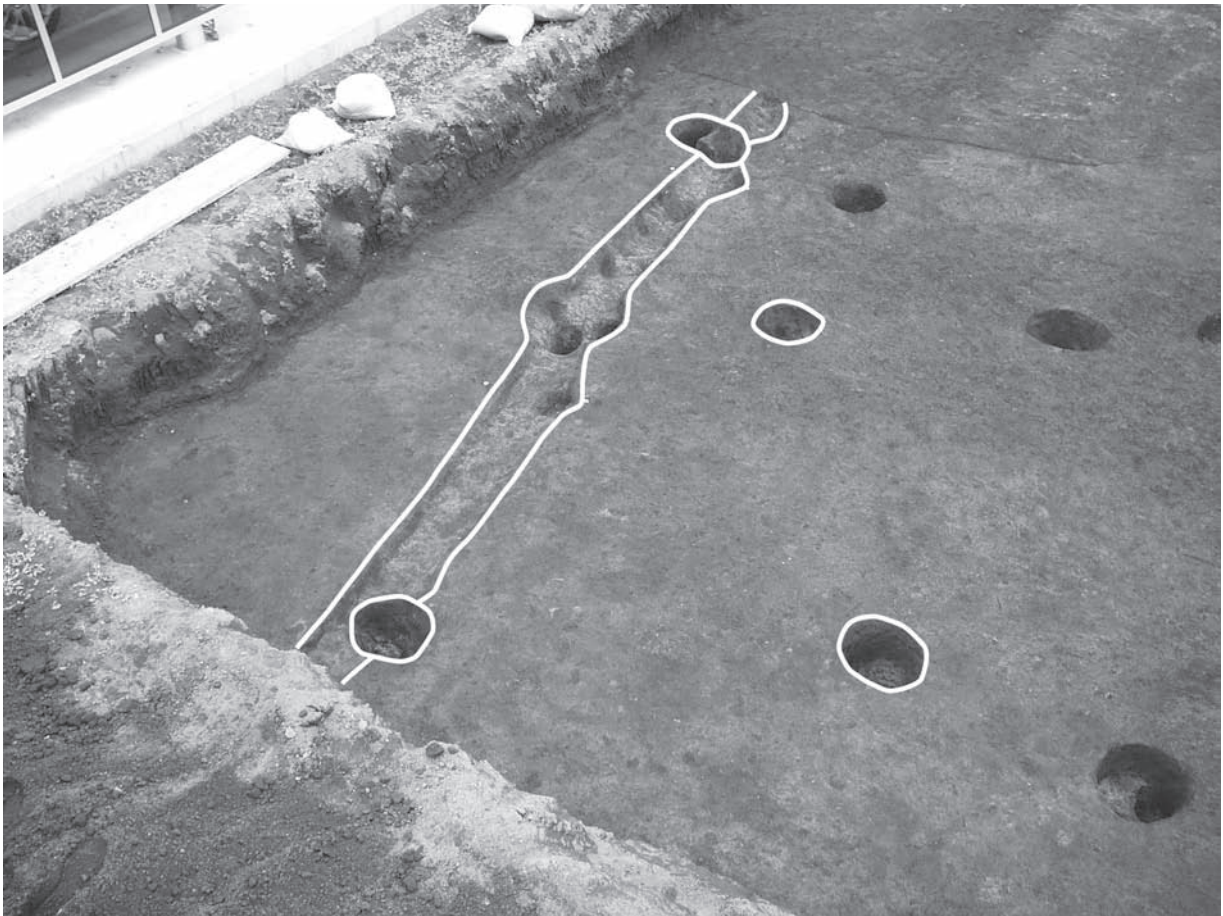
S I 1 3 掘方完掘



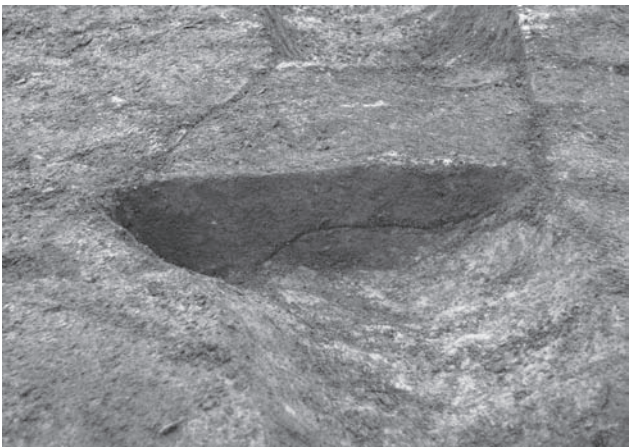
SI 13 掘方土坑



SI 13 掘方セクション南側



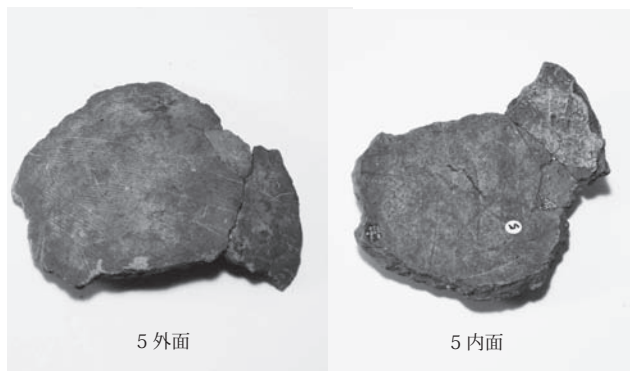
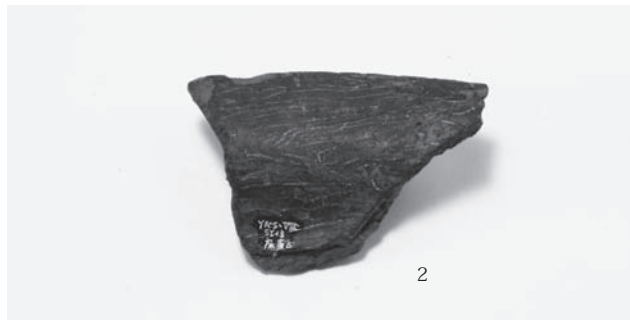
SB 12・SD 01 完掘



SD 01 Aライン土層断面



SD 01 Bライン土層断面



報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはくつちようさほうこくしょ 8
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 VIII
副書名	二ツ梨グミノキバラ窯跡群・薬師遺跡Ⅶ次・薬師遺跡Ⅷ次
巻次	
編・著者名	大橋由美子・下濱貴子・宮田 明
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒 923 - 8650 石川県小松市小馬出町 91 番地 TEL (0761) 22-4111
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたつなし 二ツ梨 グミノキバラ かまあとぐん 窯跡群	いしかわけん こまつし ふたつなしまち 石川県小松市二ツ梨町	17203		36° 19' 50"	136° 25' 51"	2008.05.08 ~ 2008.06.20 2009.07.08 ~ 2009.08.31	890	農地平地化 (個人事業)
やくし いせき 薬師遺跡 ななじ Ⅶ次	いしかわけん こまつし やぎままち 石川県小松市矢崎町	17203	03138	36° 22' 5"	136° 26' 5"	2009.10.06 ~ 2007.10.28	137	個人住宅建設
やくし いせき 薬師遺跡 はちじ Ⅷ次	いしかわけん こまつし やぎままち 石川県小松市矢崎町	17203	03138	36° 22' 11"	136° 26' 10"	2009.11.05 ~ 2009.12.01	112	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふたつなし 二ツ梨	散布地	古墳～平安		製鉄滓、瓦、窯関連遺物	
グミノキバラ かまあとぐん 窯跡群	窯跡	古墳～平安	大型土坑 1、粘土 採掘坑 8、道路状 遺構 1、焼土坑 1	須恵器、土師器	
要約	窯路に付設すると考えられる遺構群の発見。				
やくし いせき 薬師遺跡	集落跡	古墳～平安	竪穴建物 1、掘立 柱建物 2、土坑 2、 溝状遺構 1	土師器、須恵器、羽口、砥石、鍛冶滓、 製鉄滓、シジミ貝	
要約	今回の調査で、本遺跡最古段階となる古墳時代後期後半の竪穴建物を発見。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 VIII

ニツ梨ゲミノキバラ窯跡群・薬師遺跡Ⅶ次・薬師遺跡Ⅷ次

発行日 平成24年3月31日

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91 TEL (0761) 22-4111

印刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町2-32 TEL (0761) 22-7031
